

尾 漕 遺 跡

2001年

日 田 市 教 育 委 員 会



尾漕遺跡 4次調査区全景（南方向より）



尾漕遺跡 4次調査区全景（真上より）



調査区南側建物群全景



調査区東側建物群全景



調査区北側建物群全景

序 文

経済発展の中、農業の担い手不足による農村人口の減少に対しての対策として、21世紀型農業を目指すことを目的に、市内周辺区域では現在大規模なほ場整備事業が計画・実施されております。

日田市東部の池辺地区では平成8年度から事業が開始され、平成9年度にはそれに伴います発掘調査を行ってまいりました。その結果として、縄文時代から近世に至るまで、絶え間ない人々の生活の足跡を辿ることができました。

本書が、新たな農業のスタートする代償として、失われ行く地域の歴史を記録した一資料として、教育の普及・啓蒙にご活用いただければ幸いです。

調査にあたりまして、ご指導賜りました諸先生方をはじめ、ご協力を頂きました地元の皆様方、関係者の方々にたいし、心より感謝を申し上げます。

平成13年3月30日

日田市教育委員会教育長

後 藤 元 晴

例 言

1. 本書は大分県日田地方振興局より委託を受けて行った「池辺地区県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」の2である。
2. 調査中には、九州大学田中良之教授、服部英雄教授、大分短期大学佐々木章助教授、大分県教育庁文化課田中祐介氏に現地において、各専門分野からのご指導を得た。また、大分県文化課村上和氏には、本報告書を作成するにあたり、尾漕遺跡2次、5次調査区の資料提供、及び遺跡の内容についての様々なご助言をいただいた。また、平成建設合資会社の方々には、現場作業にあたって、様々な御便宜を図っていただいた。記して感謝申し上げます。
3. 本書に掲載した遺構写真は、担当者ほか文化財写真家長谷川正美氏によるものを、空中写真については、株式会社九州航空・有限会社スカイサーベイの委託によるものを使用した。また、遺物写真については、文化財写真家長谷川正美氏の委託によるものを使用した。
4. 現場での遺構実測は、中世木棺墓出土人骨を九州大学大学院生大森円・平美典が行い、その他については担当者のほか松下桂子・荏隈典子・財津真弓・北澤幾子が行った。遺物実測については、担当者が行った。また遺構・遺物トレースについては、有限会社雅企画財津香奈子氏の委託によるものを使用した。
5. 本書に掲載したプラントオパール分析については大分短期大学佐々木章助教授にお願いし、尾漕遺跡1・2号木棺墓出土人骨については、資料の保管から分析まで九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座で行い、その鑑定については同大学田中良之教授・同大学院生舟橋京子氏にお願いし、また、遺跡周辺の聞き取り調査、水がかり調査については、別府大学大学院生園田大氏にお願いした。それぞれの専門的分野からの貴重な考察資料を得ることができた。その内容については、本書の付編に掲載させていただいた。時間の限られた中で執筆いただいた諸先生方、諸氏にたいしまして、改めて記して感謝申し上げます。
6. 本書に使用した遺構図の方位については、全体図は真北、各遺構図は磁北を指す。
7. 本書の執筆編集は、若杉・渡邊の協力を得て行時が行った。

本文目次

巻頭図版

序文

例言

目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第3節 調査組織の構成	3
第4節 遺跡の立地と環境	3
第2章 調査の内容	9
第1節 調査の概要	9
第2節 遺構と遺物	9
1. 竪穴住居跡	9
2. 掘立柱建物跡	28
1) 調査区南側建物群	28
2) 調査区東側建物群	33
3) 調査区北側建物群	42
3. 溝状遺構	44
4. 畝状遺構	54
5. 柵列状遺構	54
6. 墓	55
1) 甕棺墓	55
2) 木棺墓	57
7. 土坑	59
1) 落穴状遺構	59
2) その他の土坑	61
8. その他の遺構出土遺物	68
第3章 調査のまとめ	75
付編	
プラント・オパール分析結果から見た尾漕遺跡中央部の水田開発史 大分短期大学助教授 佐々木 章	81
尾漕遺跡出土人骨について 九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座 舟橋京子・田中良之	91
尾漕遺跡周辺の地名・屋号の調査について 別府大学大学院生 園田 大	93

挿 図 目 次

第1図	ほ場整備事業区域と調査区位置図 (1/20,000)	第45図	13・14号掘立柱建物跡実測図 (1/80)
第2図	試掘調査区位置図(1/4,000)	第46図	15・16・17・18号掘立柱建物跡実測図 (1/80)
第3図	調査区周辺の遺跡分布図 (1/20,000)	第47図	19号掘立柱建物跡実測図 (1/80)
第4図	調査区遺構配置図 (1/500)	第48図	20・21・22号掘立柱建物跡実測図 (1/80)
第5図	調査区南壁土層図 (1/60)	第49図	調査区東側建物群出土遺物実測図 (1/3・1/4)
第6図	1号竪穴住居跡実測図 (1/60)	第50図	調査区北側掘立柱建物群位置図 (1/200)
第7図	1号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/4)	第51図	23号掘立柱建物跡実測図 (1/80)
第8図	2号竪穴住居跡実測図 (1/60)	第52図	調査区北側建物群出土遺物実測図 (1/3・1/4・1/6)
第9図	2号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	第53図	溝状遺構実測図 (1/1,000)
第10図	2号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3・1/4)	第54図	1号溝実測図 (1/100)
第11図	3号竪穴住居跡実測図 (1/60)	第55図	2・3号溝実測図 (1/100)
第12図	3号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/4)	第56図	4・5号溝実測図 (1/100)
第13図	4号竪穴住居跡実測図 (1/60)	第57図	8・9号溝実測図 (1/80)
第14図	4号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	第58図	11・12号溝実測図 (1/80)
第15図	4号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3・1/4)	第59図	13・14号溝実測図 (1/100)
第16図	5号竪穴住居跡実測図 (1/60)		14号溝土層図 (1/20)
第17図	5号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)	第60図	15号溝実測図 (1/80) 土層図 (1/40)
第18図	6号竪穴住居跡実測図 (1/60)	第61図	16号溝実測図 (1/100)
第19図	6号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/4)	第62図	18・19号溝実測図 (1/100)
第20図	7号竪穴住居跡実測図 (1/60)	第63図	溝出土遺物実測図1 (1/3・1/4)
第21図	7号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	第64図	溝出土遺物実測図2 (1/3・1/4)
第22図	7号竪穴住居跡出土遺物実測図1 (1/3・1/4)	第65図	畝状遺構実測図 (1/80)
第23図	7号竪穴住居跡出土遺物実測図2 (1/3)	第66図	柵列状遺構実測図 (1/80)
第24図	8号竪穴住居跡実測図 (1/60)	第67図	甕棺墓実測図 (1/30)
第25図	8号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	第68図	甕棺実測図 (1/40)
第26図	8号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3・1/4)	第69図	1号木棺墓実測図 (1/15)
第27図	9号竪穴住居跡実測図 (1/60)	第70図	2号木棺墓実測図 (1/15)
第28図	9号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	第71図	調査区内土坑配置図 (1/1,000)
第29図	9号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3・1/4)	第72図	落穴状遺構実測図 (1/30)
第30図	10号竪穴住居跡実測図 (1/60)	第73図	土坑実測図1 (1/30)
第31図	10号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	第74図	土坑実測図2 (1/30)
第32図	10号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3・1/4)	第75図	土坑実測図3 (1/30)
第33図	11号竪穴住居跡実測図 (1/60)	第76図	土坑実測図4 (1/30)
第34図	11号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	第77図	土坑出土遺物実測図 (1/3・1/4・1/6)
第35図	11号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3・1/4)	第78図	その他の遺構出土遺物実測図1 (1/3・1/4)
第36図	調査区南側掘立柱建物群位置図 (1/200)	第79図	その他の遺構出土遺物実測図2 (2/3・1/2)
第37図	1・2号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	第80図	調査区周辺の遺跡分布図 (1/5,000)
第38図	3・4号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	第81図	調査区内時期別遺構変遷図 (1/1,500)
第39図	5・6号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	第82図	プラント・オパール分析試料採取地点位置図 (1/1,000)
第40図	調査区南側建物群出土遺物実測図 (1/3・1/4)	第83図	プラント・オパール分析資料採取土層図 (1/1,000)
第41図	調査区東側掘立柱建物群位置図 (1/300)	第84図	地名・屋号・水利分布図 (1/5,000)
第42図	7・8号掘立柱建物跡実測図 (1/80)		
第43図	9・10号掘立柱建物跡実測図 (1/80)		
第44図	11・12号掘立柱建物跡実測図 (1/80)		

表 目 次

第1表 遺跡出土土器観察表1
第2表 遺跡出土土器観察表2

第3表 遺跡出土土器観察表3
第4表 遺跡出土土器観察表

図 版 目 次

巻頭カラー図版1

(上) 尾漕遺跡4次調査区全景(南方向より)
(下) 尾漕遺跡4次調査区全景(真上より)

巻頭カラー図版2

(上) 調査区南側建物群全景
(中) 調査区東側建物群全景
(下) 調査区北側建物群全景

本文中挿入写真

写真1 調査区南壁土層
写真2 7号竪穴住居跡カマド正面土層
写真3 7号竪穴住居跡カマド側面土層
写真4 8号竪穴住居跡カマド正面土層
写真5 8号竪穴住居跡カマド側面土層
写真6 9号竪穴住居跡土層

写真7 10号竪穴住居跡カマド正面土層
写真8 14号溝土層
写真9 15号溝土層
写真10 1号木棺墓人骨出土状況
写真11 2号木棺墓人骨出土状況

図版1

(左上) 1号竪穴住居跡
(左2段目) 2号竪穴住居跡カマド
(左3段目) 4号竪穴住居跡
(左下) 5号竪穴住居跡

(右上) 2号竪穴住居跡
(右2段目) 3号竪穴住居跡
(右3段目) 4号竪穴住居跡カマド
(右下) 5号竪穴住居跡内遺物出土状況

図版2

(左上) 6号竪穴住居跡
(左2段目) 7号竪穴住居跡
(左3段目) 7号竪穴住居跡カマド
(左下) 8号竪穴住居跡

(右上) 6号竪穴住居跡内遺物出土状況
(右2段目) 7号竪穴住居跡カマド
(右3段目) 7号竪穴住居跡内遺物出土状況
(右下) 8号竪穴住居跡カマド

図版3

(左上) 8号竪穴住居跡カマド
(左2段目) 9号竪穴住居跡
(左3段目) 10号竪穴住居跡
(左下) 11号竪穴住居跡

(右上) 8号竪穴住居跡内遺物出土状況
(右2段目) 9号竪穴住居跡カマド
(右3段目) 10号竪穴住居跡カマド
(右下) 11号竪穴住居跡カマド

図版4

(左上) 1号掘立柱建物跡
(左2段目) 3・4号掘立柱建物跡
(左3段目) 8～12号掘立柱建物跡
(左下) 12号掘立柱建物跡

(右上) 2号掘立柱建物跡
(右2段目) 5・6号掘立柱建物跡
(右3段目) 9号掘立柱建物跡
(右下) 13号掘立柱建物跡

図版5

(左上) 14号掘立柱建物跡
(左2段目) 16号掘立柱建物跡
(左3段目) 18・19号掘立柱建物跡
(左下) 調査区北側建物群

(右上) 15号掘立柱建物跡
(右2段目) 17号掘立柱建物跡
(右3段目) 20号掘立柱建物跡
(右下) 建物柱根検出状況

図版 6

(左上) 1号溝と畝状遺構
(左2段目) 11・12号溝
(左3段目) 14号溝と建物柱穴群
(左下) 15号溝遺物出土状況

(右上) 7～9号溝
(右2段目) 12号溝と東側建物群
(右3段目) 15号溝
(右下) 柵列状遺構

図版 7

(左上) 1号甕棺墓
(左2段目) 2号甕棺墓
(左3段目) 1号木棺墓
(左下) 1号木棺墓

(右上) 1号甕棺墓
(右2段目) 3号甕棺墓
(右3段目) 1号木棺墓人骨出土状況
(右下) 2号木棺墓人骨出土状況

図版 8

(左上) 4・5号土坑
(左2段目) 15号土坑
(左3段目) 6号土坑
(左下) 24号土坑

(右上) 8号土坑
(右2段目) 6号土坑
(右3段目) 11号土坑
(右下) 27号土坑

図版 9 遺跡出土遺物 1

図版 10 遺跡出土遺物 2

図版 11 遺跡出土遺物 3

図版 12 遺跡出土遺物 4

図版 13 遺跡出土遺物 5

図版 14 遺跡出土遺物 6

図版 15 遺跡出土遺物 7

図版 16 遺跡出土遺物 8

図版 17 遺跡出土遺物 9

図版 18 発掘調査に参加された作業員の皆様

第1章 はじめに

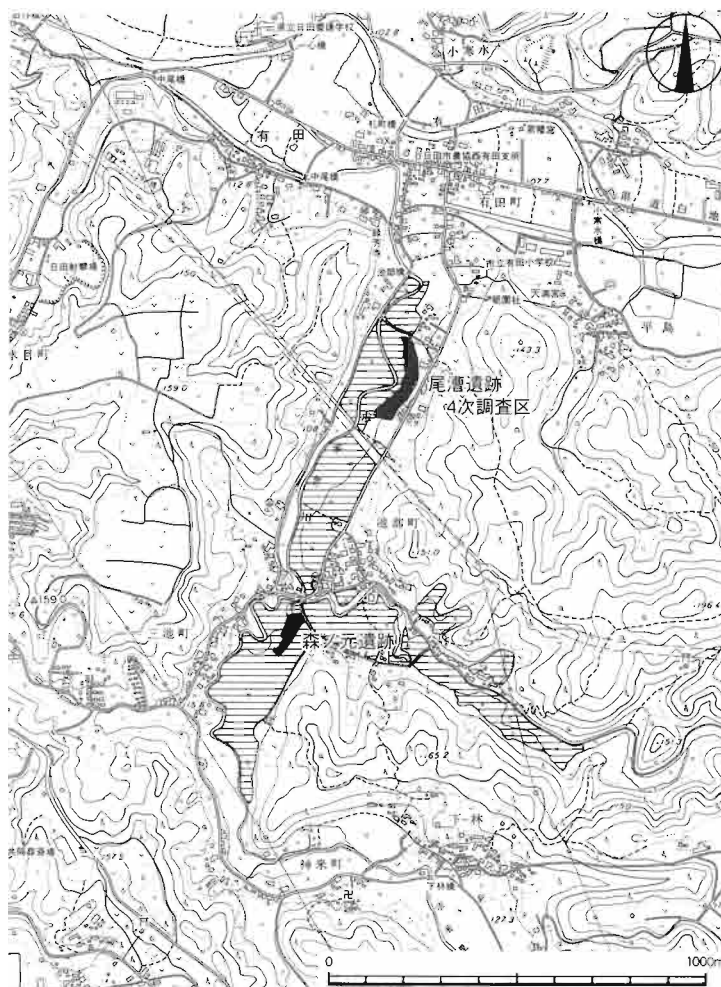
第1節 調査に至る経過

池辺地区県営ほ場整備事業は、大分県日田地方振興局耕地課が平成8年度から作付コストの縮減、土地の流動化を図ることを目的に進められてきた。実施区域は日田市池辺町・三池町・有田町の3町に達し、事業実施の総面積は約20.5haに及ぶ。

このほ場整備事業と平行して大分県日田土木事務所では、ほ場整備事業地の中央を蛇行して走る求来里川を直線化し、河川の氾濫を防ぐ目的で河川改修工事が予定され、また日田市でも、この地域に隣接して造成工事が行われたウッドコンビナートのアクセス道路として、市道田島有田線建設工事が急ピッチで進められていた。これらの一部がこのほ場整備事業区域内を横断する計画であったため、各事業担当課所、及び大分県教育庁文化課を交えて協議を行い、市文化課がほ場整備の範囲にかかるそれらの各事業実施予定区域も含めて、平成9年度に試掘調査を実施することになった。

試掘調査については、ほ場整備実施予定地の全区域を工事の関係上、休耕地としていたことから、平成8年度に行った試掘調査区以外の全区域を対象とし、調査の工程で試掘区域をAからDの4つに分けて実施した。試掘調査の実施期間は平成9年6月22日から7月3日まで行い、この間の総トレンチ数はA区35本、B区29本、C区9本、D区19本の計92本である。なお、A区については既に森ノ元遺跡で報告しているのを、

ここではBからD区までについて触れる。B区は池辺集落の西側から大分自動車道までの区間で、延べ29本のトレンチのうち18・20号トレンチからは竪穴住居跡とみられる遺構が確認されたのをはじめ延べ12本から遺構が検出された。次にC区は大分自動車道より北側で求来里川より西側の舌状に微高地が張り出している区間で、延べ9本のトレンチのうち、4・6・7号トレンチから溝状遺構が検出された。また、D区はC区の求来里川を挟んで反対側の区間で、延べ19本のトレンチのうち、14号トレンチからは竪穴住居跡とみられる遺構が、15号トレンチからは溝状遺構が確認されたのをはじめ、延べ4本のトレンチから遺構が検出された。(第2図)



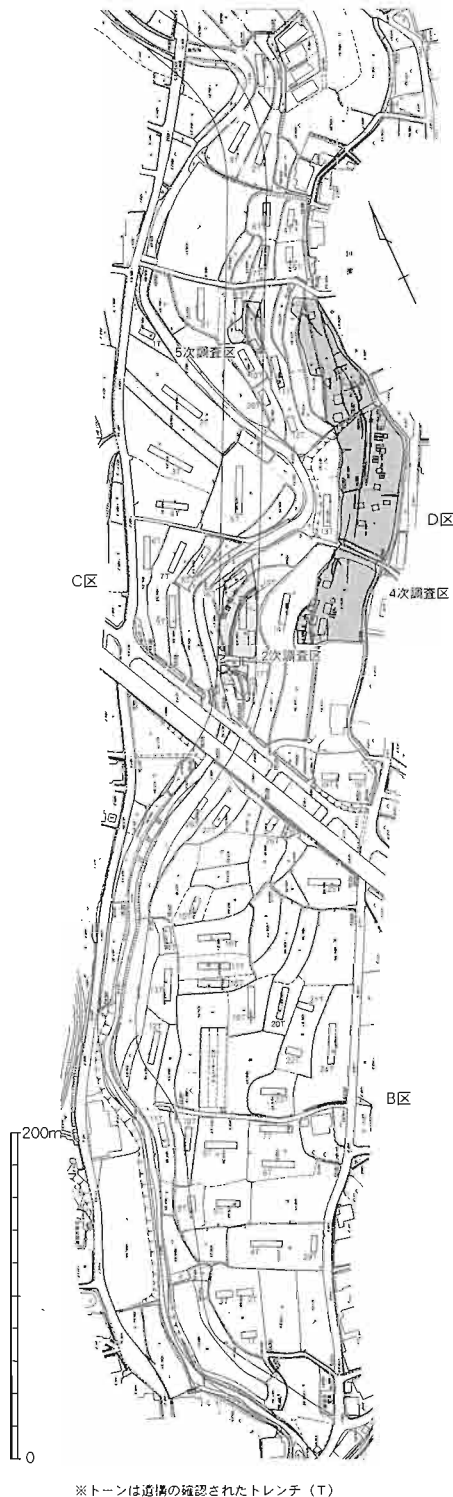
第1図 ほ場整備事業区域と調査区位置図 (1/20,000)

この結果、B・C・D各区において遺跡の存在が明らかとなり、それらの区間においての遺跡の取り扱いについて再度協議を行った。

協議では遺跡の広がりなどを加味した上で遺跡の範囲をB区で22,000㎡、C区で3,000㎡、D区で13,100㎡としたが、D・C区は盛土工法により、遺構面が保存されることから調査は行わず、調査対象範囲はD区のは場整備で切土となる区域と、求来里河川改修工事により掘削される15トレンチ周辺区間に関して実施することとなり、河川改修区域については大分県教育庁文化課が、は場整備区域については、森ノ元遺跡分と合わせて市教育委員会文化課が実施することとなった。その後、平成9年7月31日に大分県日田地方振興局と尾漕遺跡発掘調査に関する委託契約書を取り交わし、平成9年9月22日から同年11月5日まで発掘調査を実施した。なお、当初この調査区を尾漕遺跡4地点としていたが、この尾漕遺跡1帯は先に大分自動車道建設に先立って大分県文化課が調査を行っており、県文化課と協議を行い、その区域を尾漕遺跡1次調査区とし、この河川改修区域を2次調査区とし、また試掘を行ったB・C区についても周知遺跡尾漕遺跡内に含まれるため、この区域を3次調査区とし、今回発掘調査を実施したD区を4次調査区とすることになった。さらに、4次調査区作業中に河川改修工事区域において遺構が発見され、その後に大分県文化課が発掘調査を行った区域を5次調査区としている。

第2節 調査の経過

発掘調査は、調査に至る経過の中で触れたように、D区の切土範囲を調査対象区域として設定した。当初発掘調査対象面積は4,700㎡であったが、表土除去途中に業者より工法変更により切土範囲が増えた報告があったため、県耕地課と協議を行いその部分も合わせて調査対象範囲とした。これにより調査対象面積は7,500㎡となった。機械による遺構検出作業は9月22日から開始し、調査区南側より順に行っていった。9月24日からは器材を搬入し、作業員を投入して遺構精査を開始した。10月7日によりやく機械による遺構検出作業が完了したが、その間調査区南側から順に遺構の掘り下げ作業を平行して進めた。各遺構の完掘後は、写真撮影、実測作業を随時行い、10月23日には大部分が掘りあがり、空中写真撮影を実施した。その後、調査は11月5日にすべての発掘業務を完



第2図 試掘調査区位置図 (1/4,000)

了した。なおこの間、中世木棺墓より出土した人骨については10月24日に九州大学田中良之教授に、古代から中世にかけての景観調査については10月30日に九州大学服部英雄教授に、調査区内遺構堆積の土壌分析については11月5日に大分短期大学佐々木章助教授に、それぞれ専門分野からの現地指導を頂いた。また、整理作業は平成9年12月1日～平成10年2月27日、平成10年4月3日～10月23日まで行い、報告書作成については、平成12年度に実施した。

第3節 調査組織の構成

調査主体	日田市教育委員会
調査責任者	日田市教育長 加藤正俊（～平成12年11月14日） 後藤元晴（同年11月15日～）
調査事務	日田市教育委員会文化課課長原田俊隆 同課長補佐長尾幸夫（～平成11年3月）、同課長補佐石井英信（平成11年4月～） 同主任森山一宏（～平成10年3月）、同主査佐々木豊文（平成10年4月～）
調査員	同主任土居和幸（～平成12年3月）行時志郎、吉田博嗣 同主事松下桂子（～平成10年3月）、永田裕久（～平成10年7月） 若杉竜太（平成11年1月～）、渡邊隆行（平成12年4月～）
調査作業員	高倉厚巳、高倉美津子、鍛冶谷アサヨ、菅田クマエ、財津真弓、北澤幾子、酒井光敏、荏隈マサコ、伊藤キヨ子、吉長ハルエ、吉長澄江、木下富三郎、田中昇、穴見基彦、梶原シゲ子、菅田ミヤコ、高倉ハナ子、梶原利徳、荏隈典子、石田スズ子、園田光子、中野ヨシ子、佐藤カスミ、長谷部喜吉、中島トミエ、財津静子、財津勲子、舟橋京子、五島勇美子、武内アイ子、小野多美子、松本トキエ、中島カズ子、大森円、平美典
整理作業員	穴井綾子、稲尾須美子、伊藤弘子、小笠和美、酒井貴代美、鍛冶谷節子、石松裕美、河原直美、桑野菊美、川原君子、坂本和代、平川優子、宇野富子、聖川暢子、田中静香、石橋理恵、荏隈香苗、桜木直美、和田ケイ子、黒木千鶴子、原順子

第4節 遺跡の立地と環境

尾漕遺跡は日田市東部、有田川の支流である求来里川の右岸、沖積微地高地上に立地する。求来里川は、天瀬町馬原付近に源を発し、西走して日田市に入り、そこから高尾原・元宮原・町野原、中尾原などの平坦な台地の間を縫うように蛇行しながら北へ向かい中尾町付近で有田川に合流する。この求来里川の浸食作用により、川筋には幅約200から300mを測る断面「U」字状の谷地形が形成され、その沖積地を利用して、水稻や畑などの耕作が盛んに行われている。現在尾漕遺跡周辺に広がる水田への水口は、求来里川のさらに支流である松野川に井関が設けられ、そこから引き入れられているが、この地区の丘陵斜面となっている高い位置には自然の湧水を利用して掘られた溜池が現在でも数ヶ所残っている。これらの溜池は、池部町や三池町の語源となり、現在でも貴重な水資源として確保され、地区の人々に大切に守られ続けている。この地区に井関がつくられ、灌漑施設が整備される以前は、これらの溜池を中心として、小規模ながら水田経営を行っていたようである。

さて、今回調査を行った尾漕遺跡4次調査区では、縄文時代から近世までの各時代の遺構が重複して確認されたが、この遺跡周辺ではここ数年、大分自動車道建設、ウッドコンビナート建設、市道建設などの各種開発事業に伴って、発掘調査が実施されてきている。尾漕遺跡で確認された遺構は、

それらの遺跡と時期的に符号し、関わり合いを持ちながら展開していったと考えられるため、ここでは周辺遺跡の調査成果として時代ごとにまとめておくことにする。

縄文時代

早期の遺跡としては、石ヶ迫遺跡がある。この遺跡は沖積地東側の丘陵を隔てた谷部の奥に立地し、ここでは集石遺構とともに楕円押型文土器などが出土している。遺跡の東側には2つの溜池があり、ここを境に北側は凝灰岩の岩盤となり、南側は安山岩を含んだ赤土の土壤となり、その境目から地下水が湧き出ている。この自然湧水のある谷の近くに生活地を営んでいたようである。後期から晩期の遺跡としては、石ヶ迫遺跡のほか、有田塚ヶ原遺跡、森ノ元遺跡などがある。これらの遺跡では、生活遺構は確認されていないものの、落穴状遺構や埋甕が確認されている。有田塚ヶ原遺跡は、石ヶ迫遺跡を見下ろす丘陵上にあり、計37基の落穴状遺構が検出され、中からは土器片のほか、石匙なども出土している。石ヶ迫遺跡では後期の集石も確認されているので、狩猟活動の場として使われていたのであろう。また森ノ元遺跡は、尾漕遺跡より求来里川を上流にさかのぼった沖積微高地上にある。計4基の落穴状遺構と晩期の埋甕が1基確認されている。埋甕の存在は近くにこの時期の集落の存在を示すものとして注目される。

弥生時代

前期の遺跡はまだ発見されていないが、中期の遺跡としては祇園原遺跡、平島遺跡E地点がある。祇園原遺跡は沖積地に向かって舌状に張り出したほぼ平坦な丘陵上に立地し、2次にわたる調査で中期後半から後期中頃にかけての堅穴住居跡24軒、1間×2間の高床倉庫跡3棟、大型掘建柱建物跡3棟、中型掘建柱建物跡2棟、1間×1間の小型掘建柱建物跡8棟、小児用甕棺墓5基、方形周溝遺構1基などが確認され、この時期の中心的な集落の一つと考えられる。また、平島遺跡E区は祇園原遺跡の北側斜面を下った低丘陵上に立地し、堅穴住居跡が1軒確認されている。後期の遺跡としては、平島遺跡A・B区やD・E区がある。平島遺跡A・B区は有田川左岸の沖積微高地上に立地し、後期中頃から終末の多数の堅穴住居跡とともにそれを囲むと推定される環濠が確認されている。また、平島遺跡D区はE区に隣接し、大型成人用甕棺墓3基、箱式石棺墓2基、石蓋土坑墓1基などが確認され、E区では堅穴住居跡1軒のほか、大型成人用甕棺墓1基、石蓋土坑墓1基が確認されている。

古墳時代

前期の遺跡はまだ発見されていないが、中期の遺跡としては石ヶ迫遺跡・大迫遺跡・尾漕2号墳・尾漕古墳などがある。石ヶ迫遺跡では5世紀中頃の堅穴住居跡が1軒のみ確認されている。大迫遺跡は中尾原台地から北へ向かって派生するほぼ平坦な尾根筋上にあり、5世紀後半から末にかけての石棺墓1基、土坑墓23基（石蓋を伴うもの15基）が確認されている。この尾根筋をやや下りた位置には、凝灰岩の石棺を主体部にもつ中尾古墳群がある。この古墳も5世紀代の古墳と考えられ、尾根筋一帯に同時期頃の墳墓群の連なって存在していた可能性がある。尾漕2号墳は、その中尾古墳群と求来里川を挟んで対峙する尾根の鞍部に築かれた4世紀末から5世紀前半にかけての古墳である。直径約25mの円墳で、凝灰岩の箱式石棺を主体部にもつ。2基の主体部のうち1基からは人骨3体と素環頭大刀1口、刀子などが出土しており、この地域で、これまで発見された中では最も古い古墳である。尾漕古墳は、尾漕2号墳と尾根を一つたがえて南側に築かれた5世紀末の円墳で、主体部は単室構造の横穴式石室である。後期になると、長迫遺跡A～C地点、尾漕遺跡1・2・5・

6次調査区、平島遺跡A・B・D・E地点、塔ノ本古墳、有田塚ヶ原古墳、平島横穴墓群などがある。長迫遺跡は、尾漕遺跡の東側に隣接し、祇園原遺跡や尾漕2号墳のある丘陵や尾根の間に挟まれた小谷に立地する。2次にわたる調査で6世紀後半から末にかけての竪穴住居跡や竪穴遺構が多数確認されている。また、この遺跡からは、鞆羽口や鉄宰などの鍛冶関連遺物も住居跡などから出土している。尾漕遺跡1次調査区は、4次調査区の南側、丘陵裾部に位置し、やはり6世紀後半代の竪穴住居跡が数軒確認されている。尾漕遺跡2次調査区は、求来里川右岸の河岸段丘上に位置し、6世紀後半代の幅約2m、深さ約90cmの溝が、ほぼ同じ深さで求来里川と同じ方向で弧状に掘られ、その西側にはやはり同時期の4棟の総柱建物群と1軒の竪穴住居跡が溝方向と平行して並んで確認されている。尾漕遺跡5次調査区は4次調査区北端から20mほど西へ下った位置にあり、6世紀後半代の竪穴住居跡が2軒確認され、1次調査区の南側に隣接した6次調査区でも6世紀後半代の竪穴住居跡が1軒確認されている。このほか、少し離れた平島遺跡A・B地点では6世紀代を中心とした竪穴住居跡が多数確認されている。墳墓について見ると、平島D・E区で6世紀代の古墳の存在が確認され、D区の南側丘陵緩斜面に6世紀代に築造された塔ノ本古墳では単室構造の横穴式石室が確認されている。さらに東側丘陵平坦部に6世紀後半代に築造された有田塚ヶ原古墳でも複室構造の横穴式石室が確認されている。また、石ヶ迫遺跡よりもさらに谷の最深部に築かれた平島横穴墓群では6世紀中頃から7世紀前半にかけて計86基の横穴墓がまとまって確認されている。

古代

長迫遺跡A～D区、石ヶ迫遺跡、クビリ遺跡、有田塚ヶ原遺跡、尾漕遺跡1次調査区などがある。長迫遺跡では、すべての調査区から8世紀代の竪穴住居跡が確認されている。石ヶ迫遺跡では谷奥のB区で8世紀から9世紀にかけての竪穴住居跡が確認され、谷出口に近いA区では当該時期の水田遺構と水路が検出されている。その石ヶ迫遺跡より分岐した谷の中央にあるクビリ遺跡では、8世紀から12世紀にかけての竪穴住居跡や掘立柱建物群が確認され、この中からは鉄宰や鞆羽口などの鍛冶関連遺物が出土している。丘陵上にある有田塚ヶ原遺跡では、8世紀代の掘立柱建物群が5棟並んで確認されている。尾漕遺跡1次調査区でも、8世紀代の竪穴住居跡が確認されている。

中世

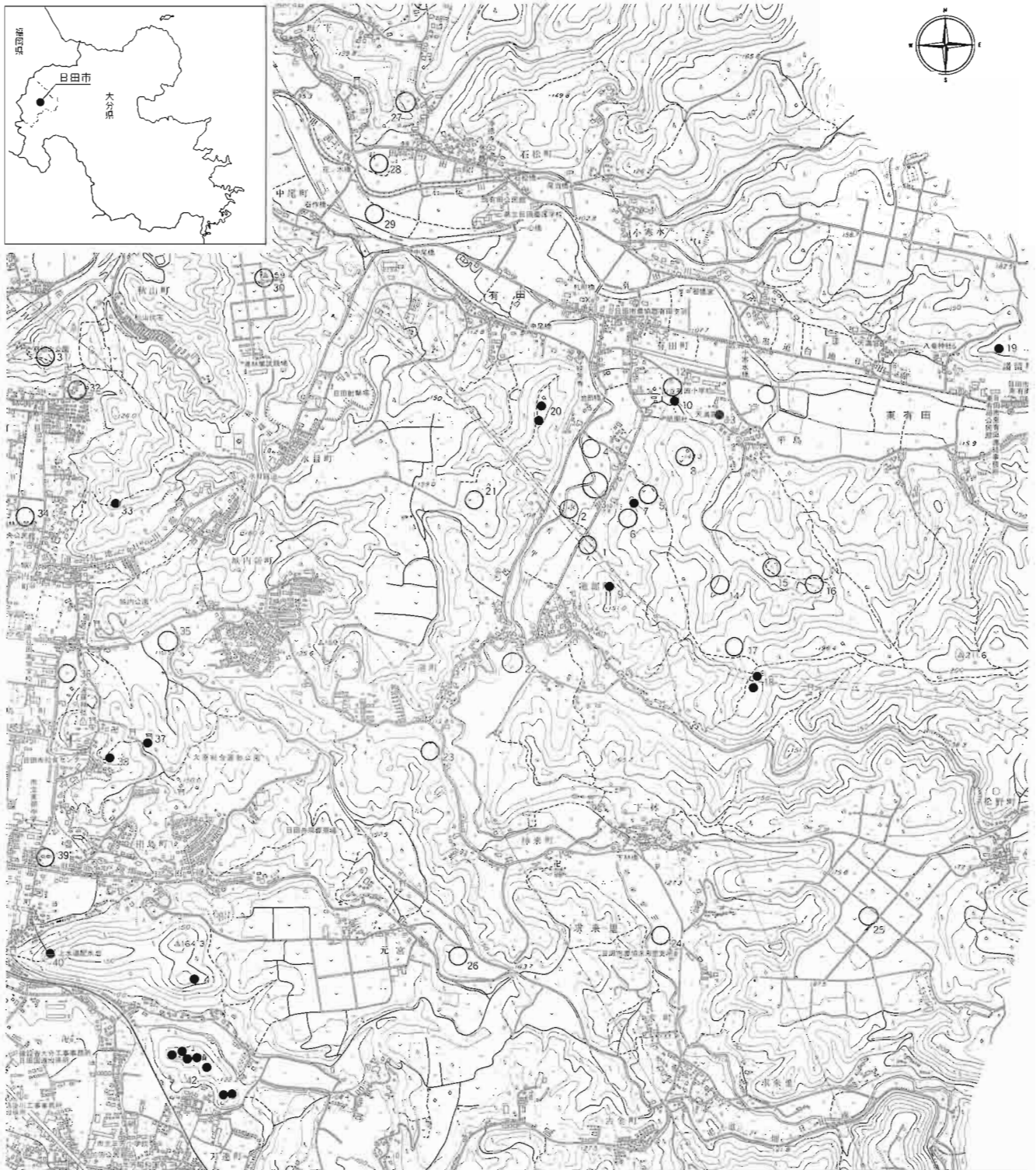
尾漕遺跡1次調査区、森ノ元遺跡、長迫遺跡A～C地点、平島遺跡E区などがある。尾漕遺跡1次調査区では、12世紀後半代の土坑墓1基、15世紀中頃の土坑墓1基が確認されている。森ノ元遺跡では、12世紀後半から13世紀にかけての掘立柱建物跡計15棟、土坑墓1基が確認されている。掘立柱建物跡は大きく2つの建物群に分かれ、「口」字型を呈し、屋敷地を構成していたと考えられる。長迫遺跡では12世紀後半から13世紀にかけての数基の竪穴遺構が確認されている。平島遺跡E区では4棟の掘立柱建物群が確認されている。

近世

尾漕遺跡1・6次調査区、祇園原遺跡などがある。尾漕遺跡1次調査区では6棟の掘立柱建物群が確認されている。また隣接する6次調査区内においても近世の掘立柱建物跡が数棟確認されている。祇園原遺跡では、1・2次合わせて、59基の木棺墓が確認されている。

参考文献

『平成6～10年度 日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会1996～2000 村上久和編『尾漕遺跡2次・5次』大分県教育委員会2000 友岡信彦編『大迫遺跡』大分県教育委員会1997 友岡信彦編『尾漕遺跡群・有田塚ヶ原古墳群』大分県教育委員会1998 他



- | | | | |
|--------------|---------------|-------------|--------------|
| 1. 尾漕遺跡1次 | 10. 塔ノ本古墳 | 19. 城山古墳 | 28. 内ノ下遺跡 |
| 2. 尾漕遺跡2次 | 11. 平島遺跡A～C地点 | 20. 中尾古墳群 | 29. 川原田遺跡 |
| 3. 尾漕遺跡4次 | 12. 平島遺跡D・E地点 | 21. 中尾原遺跡 | 30. 佐寺原遺跡 |
| 4. 尾漕遺跡5次 | 13. 平島古墳 | 22. 森ノ元遺跡 | 31. 大蔵古城跡 |
| 5. 長迫遺跡A～C地点 | 14. クビリ遺跡 | 23. 馬形遺跡 | 32. 慈眼山瀬戸口遺跡 |
| 6. 長迫遺跡D地点 | 15. 石ヶ迫遺跡 | 24. 求来里平島遺跡 | 33. 丸山古墳 |
| 7. 尾漕2号墳 | 16. 平島横穴墓群 | 25. 町野原遺跡 | 34. 上ノ馬場遺跡 |
| 8. 祇園原遺跡 | 17. 有田塚ヶ原遺跡 | 26. 元宮遺跡 | 35. 赤迫遺跡 |
| 9. 尾漕1号墳 | 18. 有田塚ヶ原古墳群 | 27. 大行事遺跡 | 36. 大波羅遺跡 |
| | | | 37. 丸尾神社古墳 |
| | | | 38. 薬師寺堂山古墳 |
| | | | 39. 会所宮遺跡 |
| | | | 40. 鳥羽塚古墳 |
| | | | 41. 北向古墳 |
| | | | 42. 法恩寺古墳群 |

第3図 調査区周辺の遺跡分布図 (1/20,000)



第4図 調査区遺構配置図 (1/500)

第2章 調査の内容

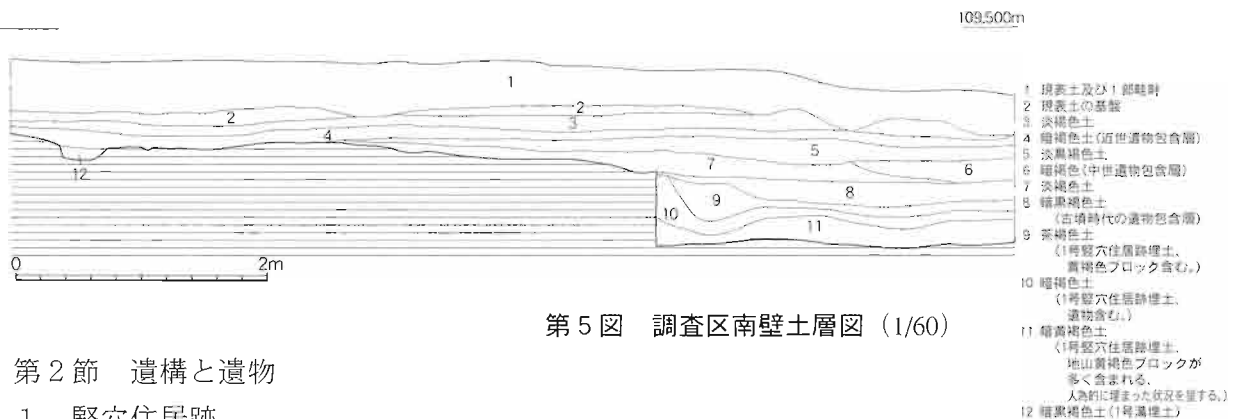
第1節 調査の概要

調査区は、工事予定地の中でも最も高い位置にあたり、調査範囲は東西で最長約40m、南北で最長約210mを測る。地形は、求来里川の川筋へ向かって緩やかに傾斜しており、調査区の最も高い位置と低い位置での比高差は約1.5mを測る。調査区東部はほぼ平坦で、現水田の盤土層をとりぞくとピットや土坑がまばらに検出されたにすぎないが、これは水田造成の際に削平にされたためと考えられる。これに対して地形が傾斜していく西側では、土層図(第5図)にみるように1号溝西側より古墳時代以降の遺物を含んだ包含層が何層にも堆積している状況が確認された。この包含層の下からは黄褐色を呈する地山面があらわれ、これを掘り込む形で多数の遺構が検出された。遺構検出作業はこの面で広げて行っている。

調査区の中からは、竪穴住居跡11軒、掘立柱建物23棟、溝状遺構19条、柵列状遺構1列、畝状遺構1基、小児用甕棺墓3基、木棺墓2基、土坑30基(落穴状遺構4基を含む)の他、多数の柱穴などの遺構が検出されている。出土遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、染付、輸入陶磁器類などのほか、石鏃、2次加工剥片、打製石斧、石庖丁、紡錘車、石臼などの石器類、青銅製懸仏、鉄滓などが出土している。



写真1 調査区南壁土層



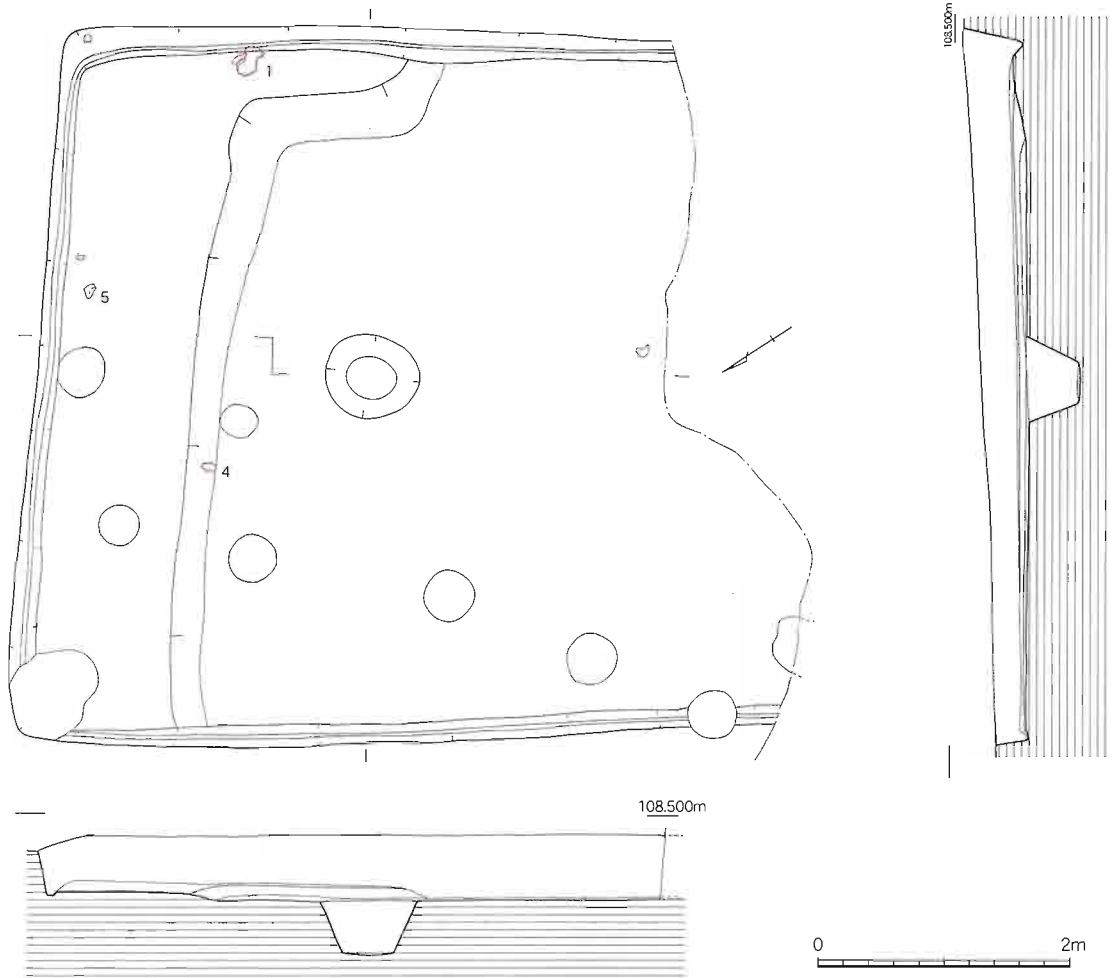
第5図 調査区南壁土層図(1/60)

第2節 遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡(第6図)

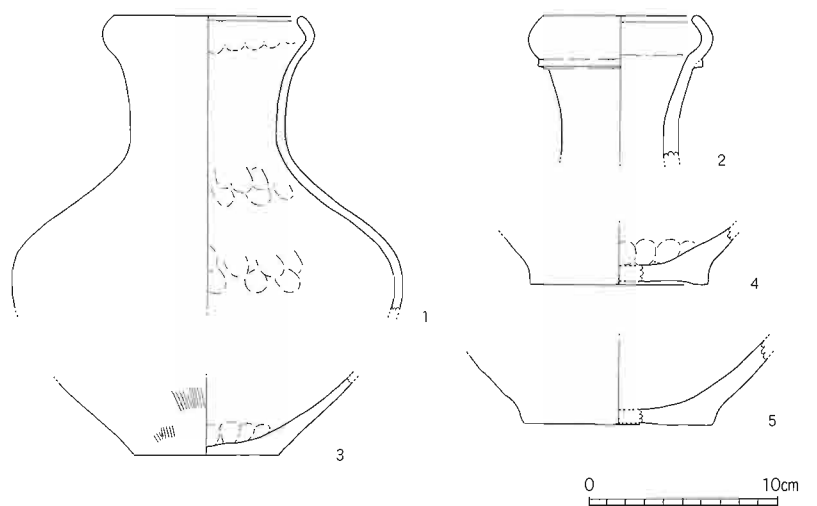
調査区の南端で検出され、遺構の南半は調査区外へ続く。確認面での規模は、南北方向で約6.4m + α、東西方向で約5.6mの長方形プランを呈する。床面までの深さは約55cm、床面沿いには周溝が巡らされ、北壁側にはベッド状遺構が付設されている。床面には中央より北側で1つの主柱穴が検出された。柱穴の幅約60cm、深さ40cmを測る。調査区の範囲内には炉跡は検出されておらず、そこから推測すると、長軸の長さは10mを超える大型の住居跡となろう。住居跡の埋土は4つの層に分かれ(第5図8層から11層)8層は、古墳時代の遺物が含まれており、斜面につくられているため、上から流れ込んだものであるであろう。9層から10層までは、砂質性の強い柔らかな埋土である。出土遺物はいずれも床面よりやや上で、浮いた状態で出土している。



第6図 1号竪穴住居跡実測図 (1/60)

1号竪穴住居跡出土遺物 (第7図)

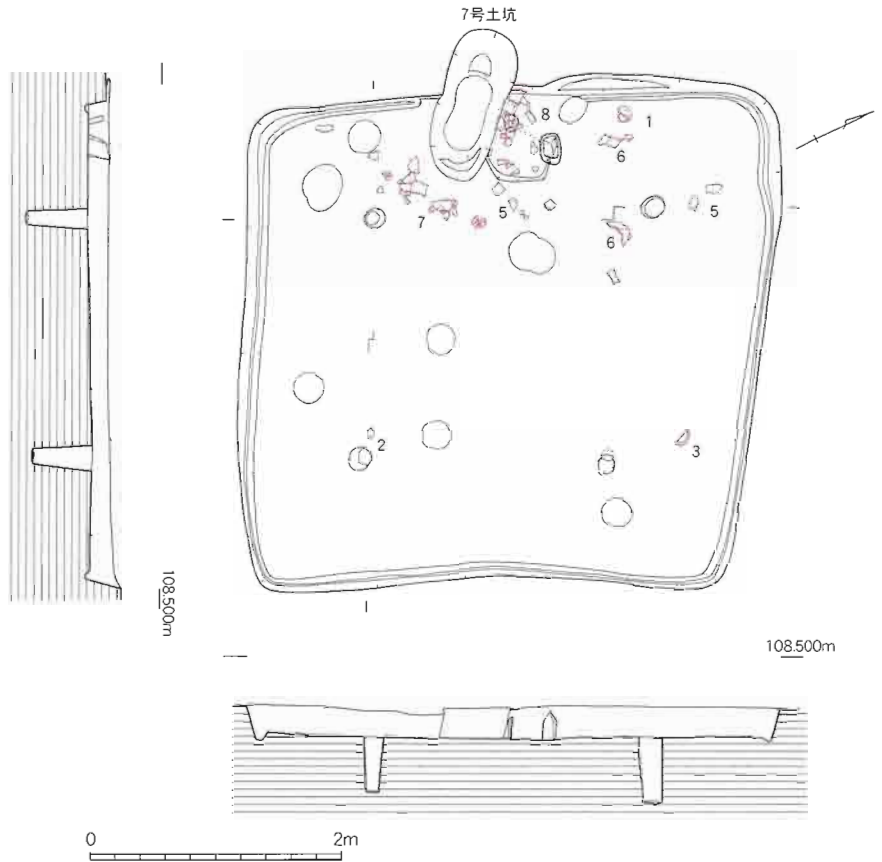
1～3は壺である。1は住居跡東側壁面近くよりやや浮いた状態で出土。口縁部は袋状を呈し、頸部から胴部にかけては大きく膨らむ。2は含土中より出土。1と同様、口縁部は袋状を呈し、口縁部下に1条の突帯を巡らす。3は底部で、含土中より出土。底は平坦で薄く仕上げている。1と同一個体の可能性がある。4・5は甕の底部である。4は支柱穴の北側より出土。5はベッド状遺構床面上より出土。



第7図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/4)

2号竪穴住居跡（第8・9図）

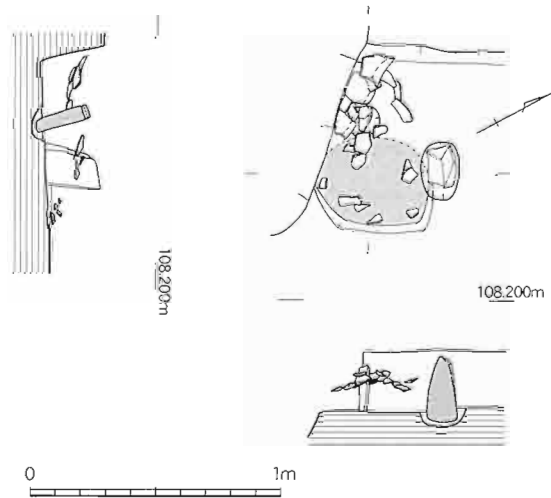
調査区南西側で検出され、3・4号掘立柱建物に切られる。住居跡の規模は、カマドのある主軸方向の長さ約3.9m、直交方向の長さ約4.2mを測り、ほぼ正方形のプランを呈する。床面までの深さは約25cmで、カマドは西側住居跡壁面中央に付設され、カマド南半を7号土坑に切られる。支柱穴は4カ所確認され、住居の壁面沿いには周溝を巡らす。カマドの周囲からは多数の須恵器や土師器が床面直上から出土した。カマドは、南側袖石付近及び袖部分は7号土坑により壊されていたが、北側袖石と支脚はそのまま残っていた。焚口付近は赤褐色の硬化面が残り、支脚の周囲には使用時のものと考えられる甕や甑が割れた状態で出土した。



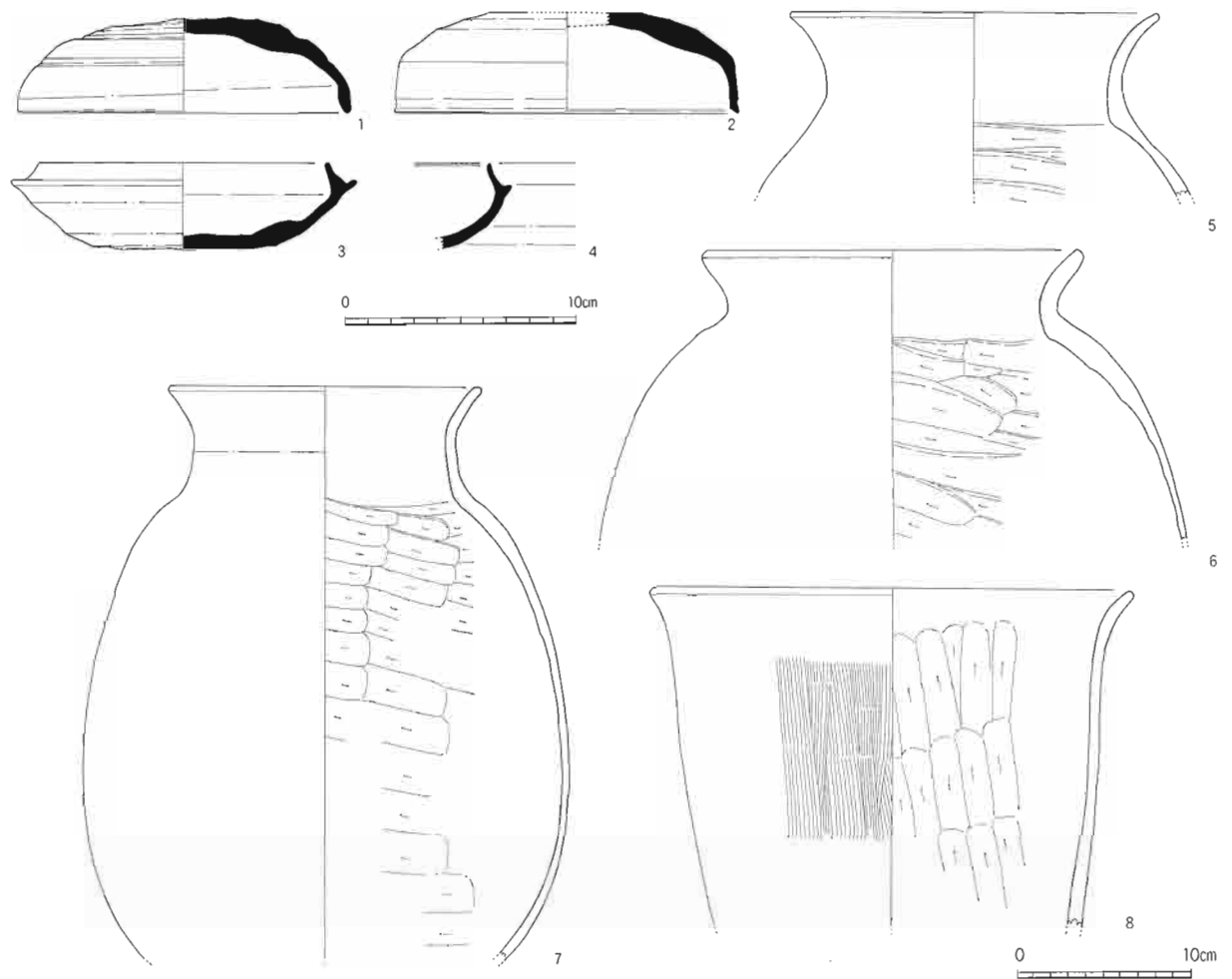
第8図 2号竪穴住居跡実測図（1/60）

2号竪穴住居跡出土遺物（第10図）

1・2は須恵器坏蓋で、1は住居跡西側周溝側より出土。口縁部から天井部へ向かって屈曲する。天井部はレンズ状となる。外面回転ヘラ削り。2は住居跡南東側支柱穴側より出土。口縁部から天井部にかけて、一端屈曲する。天井部はレンズ状を呈す。外面回転ヘラ削り。3・4は須恵器坏身である。3は住居跡東側床面上より出土。底部から蓋受部に向かって斜め方向に立ち上がり、短い返りを取り付く。4は含土中より出土。底部から蓋北側床面直上より出土。長く外反する口縁部を持ち、頸部から胴部に向け



第9図 2号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第10図 2号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3・1/4)

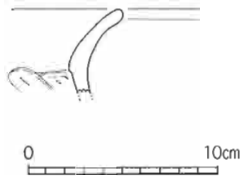
ては大きく膨らむ。内面は横方向のヘラ削りを施す。6もカマド北側床面直上より出土。短く外反する口縁部を持ち、5と同様頸部から胴部にかけては大きく膨らむ。7はカマド南側床面上より出土。直口気味に延びる口縁が一端屈曲しそこから外反する。胴部は下位に向かって下膨れとなる。内面はヘラ削りを施す。8は土師器甑である。カマド焚口部より出土。頸部から口縁部にかけては外反気味に伸び、胴部から底部に向かって緩やかにのびる。外面ハケ、内面縦方向のヘラ削りを施す。

3号竪穴住居跡 (第11図)

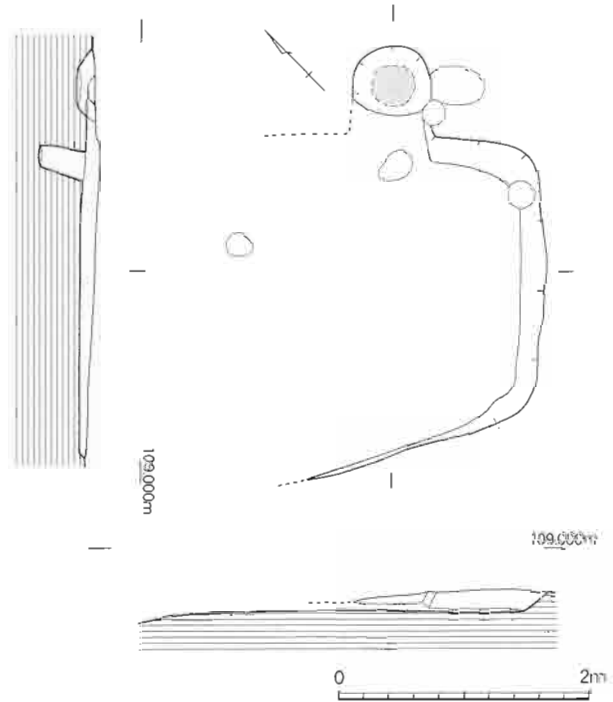
調査区南側で検出された。住居跡の残りは悪く、西側はすでに床面下まで削平を受けていた。住居跡の規模は、カマドのある主軸方向の長さ約3.5m、直交方向の残存長約1.8m、深さは残りのよい所で約15cmを測る。主柱穴はなく、カマドは北側壁面中央の位置に張り出してつくられていた。カマドの袖は残っておらず、また袖石痕跡や支脚痕も確認されなかったことから、当初からなかったものと考えられる。カマドの底面は床面より一段窪んでおり、その部分には赤褐色の焼成面がみられた。

3号竪穴住居跡出土遺物（第12図）

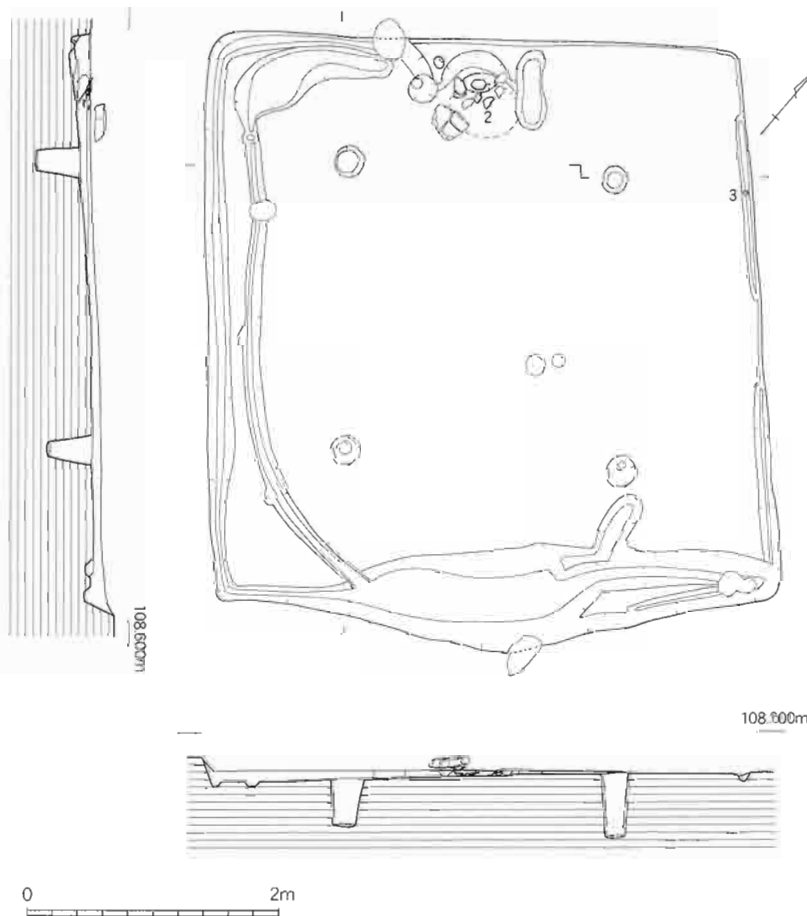
1は甕の口縁部である。頸部から口縁部にかけて外反する。内面斜め方向のヘラ削りが施される。



第12図 3号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/4）



第11図 3号竪穴住居跡実測図（1/60）



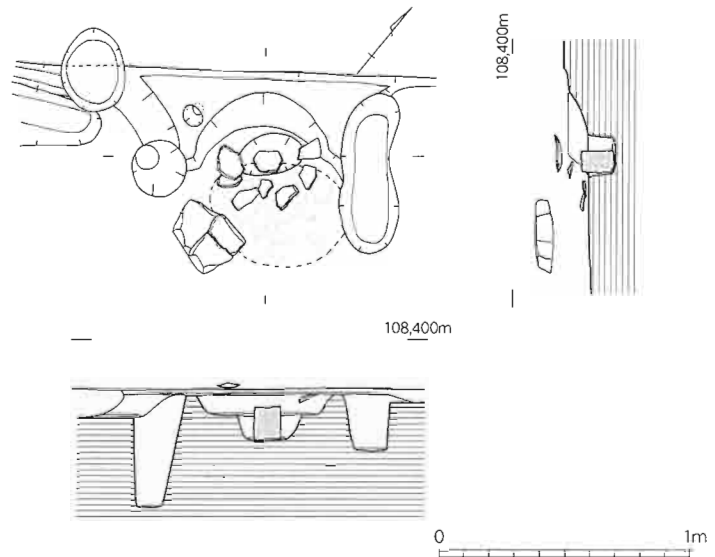
第13図 4号竪穴住居跡実測図（1/60）

4号竪穴住居跡（第13・14図）

調査区南西側で検出された。住居跡は削平を受け残りは悪く、住居跡北西コーナー付近ではかろうじてプランの痕跡を確認することができた。住居跡の規模は、カマドのある主軸方向で約4.8m、直交方向で約4.4mを測り、ほぼ正方形プランを呈する。床面までの深さは、残りのよい所で約15cmを測る。

カマドは住居跡西側壁面中央に付設され、支柱穴は4本確認された。住居跡の壁面沿いには周溝を巡らせているが、南側及び東側では、少し離れて内側にももう1条の溝が検出された。とくにカマド南側、反対の東側ではその幅が広がっており、排水のための施設として掘られた可能性が考えられる。

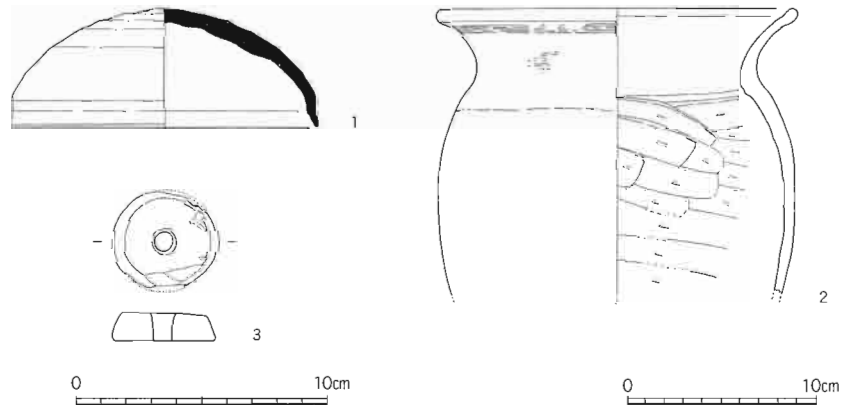
カマドは、上部をほとんど削平されていたが、袖の一部と支脚の下部はわずかながら残っていた。また、両袖石は抜き取られて残っていなかったが、掘り方が確認され、本来は存在していたようである。焚口部分は、被熱を受け赤褐色に硬化していたが、その直上には使用時のものと考えられる甕の破片が割れた状態で出土した。



第 14 図 4号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

4号竪穴住居跡出土遺物 (第15図)

1は含土中より出土。須恵器坏蓋である。口縁端部はやや開き気味で、天井部は丸く仕上げている。外面回転ヘラ削りが施される。2はカマド内より出土。甕である。口縁部は大きく外反し、端部はやや内湾気味に膨らむ。胴部はあまり外には膨らまない。3は住居跡北側周溝内より出土。滑石製の紡錘車である。上面幅3.3cm、底面幅4.2cm、高さ1.1cmの断面台形を呈する。中央には心棒を通す幅0.9cmの穴が穿たれている。



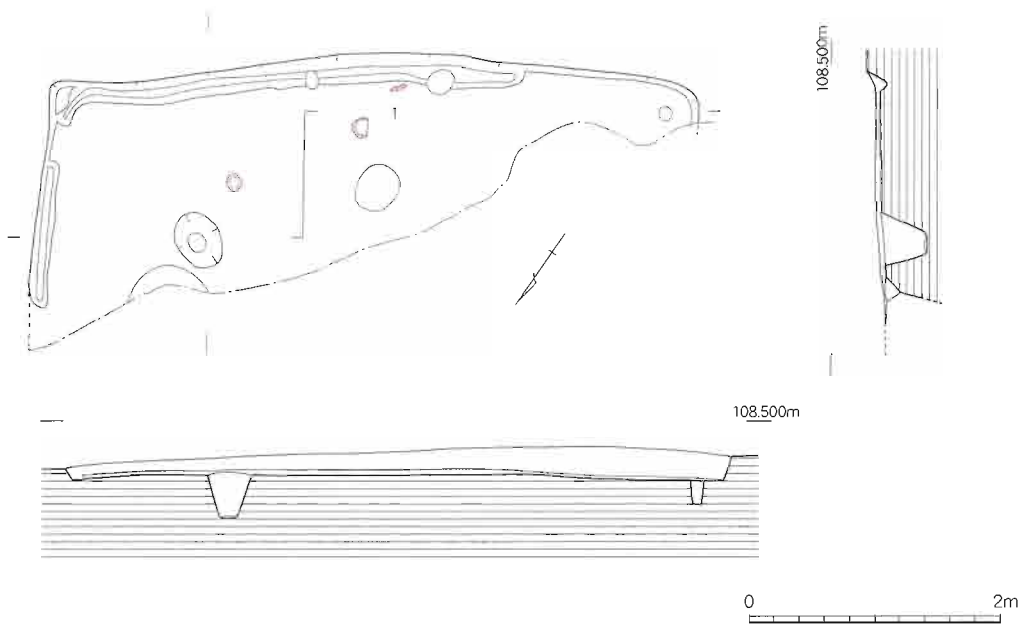
第 15 図 4号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3・1/4)

5号竪穴住居跡（第16図）

4号住居跡の西側に隣接して検出された。現在の水田法面により、遺構の西半が削平を受けている。住居跡の規模は、東西方向で長さ約5.2m、南北方向で残存する長さ約2.0mを測る。床面までの深さは残りのよい場所で約10cmを測る。住居跡東側及び北側壁面沿いには周溝を巡らせている。主柱穴は1カ所確認されたが、その位置から4本柱の住居跡であったことが推測される。南側壁面近くの床面上より、2つに割れた状態で須恵器が出土した。

5号竪穴住居跡出土遺物（第17図）

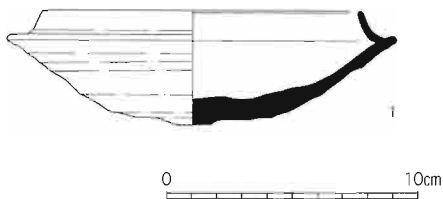
1は須恵器坏身である。底部から蓋受部にかけて斜め方向に立ち上がり、そこから内側に向かって斜めに返りがつく。底部は回転ヘラ削りを施す。



第 16 図 5号竪穴住居跡実測図（1/60）

6号竪穴住居跡（第18図）

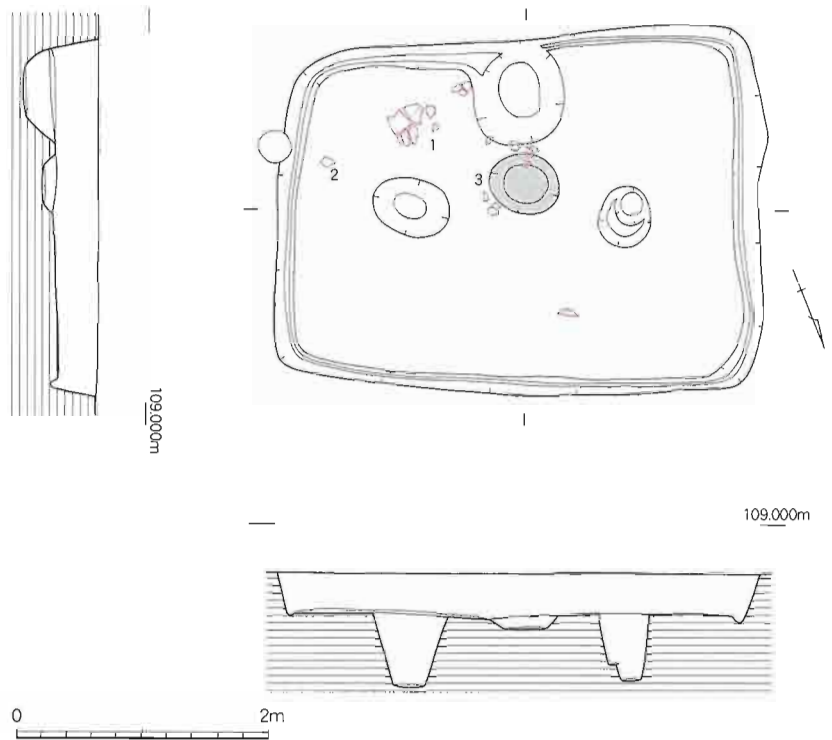
調査区中央で検出された。住居跡の規模は、長軸約3.8m、短軸約2.9mの長方形プランを呈する。床面までの深さは約30cmを測る。住居跡の中央よりやや南側に幅約50cm、深さ約10cmを測る炉跡が見られ、それを挟むように2本の主柱穴が確認された。主柱穴の深さは約60cmを測る。住居跡の壁面沿いには周溝が巡らされ、炉跡の南側には付設土坑が存在する。炉跡や土坑そばの床面上からは、土器がまとまって出土した。



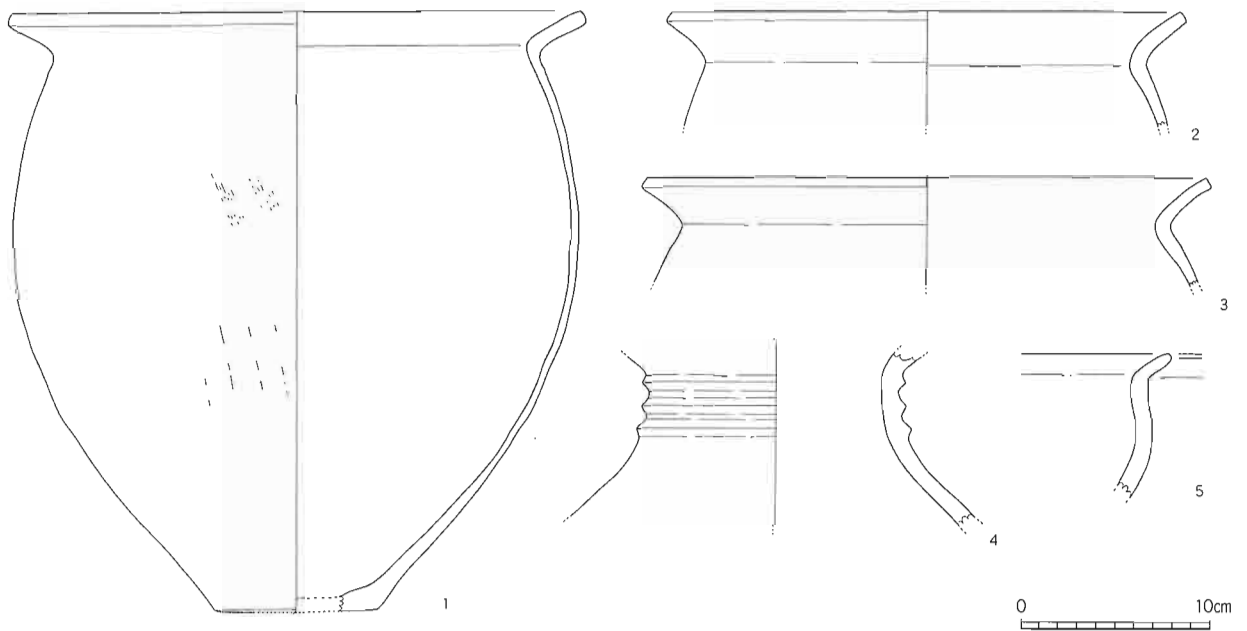
第 17 図 5号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

6号竪穴住居跡出土遺物（第19図）

1～3は甕である。1は土坑東側より床面上から潰れた状態で出土。ほぼ完形品である。底部はわずかにレンズ状となり、胴部にかけて大きく膨らむ。口縁部は「く」の字に外反し、幾分跳ね上げ状口縁の名残が見られる。2は住居跡東側壁面近くより出土。口縁部は「く」の字に外反する。3は炉跡付近より出土。2と同じく「く」の字に外反する。4は含土中より出土の壺頸部である。3条の突帯が貼りつけられている。6は含土中より出土した小型の鉢である。口縁部は短く、やや外反気味にのびる。



第 18 図 6号竪穴住居跡実測図（1/60）

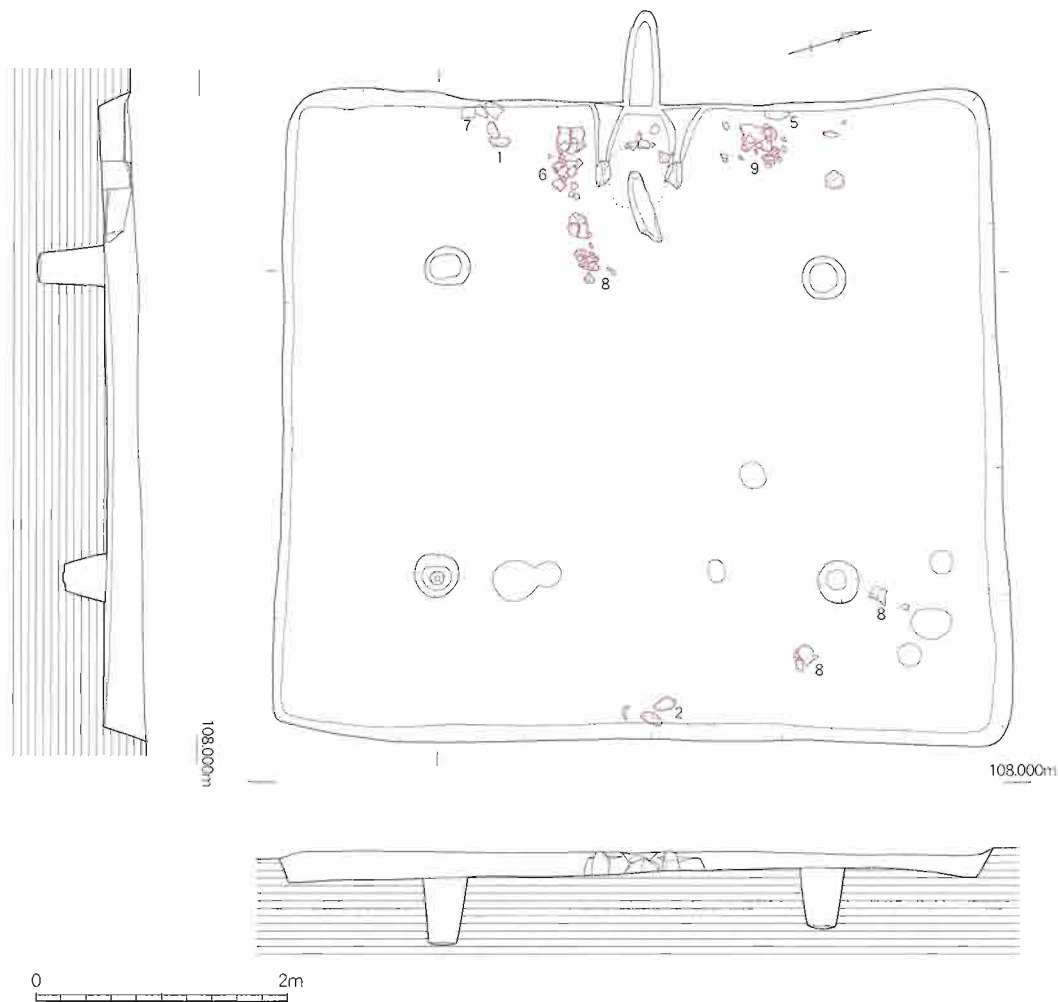


第 19 図 6号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/4）

7号竪穴住居跡（第20・21図）

調査区北西部で検出された。住居跡の規模は、カマドのある主軸方向で約5.0m、直交方向で約5.7mを測り、ほぼ正方形のプランを呈する。床面までの深さは約35cmを測る。カマドは住居跡西側壁面中央に付設され、煙道が残っている。支柱穴は4本確認された。カマドの東側には、カマド構築材と見られる凝灰岩の加工石が浮いた状態で検出され、埋没過程の中で壊されたものと考えられる。またカマドの周囲には、潰れた状態で土器がまともってし、カマドのある位置とは逆の住居の出入り口と想定される東側壁面中央にも須恵器の坏が割れた状態で出土した。

カマドは上面を壊されていたが、袖、袖石、支脚とも当初の位置を保っていた。袖石間の幅は約40cmを測り、焚口付近は被熱を受け赤褐色に硬化していた。カマド奥には長さ約75cmの細長い煙道が検出された。



第20図 7号竪穴住居跡実測図（1/60）



写真2 7号竖穴住居跡カマド正面土層

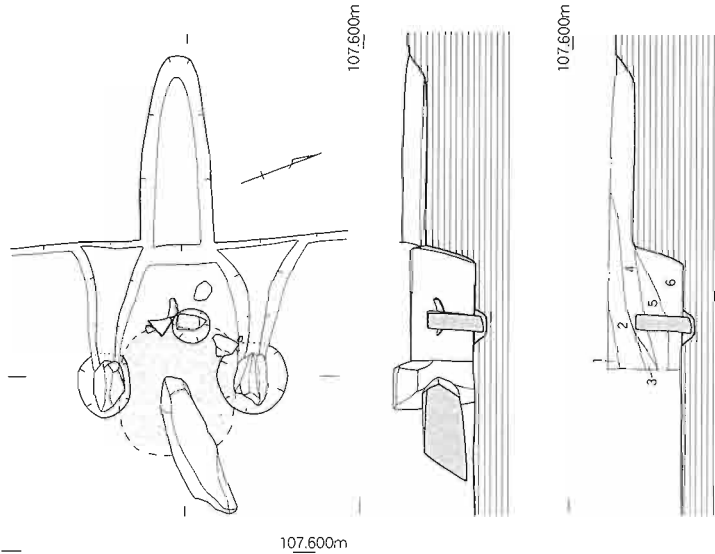
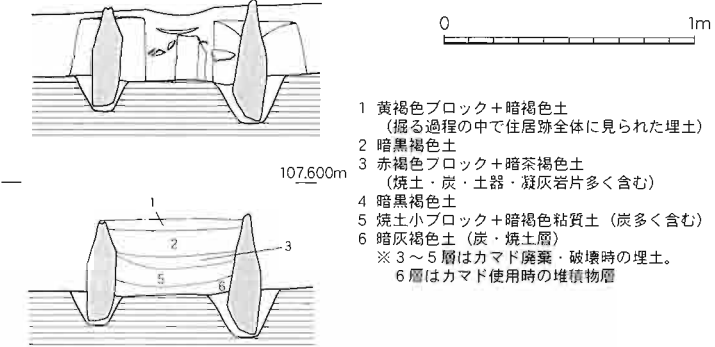


写真3 7号竖穴住居跡カマド側面土層

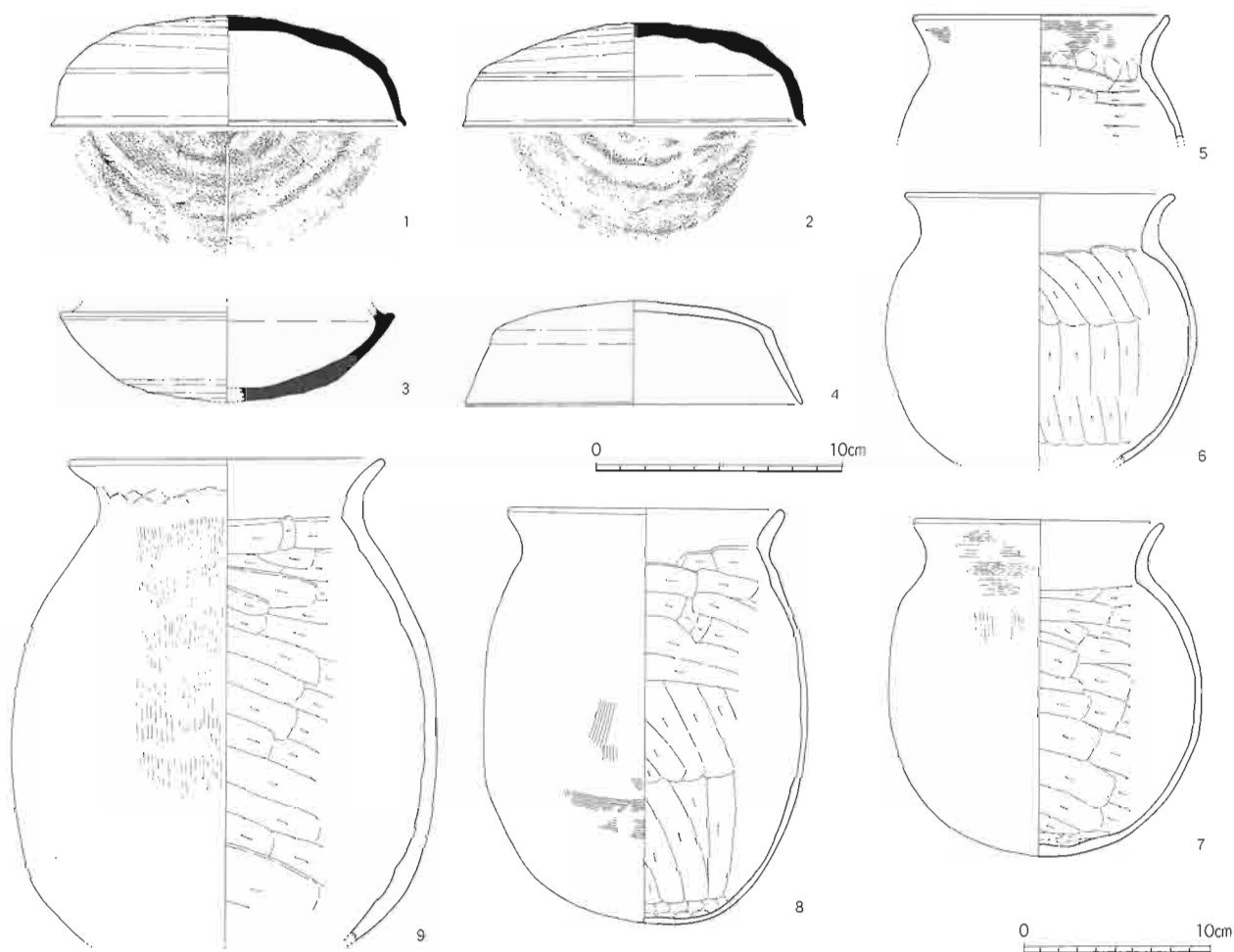


- 1 黄褐色ブロック+暗褐色土
(掘る過程の中で住居跡全体に見られた埋土)
- 2 暗黒褐色土
- 3 赤褐色ブロック+暗茶褐色土
(焼土・炭・土器・凝灰岩片多く含む)
- 4 暗黒褐色土
- 5 焼土小ブロック+暗褐色粘質土(炭多く含む)
- 6 暗灰褐色土(炭・焼土層)
- ※ 3～5層はカマド廃棄・破壊時の埋土。
6層はカマド使用時の堆積物層

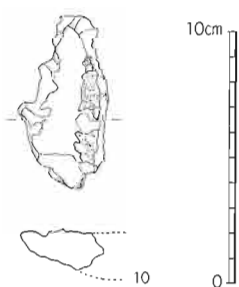
第21図 7号竖穴住居跡カマド実測図(1/30)

7号竖穴住居跡出土遺物(第22・23図)

1・2は須恵器坏蓋である。1はカマド南側より2つに割れて出土した。1の端部はシャープで、口縁部から天井部に向かって一段稜をもつ。外面回転ヘラ削り。内面にはヘラ記号がみられる。2は住居跡東壁中央より出土。1と同様の器形で、内面にはヘラ記号がみられる。3は含土中より出土の須恵器坏身である。底部から蓋受部にかけて斜め方向に立ち上がる。4は含土中より出土の土師器坏蓋である。口縁部は外に開き気味で、口縁部から天井部に向かって、一段稜をもつ。5～9は土師器甕である。5はカマド北側壁面沿いより出土。口縁部は「く」の字に外反し、端部付近でわずかに内湾する。外面は口縁部付近は横ハケ、内面は口縁部を横ハケ、頸部下は横方向の削り。6はカマドのすぐ南側より出土。口縁部は「く」の字に外反し、胴部は球形に近い形となる。内面斜め方向のヘラ削り。7はカマド南側壁面沿いより出土。6と同様の器形を呈する。外面ハケ、内面横方向のヘラ削り。8はカマド焚口東側及び北東コーナー付近出土遺物の接合個体である。長胴で底部はレンズ状となる。口縁部は短く外反する。外面ハケ、内面不定方向のヘラ削り。9はカマド北側より出土。やや下膨れの器形を呈する。口縁部は「く」の字に外反する。外面縦ハケ、内面ヘラ削り。10は含土中より出土した椀形鉄宰である。表面にはガラス質宰も付着する。残存長6.7cm、重さ25g。



第22図 7号竪穴住居跡出土遺物実測図1 (1/3・1/4)

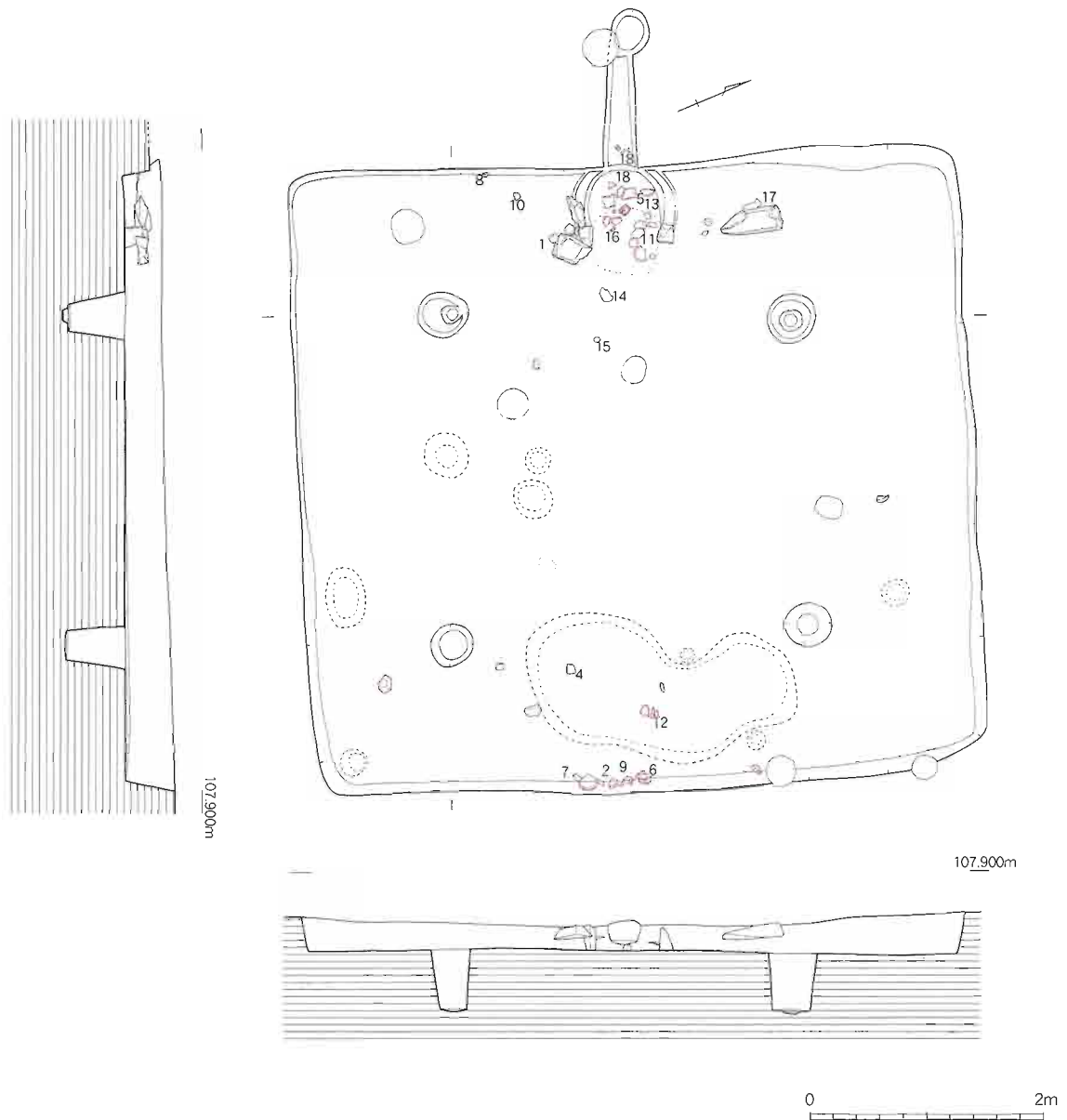


第23図 7号竪穴住居跡
出土遺物実測図2 (1/3)

8号竪穴住居跡 (第24・25図)

7号住居跡の北側に近接して検出された。住居跡の規模は、カマドのある主軸方向で約5.4m、直交方向で約5.8mを測るほぼ正方形に近いプランを呈する。床面までの深さは約40cmを測る。カマドは住居跡西側壁面中央に付設され、煙道が残っている。支柱穴は4本確認された。カマドの西側には、カマド構築材とみられる凝灰岩の加工石浮いた状態で検出され、7号住居跡同様に埋没過程の中で壊されたものと考えられる。また、カマド内や住居跡床面上からは、土器片が多数出土したが、カマド位置とは反対の東側壁面中央には、やはり7号住居跡と同様、割れた須恵器が並んで出土した。この遺物は、上から流れ込みの状態ですべて出土しており、埋没過程の中で何らかの祭祀行為が行われた可能性がある。住居跡床面下からは、建て替え等に関係すると考えられる浅い土坑や柱穴が検出された。

カマドは上面を壊されていたが、袖、袖石、支脚などはよく残っていた。両袖石間の幅は約55cm、を測り、焚口付近は被熱を受け、赤褐色に硬化していた。この硬化面の下には1層挟んでもう一枚

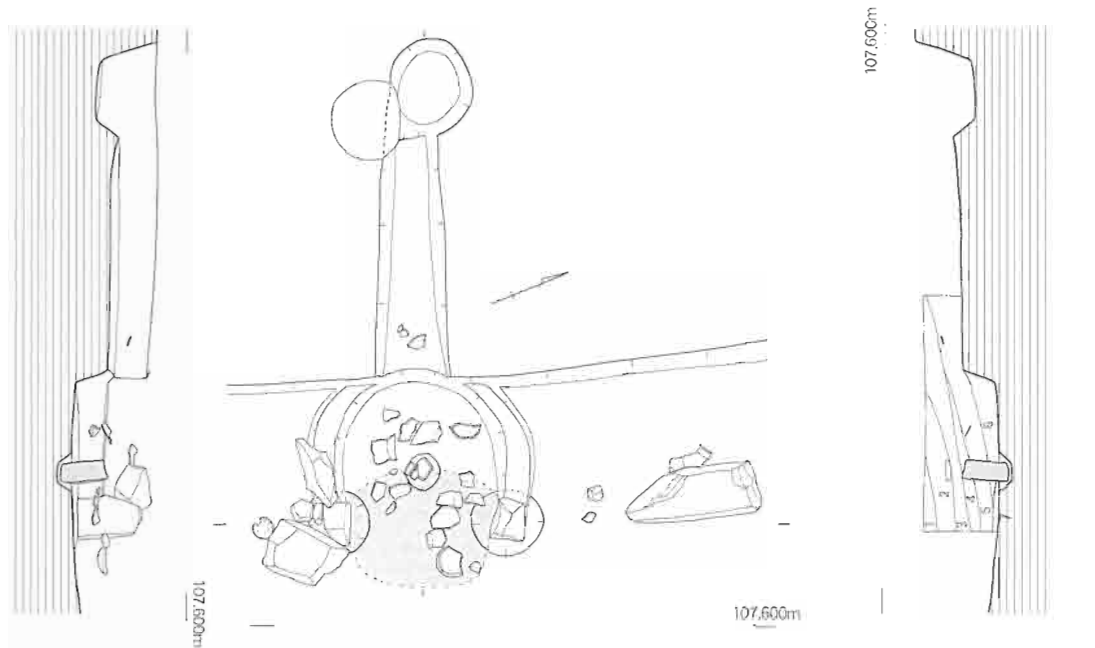


第 24 図 8 号竪穴住居跡実測図 (1/60)

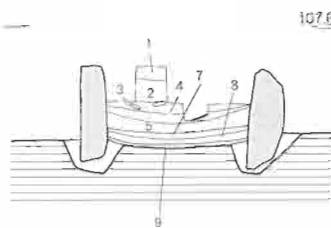
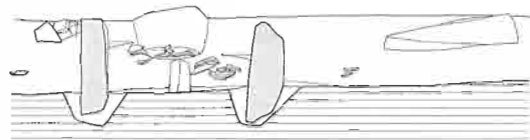
の硬化面が検出され、カマドの造り替えが行われた形跡が伺えた。カマドの奥には長さ約1.3mを測る細長い煙道が付けられ、先端部には幅20cm、深さ約25cmを測る穴が掘り込まれていた。

8 号竪穴住居跡出土遺物 (第26図)

1・2は須恵器坏蓋である。1はカマド南側より床面から少し浮いた状態で出土。端部はシャープなつくりで、天井部は平坦に仕上げる。外面回転ヘラ削り。2は住居跡東側壁面中央より出土。端部は1と同様シャープなつくりで、口縁部から天井部にかけて一段稜をもつ。天井部はややレンズ状を呈する。外面回転ヘラ削り。3～9は須恵器坏身である。3は含土中より出土。底部から坏受部に向かって斜め方向に立ち上がる。返りは上に向かって反る。外面回転ヘラ削り。4は住居跡東側支柱穴付近よりやや浮いた状態で出土。全体的に小さく、器形は土師器坏身に似ている。返りは上に向かって反る。外面ヘラ削り。内面にはヘラ記号が刻される。5はカマド内より出土。深い



- 1 暗茶褐色土 (自然堆積層)
 - 2 暗褐色土+黄褐色ブロック
(掘る過程の中で住居跡全体に見られた埋土)
 - 3 暗黒褐色粘質土
(凝灰岩小片多数見られ、炭・焼土わずかに含む)
 - 4 黄褐色粘質土
(カマド構築粘土ブロック)
 - 5 暗褐色土
(焼土ブロック、炭多く含む)
 - 6 暗灰褐色土
(焼土ブロック、炭多く含む)
 - 7 赤褐色土
(カマドの焼成が及んだ層 / 層上面焼成面)
 - 8 黄茶褐色土
(炭含む、旧カマド埋土)
 - 9 赤褐色土
(旧カマドの焼成が及んだ層 / 層上面焼成面)
- ※ 3～5層はカマド廃棄・破壊時の埋土。
6層はカマド使用時の埋土。

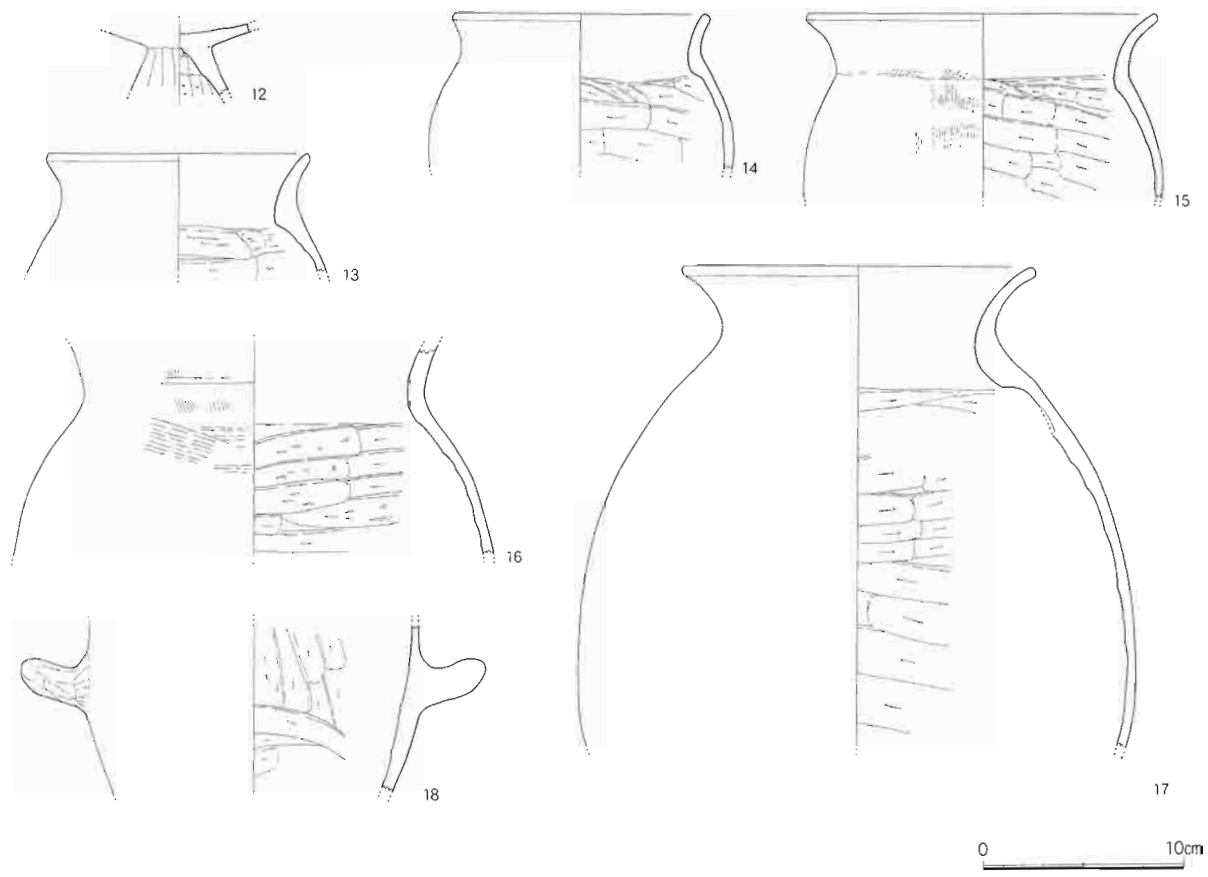
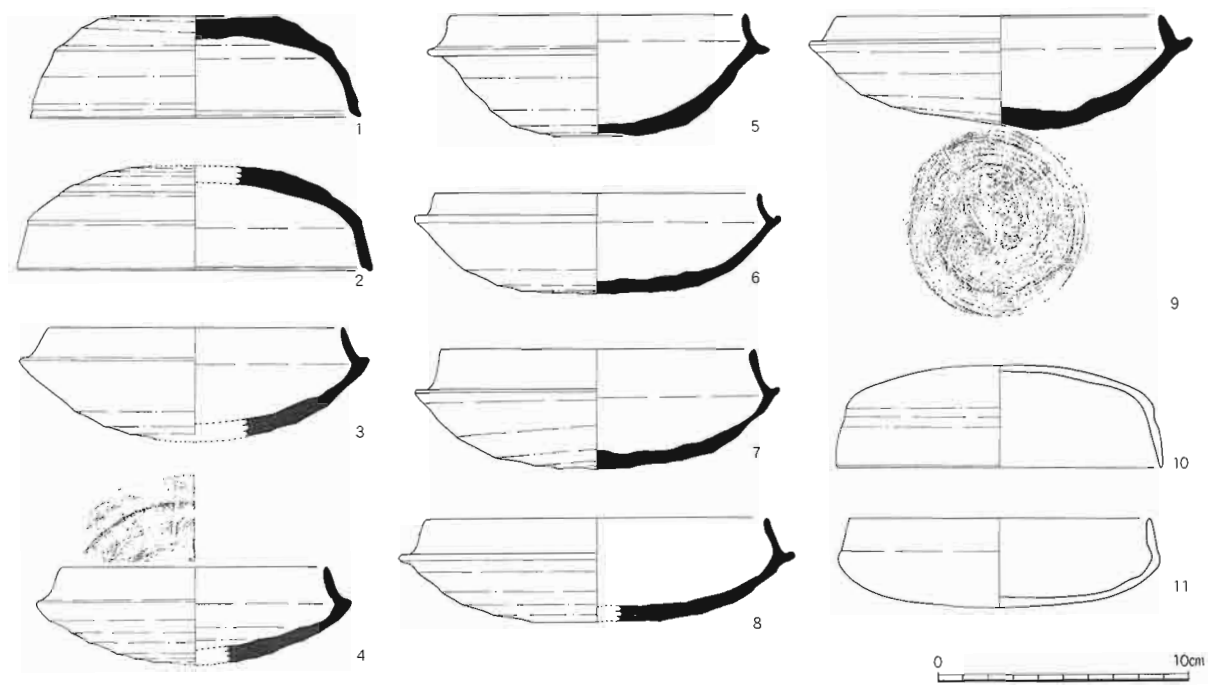


第25図 8号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



写真4 8号竪穴住居跡カマド正面 写真5 8号竪穴住居跡カマド側面

体部で、蓋受部をその先端に貼り付けている。返りは短く、上に向かって反る。外面回転ヘラ削り。6は住居跡東側壁面沿いより出土。底部から蓋受部に向かって斜め方向に立ち上がり、返りは短く、上に向かって反る。外面回転ヘラ削り。7は住居跡東側壁面沿いより出土。底部から蓋受部に向かって斜め方向に立ち上がり、返りは長く、わずかに上に向かって反る。外面回転ヘラ削り。8はカマドより南で、西側壁面近くより出土。蓋受部を体部先端に貼り付ける。返りはやや内側に向かって斜め方向に直線的にのびる。外面回転ヘラ削り。9は住居跡東側壁面沿いより出土。全体の器形はやや歪んでいる。返りは内側に向かって直線的にのびる。外面回転ヘラ削り後、ヘラ記号が刻されている。10はカマド南側より出土。土師器坏蓋である。口縁部は外側に向かって開く。口縁部から天井部に向かって一段稜をもつ。11はカマド内より出土。口縁部は内側に向き、口縁部から底部に向かって一段稜をもつ。10とセットとなろう。12は土師器高坏脚部である。住居跡東側より出土。脚部、坏口縁端部を欠損。内外面ヘラ削り。13～17は土師器甕である。13はカマド内より出土。口縁部は「く」の字に外反する。内面は横方向のヘラ削り。14はカマド焚口より東側より出土。口縁



第26图 8号竖穴住居跡出土遺物実測図 (1/3 · 1/4)

部は「く」の字に外反し、胴部は球形を呈すると推測される。内面斜め方向のヘラ削り。15も14の近くより出土。口縁部は「く」の字に外反する。外面ハケ、内面横方向のヘラ削り。16はカマド内より出土。口縁端部を欠損。外面ハケ、内面ヘラ削り。17はカマド構築の加工石下から潰れた状態で出土。胴部から頸部にかけてはすばまり、口縁部は大きく外反する。内面斜め方向のヘラ削り。18はカマド内より出土。甑である。口縁部、底部を欠損。胴部には取手がつく。内面縦方向のヘラ削り。

9号竪穴住居跡 (第27・28図)

8号住居跡の北側に近接して検出された。住居跡の規模は、カマドのある主軸方向で約3.5m、直交方向で約4.2mを測る長方形プランを呈する。床面までの深さは約30cmを測る。

この住居跡は、埋没後にわずかに方向を違えて東西約3.4m、南北約3.6m、深さ約60cmの竪穴が掘り込まれていた。この竪穴にはカマドや支柱穴は確認されず、竪穴住居をつくる目的で掘り込み、床面までの整地は行ったものの、住居を構築するには至らなかったと推測される。このため、9号

- 1 黒褐色土 (風化土)
 - 2 暗褐色粘質土 (黄褐色ブロック多く含む)
 - 3 茶褐色粘質土 (黄褐色ブロック少し含む)
 - 4 茶褐色粘質土 (黄褐色ブロック多く含む)
 - 5 黄褐色ブロック土
 - 6 暗褐色粘質土 (黄褐色ブロック多く含む)
 - 7 暗褐色粘質土 (黄褐色ブロック少し含む)
 - 8 暗茶褐色土 (黄褐色ブロック含まない)
 - 9 暗褐色土
 - 10 淡褐色土
 - 11 暗茶褐色土
- ※ 2～7層は人為的に埋められた可能性がある。

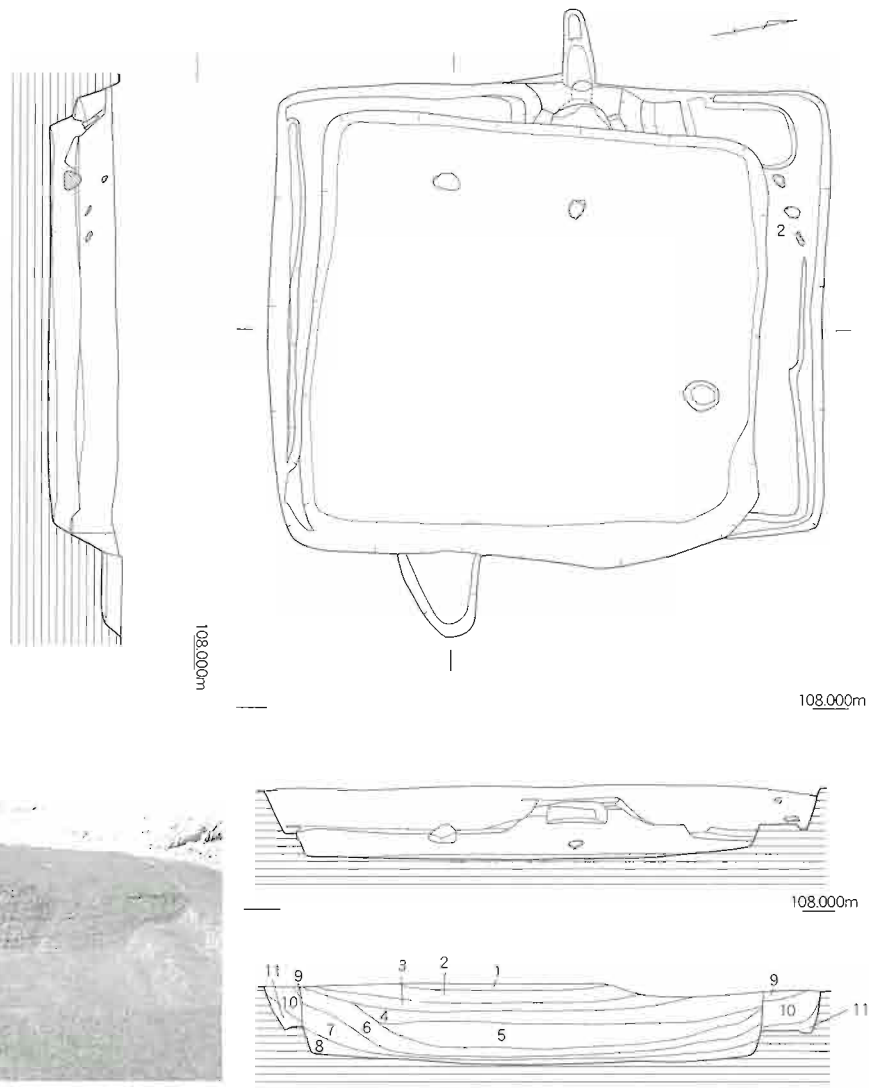
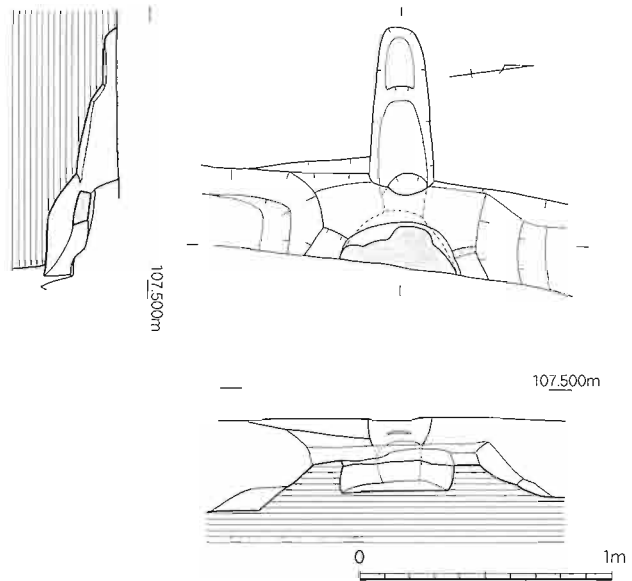


写真6 9号竪穴住居跡土層

第27図 9号竪穴住居跡実測図 (1/60)

竪穴住居の大半は残っていないが、住居跡壁面沿いに周溝が確認され、西側壁面中央にはカマドも大部分が残って検出された。住居跡北側壁面近くからは須恵器が床面上から出土している。

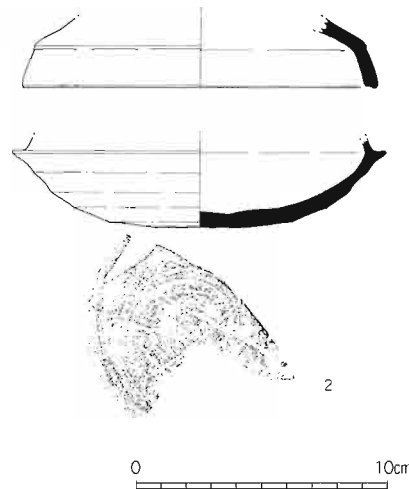
カマドは袖石や支脚はなく、粘土のみの構築が行われていた。天井部は壊れずそのまま残っており、そのためかカマド内からの遺物の出土はない。おそらく煙道部から自然に土砂がカマド内に流入し埋まっていったため、使用時の状態で残されたものと推測される。焚口付近は被熱により赤褐色に変色し、その上に使用時の炭の燃えかすなども見られたが、硬化しておらず、長期にわたって使用された様子うかがえなかった。袖の幅は約40cm、焚口から天井までの高さは約15cmを測る。カマドの煙道部の長さは約60cmを測る。



第28図 9号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

9号竪穴住居跡出土遺物 (第29図)

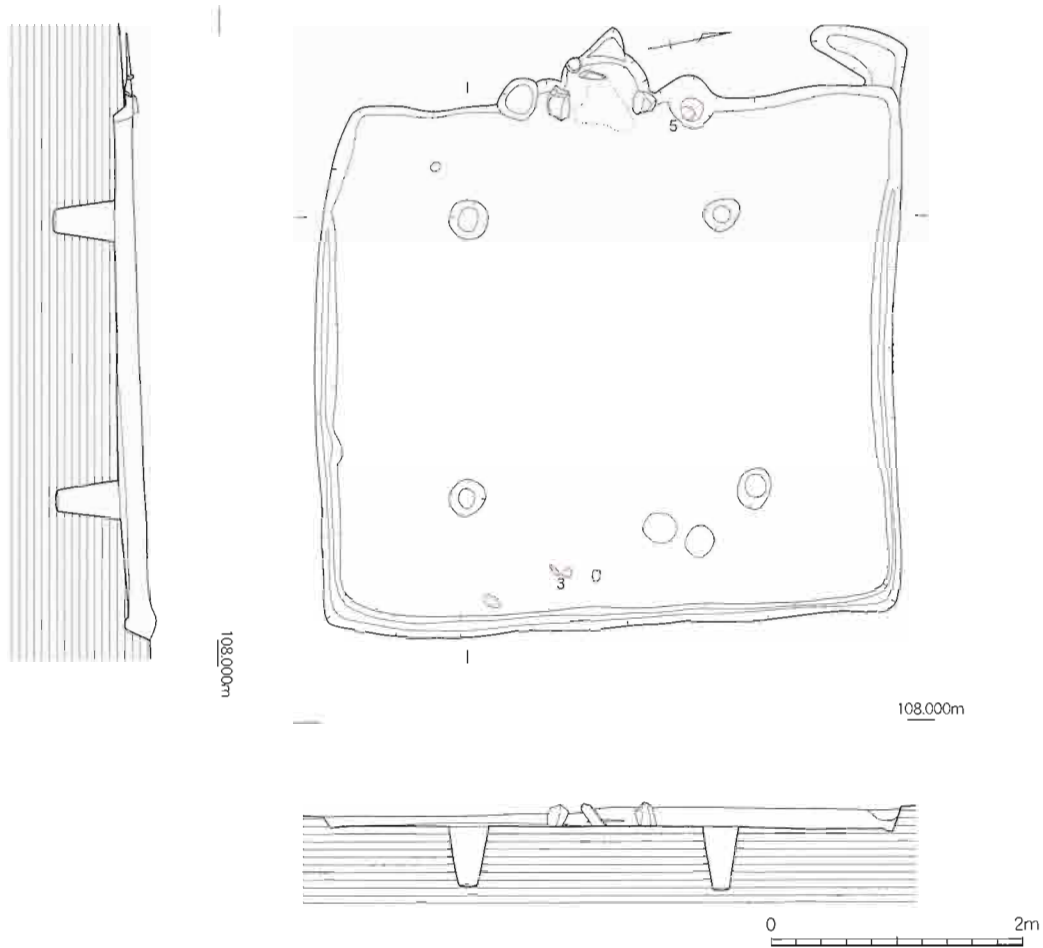
1は含土中より出土。須恵器坏蓋である。口縁部から天井部に向かって一段稜をもつ。2は住居跡北側より出土。須恵器坏身である。底部から蓋受部まで斜め方向に立ち上がる。外面回転ヘラ削りの後、ヘラ記号が刻されている。



第29図 9号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3・1/4)

10号竪穴住居跡 (第30・31図)

9号住居跡の北側に隣接して検出された。住居跡の規模は、カマドのある主軸方向で約4.2m、直交方向で約4.6mを測り、ほぼ正方形に近いプランを呈する。床面までの深さは約20cmを測る。カマドは住居跡西側壁面中央に張り出した形で付設され、煙道が残っている。支柱穴は4本確認され、カマドのある西側壁面を除くとすべての壁面沿いに周溝が巡る。住居跡東側壁面中央付近より7・8号住居と同様、割れた須恵器が流れ込みの状態でも出土している。カマドは、壁面線より外に半円形に張り出しており、そのため地山が袖のかわりとなっている。しかし張り出す位置には他のカマドと同様に袖石が据えられていた。また、中央には支脚も存在している。両袖石間の幅は約45cmを測る。カマドの煙道部は張り出していることもあり、長さ約25cmと短い。



第30図 10号竪穴住居跡実測図 (1/60)

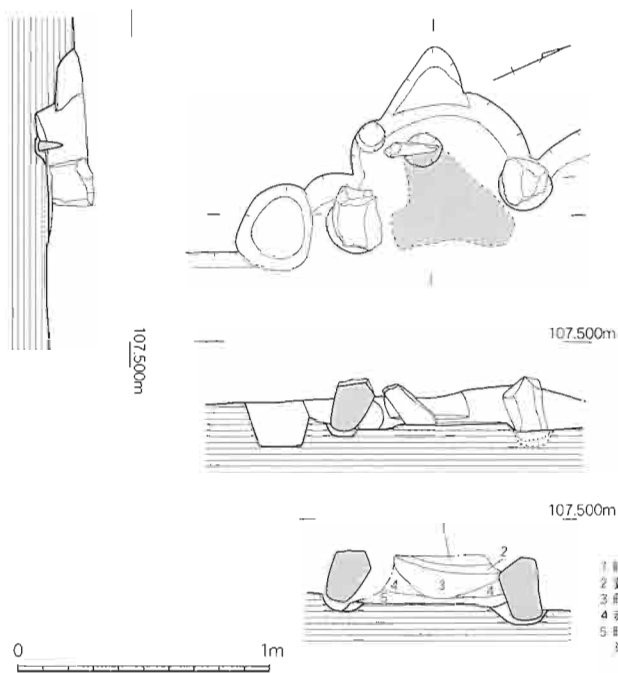


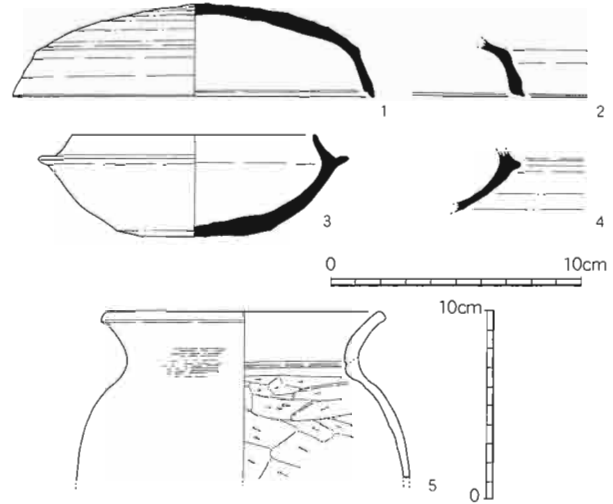
写真7 10号竪穴住居跡カマド正面土層

- 1 暗褐色土 (掘る過程の中で住居跡全体に見られた埴土)
 - 2 黄褐色ブロック土 (カマド溝築粘土崩落土)
 - 3 暗褐色土 (灰土まばらに含む)
 - 4 赤褐色土 (炭、焼土ブロック多く含む)
 - 5 暗灰褐色土 (土器、炭多く含む)
- ※ 4・5層はカマド使用時の堆積
 ※ 3層は自然堆積で2層はカマド崩落土。

第31図 10号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

10号竪穴住居跡出土遺物（第32図）

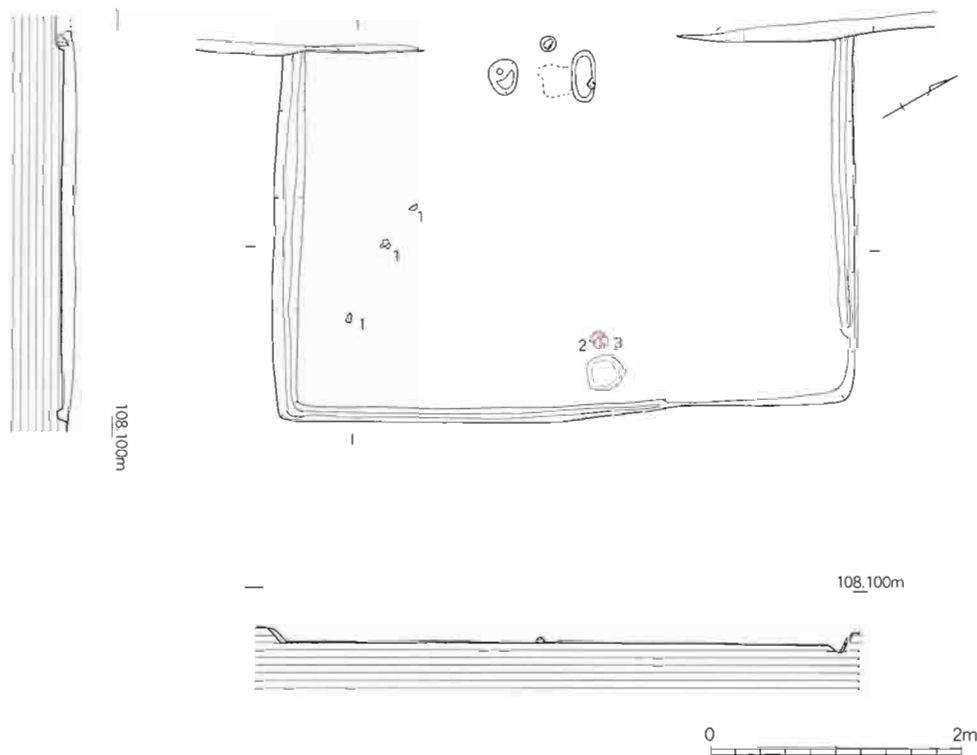
1・2は須恵器坏蓋である。1は含土中より出土。端部はシャープなつくりで、口縁部と天井部との間に一段稜をもつ。天井部はレンズ状を呈する。外面回転ヘラ削り。2は含土中より出土。口縁部と天井部の間に屈曲がみられる。3は住居跡東側壁面中央付近より出土。やや平坦に近い底部から、蓋受部に向かって内湾しながら立ち上がる。返りは内側に向かって直線的に延び、先端でわずかに外反する。外面回転ヘラ削り。4は含土中より出土。5は土師器甕である。カマド北側ピット内より出土。口縁部は「く」の字に外反し、胴部は大きく膨らむ。外面ハケ、内面横方向のヘラ削り。



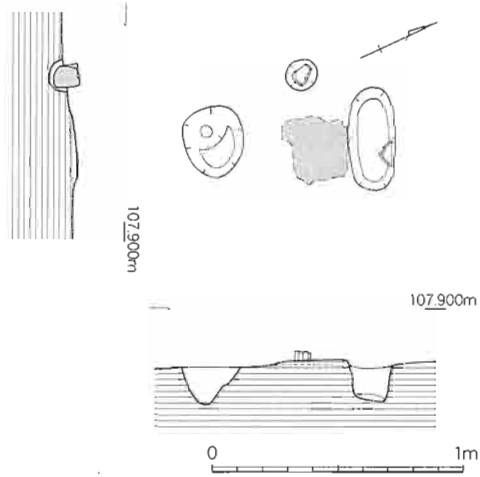
第32図 10号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/4）

11号竪穴住居跡（第33・34図）

調査区北東部で検出された。住居跡西側は水田造成により削平を受けており、カマド付近は焚口などがかるうじて残っている。住居跡の規模は、カマドのある主軸方向で残存長2.9m、直交方向の長さ約4.6mを測り、長方形プランを呈していたと推測される。床面までの深さは残りのよい場所で



第33図 11号竪穴住居跡実測図（1/60）

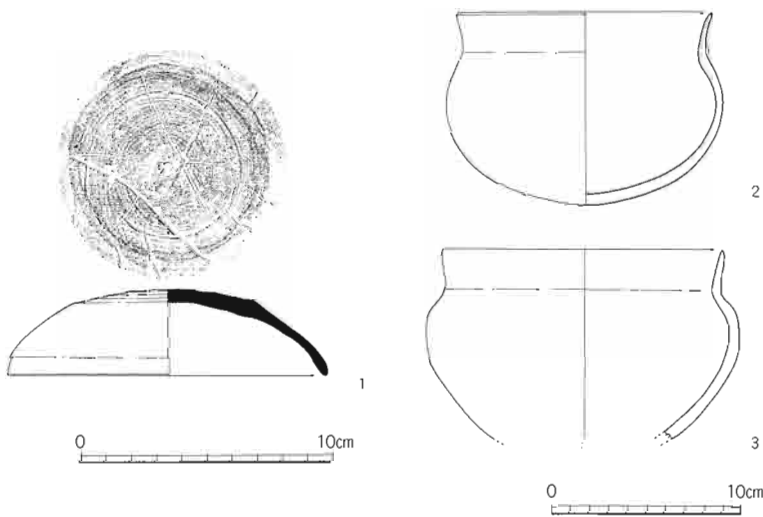


第34図 11号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

約15cmを測る。支柱穴はなく、住居跡の壁面沿いには周溝が巡る。住居跡の床面上からは少ないながらも完形に近い遺物が出土した。

カマドは西側壁面中央付近に付設されているが、削平により袖石は掘り方のみしか残っておらず、また支脚も上半分は失われていた。焚口はかろうじて残り、被熱により赤褐色に硬化した面が検出された。両袖石掘り方間の幅は約40cmを測る。

11号竪穴住居跡出土遺物 (第35図)



第35図 11号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3・1/4)

1は須恵器坏蓋である。住居跡南側より出土。端部は丸く収め、天井部はレンズ状を呈する。外面回転ヘラ削り後、ヘラ記号を刻している。2・3は精製された小型の土師器鉢である。いずれも住居跡東側床面上より出土。2は口縁部が外反し、胴部中位に最大径をとる。3はやや直口气味の口縁部を持ち、胴部は肩が張るタイプである。

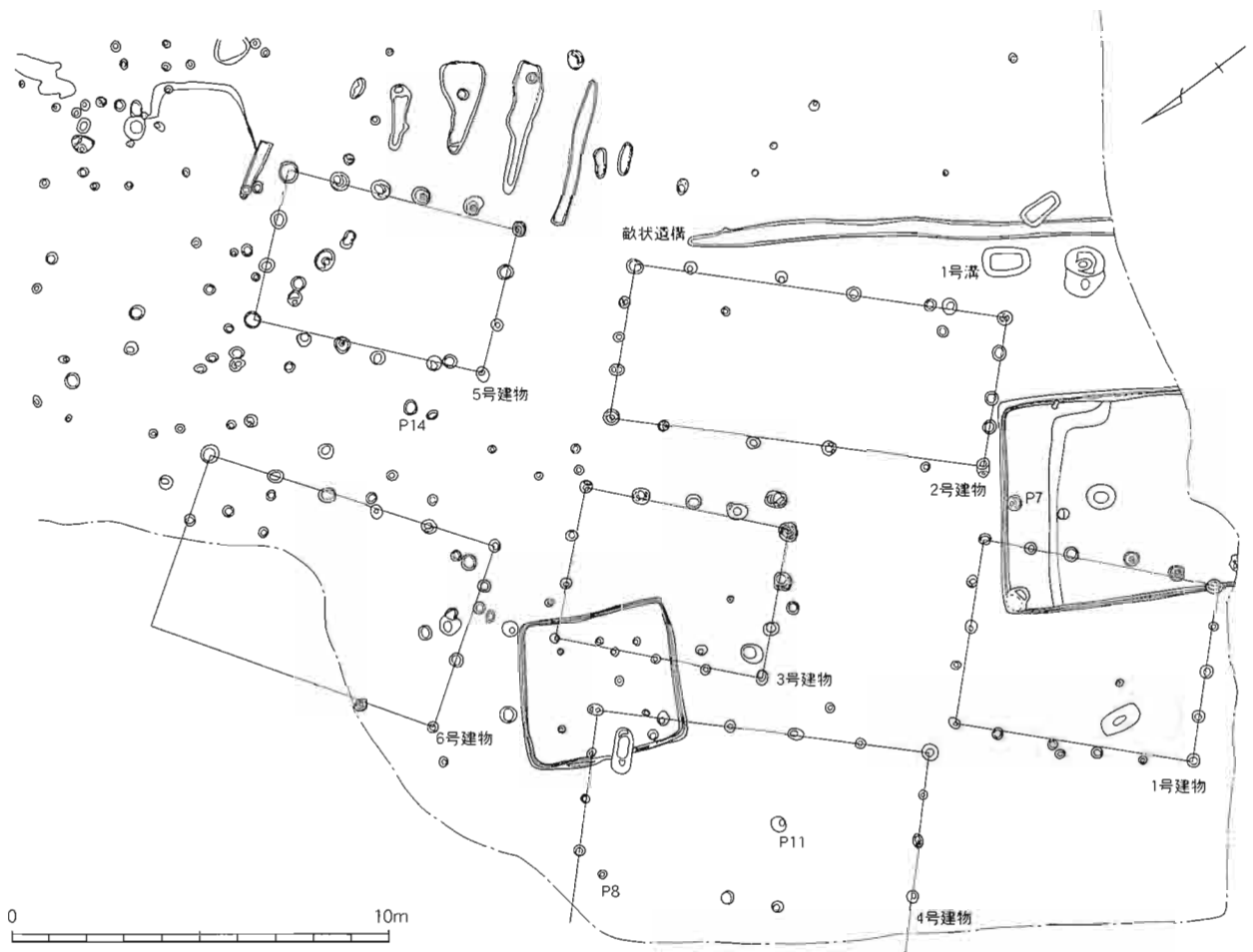
2. 掘立柱建物跡

建物群は全部で23棟確認されたが、現水路を境にみれば、2次調査区に近い場所（調査区南側建物群）、調査区のほぼ中央に小型の建物が集中する場所（調査区東側建物群）、そして14号溝一带の多数の柱穴が見られた場所（調査区北側建物群）の3カ所に分かれて集中する。このため、ここではそれら建物群ごとに説明を加える。

1) 調査区南側建物群

調査区南側では、6棟の掘立柱建物が確認された。これらの建物は、相互に切合関係をもたず、主軸方向をすべて南北方向に向け、建物設置角度も多少のばらつきはあるもののほぼ同じ向きに建てられていることがわかる。

個々の建物の相対的な特徴について見ると、いずれも建物の主となる棟持柱がなく、梁方向に4～5本の多数の柱を使っている。桁方向の柱間間隔の長さで建物の規模を変えているものの、使われている柱の数はいずれも5～6本である。確認面での柱穴の掘り方の大きさが、3号や5号は規模が小さい割に比較的大きいものの、それ以外の建物では全体的に小さく平均化されている。建物コーナーにあたる柱穴では、比較的大きくしっかりしているのに対して、他の柱穴は個々の建物によって深さがまちまちである。



第36図 調査区南側掘立柱建物群位置図 (1/200)

以上のような建物群の特徴から、これらの建物は同一時期に存在した可能性が極めて高いといえる。また、これら建物群の広がり、調査区内となる東側、西側には展開する可能性はなく、2次調査区との間、及び南側に向かって展開していくものと推測される。

1号掘立柱建物跡（第36・37図）

建物群の中心よりも南側で確認された建物で、梁間4間（約5.0m）、桁行5間（約6.4m）を測る。梁間方向の柱間平均は約1.2m、桁行方向の柱間平均は約1.1mを測る。建物延床面積は約32m²で、建物の軸方位はN-47° -Eである。検出面での柱穴掘り方の規模は15cm～40cmを測る。柱穴の深さは10cm～50cmを測る。建物柱穴P 1の中からは、須恵器の小破片が出土している。

2号掘立柱建物跡（第36・37図）

建物群の中心よりも東側で確認された建物で、梁間4間（約4.0m）、桁行5間（約10.0m）を測る。梁間方向の柱間平均は約1.0m、桁行方向の柱間平均は約2.0mを測る。建物延床面積は約40m²で、建物の軸方位はN-46° -Eである。検出面での柱穴掘り方の規模は25cm～35cmを測る。柱穴の深さは15cm～70cmを測る。建物柱穴の中からの遺物の出土はなかった。

3号掘立柱建物跡（第36・38図）

建物群の中央で確認された建物で、梁間3間（約4.1m）、桁行4間（約5.4m）を測る。梁間方向の柱間平均は約1.4m、桁行方向の柱間平均は約1.4mを測る。建物延床面積は約22m²で、建物の軸方位はN-49° -Eである。検出面での柱穴掘り方の規模は20cm～50cmを測る。柱穴の深さは30cm～55cmを測る。建物柱穴P 1～P 3の中からは、弥生土器の小破片が出土している。

4号掘立柱建物跡（第36・38図）

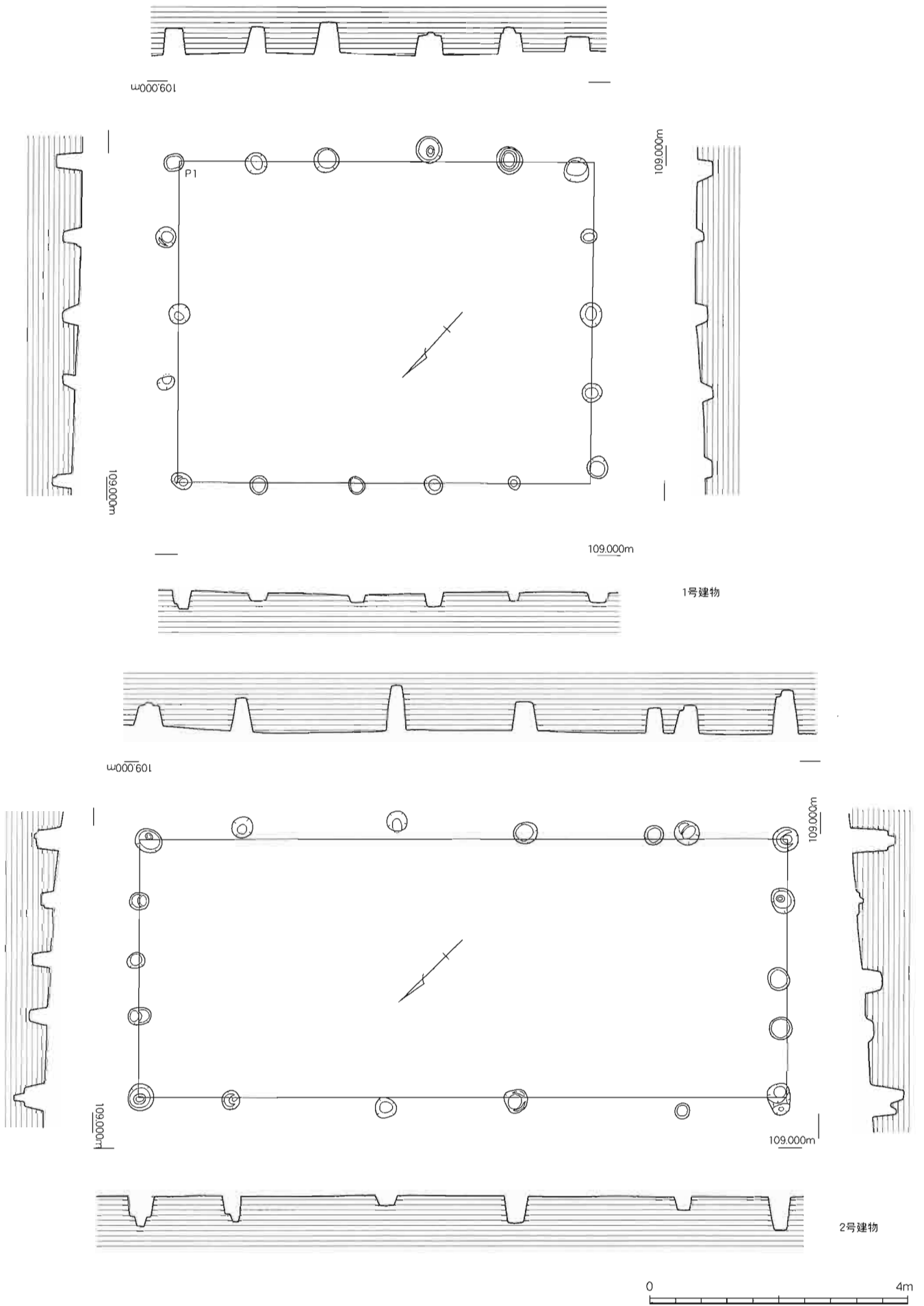
建物群の中心より西側で確認された建物で、梁間3間（約5.2m）以上、桁行5間（約8.9m）を測る。梁間方向の柱間平均は約1.3m、桁行方向の柱間平均は約1.8mを測る。建物延床面積は約46m²以上で、建物の軸方位はN-45° -Eである。検出面での柱穴掘り方の規模は20cm～45cmを測る。柱穴の深さは30cm～50cmを測る。建物柱穴P 1の中からは弥生土器の小破片が出土している。

5号掘立柱建物跡（第36・39図）

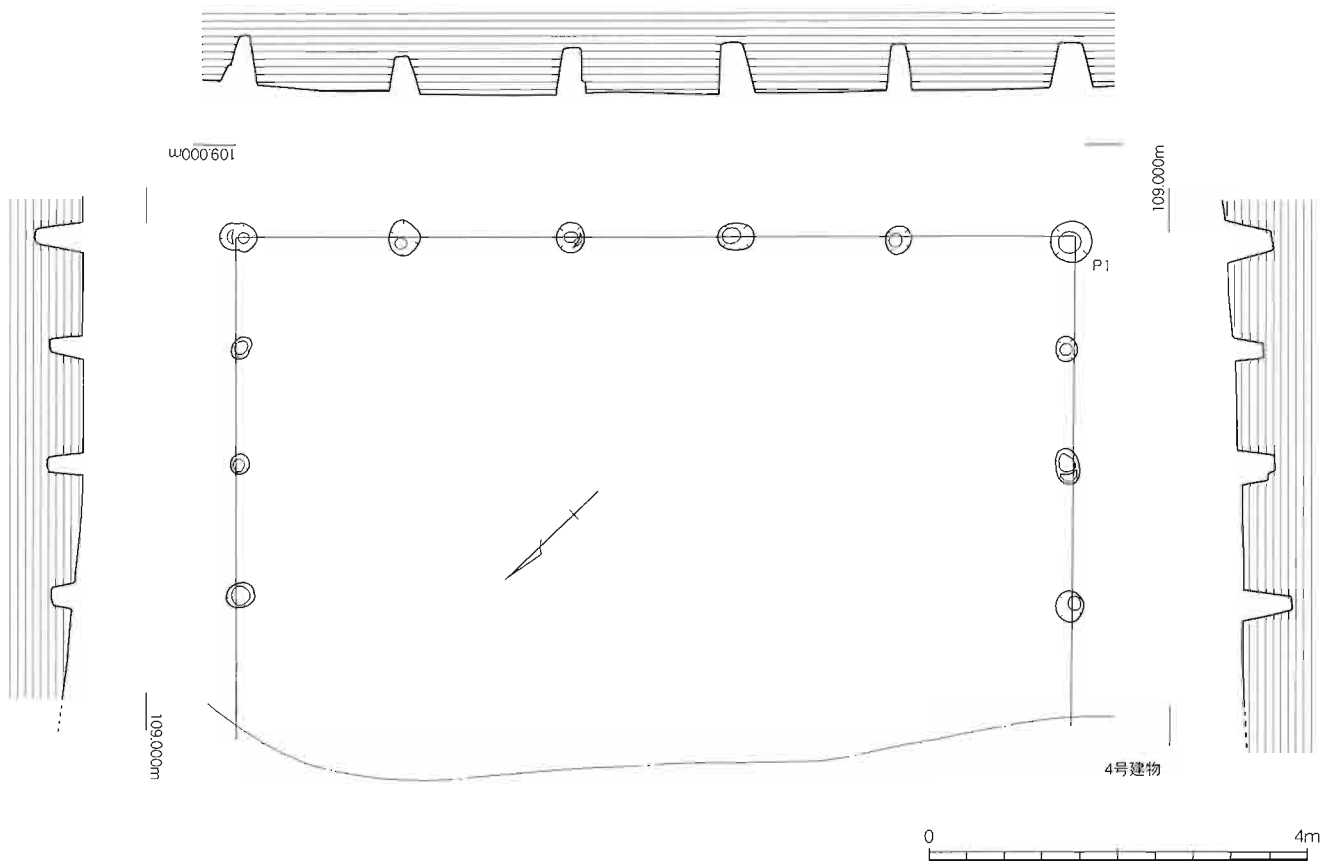
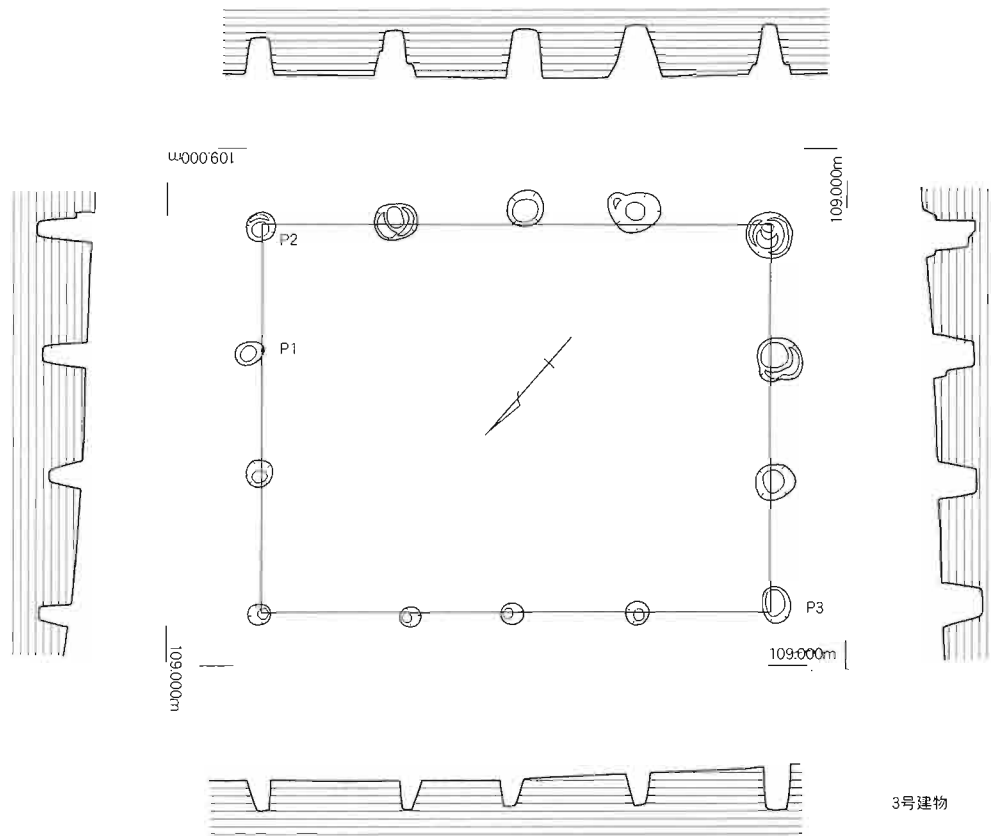
建物群の中心より北東側で確認された建物で、梁間3間（約4.0m）、桁行5間（約6.2m）を測る。梁間方向の柱間平均は約1.3m、桁行方向の柱間平均は約1.2mを測る。建物延床面積は約25m²で、建物の軸方位はN-49° -Eである。検出面での柱穴掘り方の規模は45cm～50cmを測る。柱穴の深さは20cm～60cmを測る。建物柱穴P 1・P 2の中からは弥生土器や須恵器の小破片が出土している。

6号掘立柱建物跡（第36・39図）

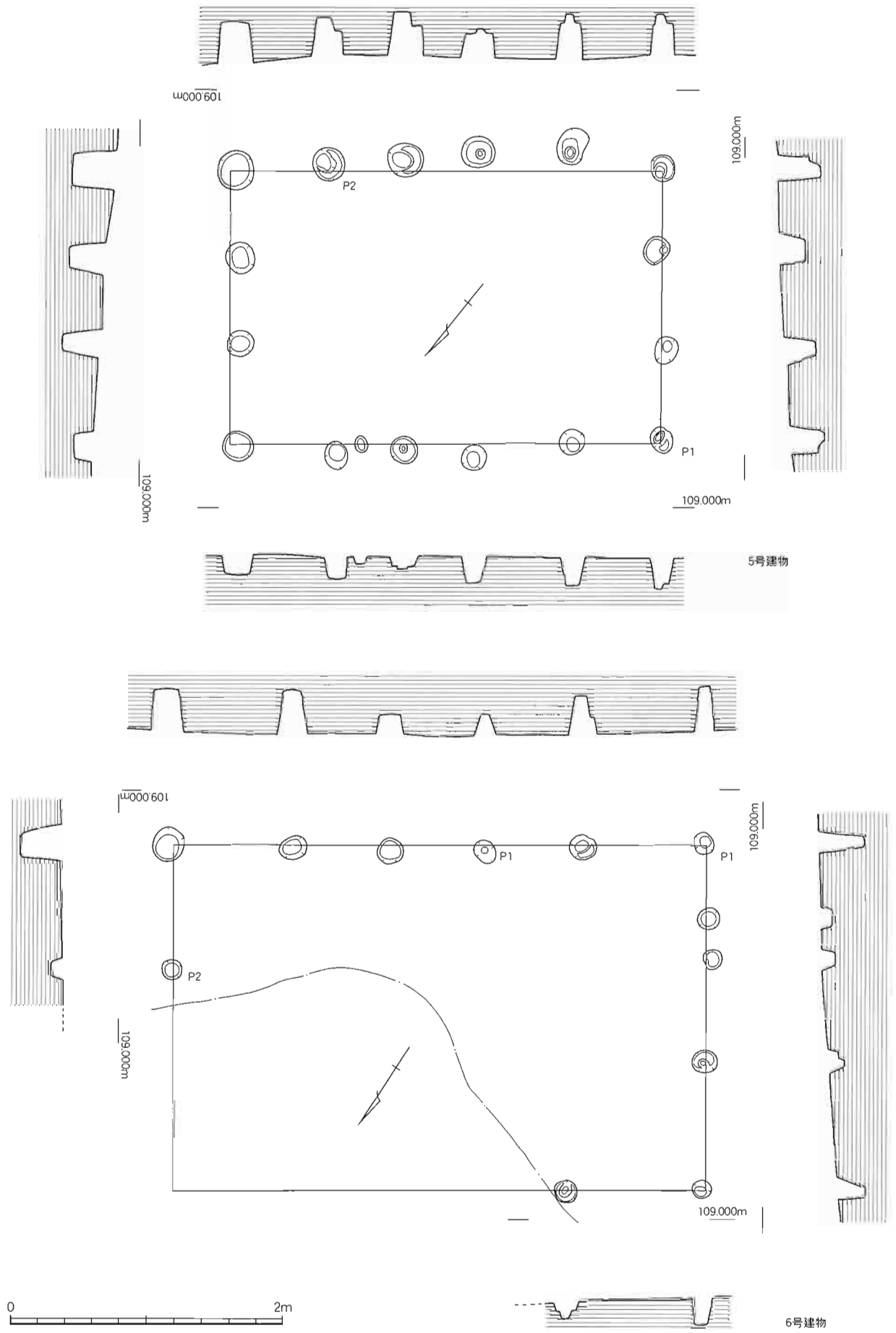
建物群の中心よりも北西側で確認された建物で、梁間3間（約5.0m）、桁行5間（約7.8m）を測る。梁間方向の柱間平均は約1.7m、桁行方向の柱間平均は約1.6mを測る。建物延床面積は約39m²で、建物の軸方位はN-56° -Eである。検出面での柱穴掘り方の規模は30cm～50cmを測る。柱穴の深さは25cm～65cmを測る。建物柱穴P 1・P 2の中からは弥生土器の小破片が出土している。



第37图 1・2号掘立柱建物跡実測图 (1/80)



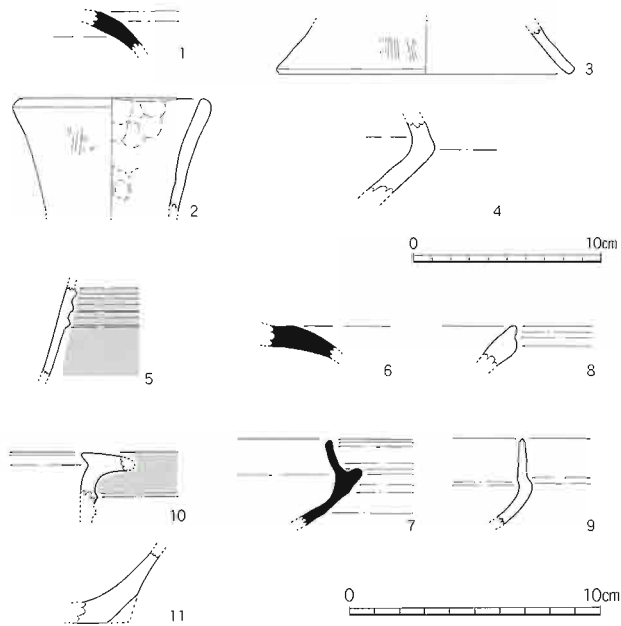
第38图 3・4号掘立柱建物跡実測図 (1/80)



第39图 5・6号掘立柱建物跡実測图 (1/80)

調査区南側掘立柱建物群柱穴出土遺物（第40図）

1は1号建物P 1より出土。須恵器坏蓋片である。天井部から口縁部にかけて屈曲する部分である。外面回転ヘラ削り。2～4は3号建物柱穴より出土。2はP 1より出土の弥生土器器台である。胴部中央付近はすぼまり、口縁部はやや内湾気味に開く。外面ハケ、内面指頭圧痕が残る。3はP 2より出土の高坏脚部である。外面ハケ目が残る。4はP 3出土の弥生土器壺口縁部である。袋状となる口縁端部を欠損する。5は4号建物P 1より出土。弥生土器甕である。胴部には三条突帯が貼布され、外面丹塗りである。6～9は5号建物出土。6・7はP 1より出土の須恵器坏蓋・坏身である。6は天井部から口縁部にかけて屈曲する部分である。7は底部を欠損しているが、蓋受部から返り端部までよく残っている。外面回転ヘラ削り。8・9はP 2より出土。8は縄文土器口縁部片である。9は土師器坏身である。口縁部はほぼ直口し、口縁部から体部へ向かって少し膨らむ。10・11は6号建物より出土。10はP 1より出土の弥生土器甕である。口縁部は鋤先状を呈する。胴部には突帯が貼布される。外面は丹塗りである。11はP 2より出土の弥生土器甕底部である。



第40図 調査区南側建物群出土遺物実測図（1/3・1/4）

2) 調査区東側掘立柱建物群

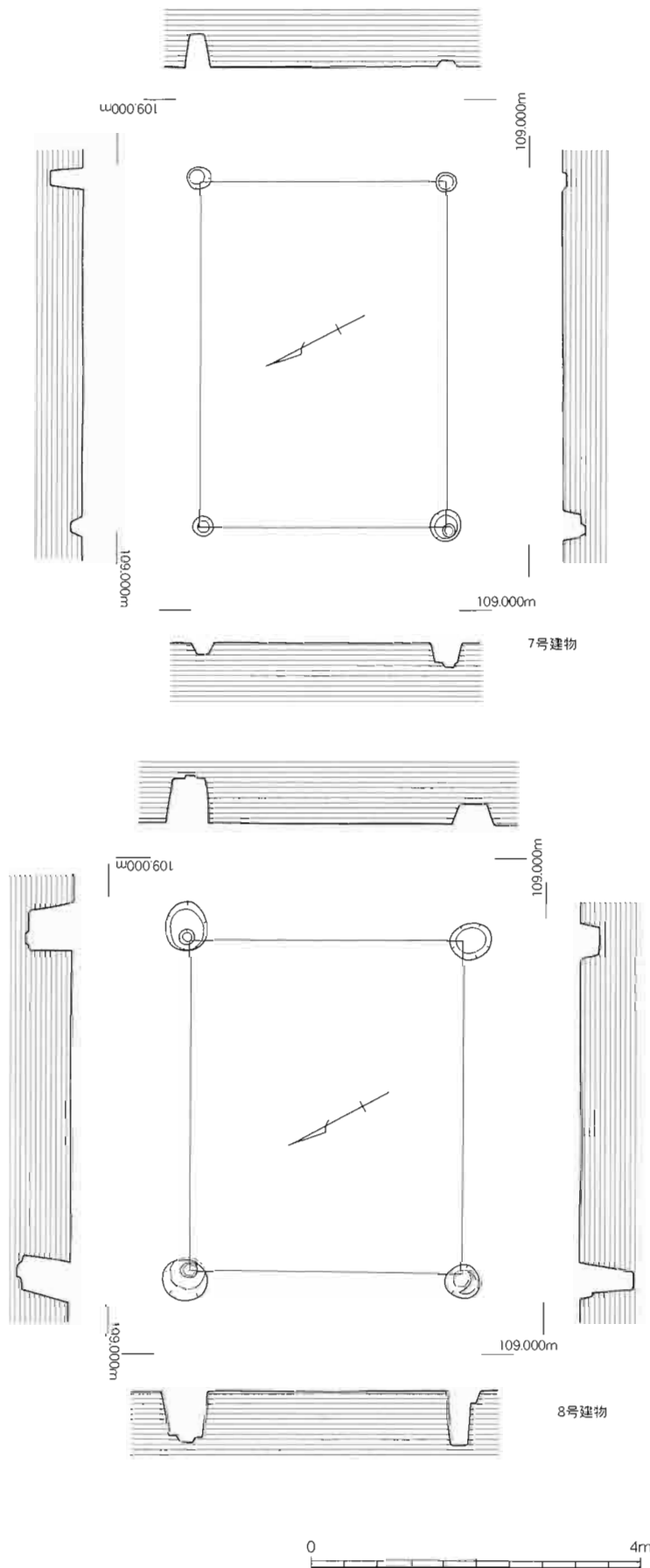
調査区東側では、16棟の掘立柱建物跡が確認された。これらの建物をみると、調査区中央付近を境に南（7～11号建物）と北（12～22号建物）とで、建物の軸方向や柱間間隔なども異なっていることがわかる。

南側の建物群のうち7・8・9・11号建物は1間×1間の小規模なもので、いずれも埋土は少し青みをおびた淡褐色を呈し、粘質性の強い土である。10号建物は1間×2間で、軸方向は7～9号建物に近いものの、黒褐色を呈し、あまりしまりのない埋土である。この10号建物からは遺物が出土し、古墳時代の建物であることがわかった。7・8・9・11号建物は、埋土の状況から、古墳時代以前の可能性が考えられるが、遺物の出土がないため時期は不明である。

北側の建物群は、19号建物だけが軸方向を違えているが、他の建物の軸方向はほぼ揃っており、埋土は10号建物と同様の黒褐色を呈していた。1間×1間、1間×2間の小型の建物も中にはあるが、相対的に2間×2間のそれも中央に棟持柱を持つ総柱建物が目立つ。以上の特徴から、北側の建物群のうち19号を除く建物は、切合関係はあるものの、ほぼ同じ時期の建物群と判断される。これらは南北に延びる古代の遺物が出土した12号溝と建物主軸方向が同じである点で注目される。また、19号建物を調査区南側建物群と同時期と想定すれば、この時期に北側の建物群の一带にも別の



第 41 図 調査区東側掘立柱建物群位置図 (1/300)



建物群が存在する可能性を示すことになる。

7号掘立柱建物跡 (第41・42図)

建物群の中心よりも東側で確認され、東西方向に長い1間(約3.0m)×1間(約4.2m)の建物である。建物延床面積は約12㎡と小型で、軸方位はN-27°-Eである。検出面での柱穴掘り方の規模は30cm~40cm、深さは10cm~40cmとまちまちである。柱穴からの出土遺物はなかった。

8号掘立柱建物跡 (第41・42図)

7号建物の西側に隣接して確認され、東西方向に長い1間(約3.3m)×1間(約4.0m)の建物である。建物延床面積は約13㎡と小型で、軸方位はN-28°-Eである。検出面での柱穴掘り方の規模は40cm~55cmと大きく、深さは30cm~60cmを測り、建物南側の柱穴だけが浅い。柱穴からの出土遺物はなかった。

9号掘立柱建物跡 (第41・42図)

東側建物群の最も南側で確認され、東西方向に長い1間(約3.3m)×1間(約4.4~4.5m)の建物である。建物延床面積は約15㎡と小型で、軸方位はN-42°-Eである。検出面での柱穴掘り方の規模は30cm~45cm、深さは35cm~45cmを測る。柱穴からの出土遺物はなかった。

10号掘立柱建物跡 (第41・43図)

8号建物の南側で確認され、9号溝に切られる。東西方向に長い1間(約3.4m)×2間(約5.2~5.7m)の建物である。建物延床面

第42図 7・8号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

積は約19m²で、軸方位はN-33° - Eである。検出面での柱穴掘り方の規模は45cm~55cm、深さは45cm~65cmを測り、しっかりしている。柱穴の中からは土師器や須恵器の小片が出土した。

11号掘立柱建物跡(第41・44図)

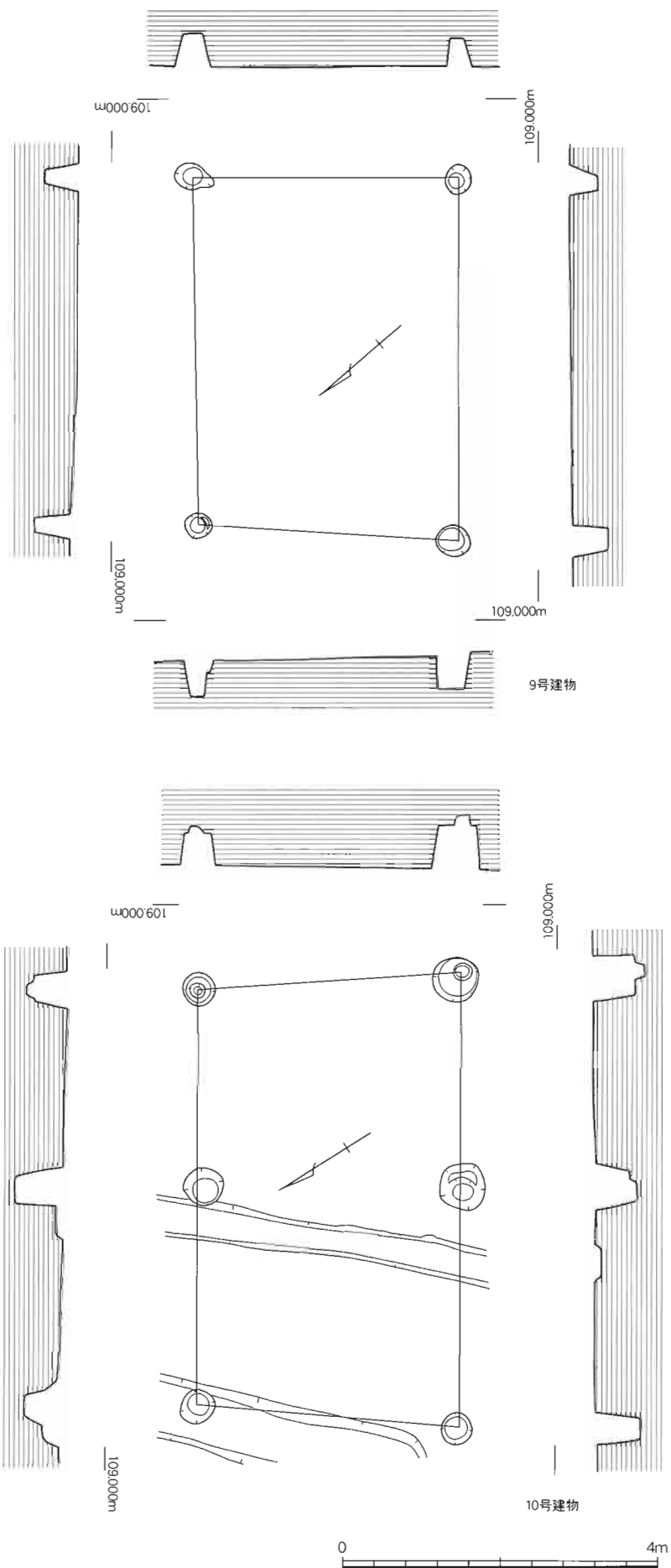
8号建物の北側で確認され、東西方向に長い1間(約2.6~3.0m)×1間(約3.4~3.6m)の建物である。建物延床面積は約10m²と小型で、軸方位はN-48° -Eである。検出面での柱穴掘り方の規模は30cm~55cm、深さは55cm~70cmを測り、柱穴の大きさに比べ深さはしっかりしている。柱穴からの出土遺物はなかった。

12号掘立柱建物跡(第41・44図)

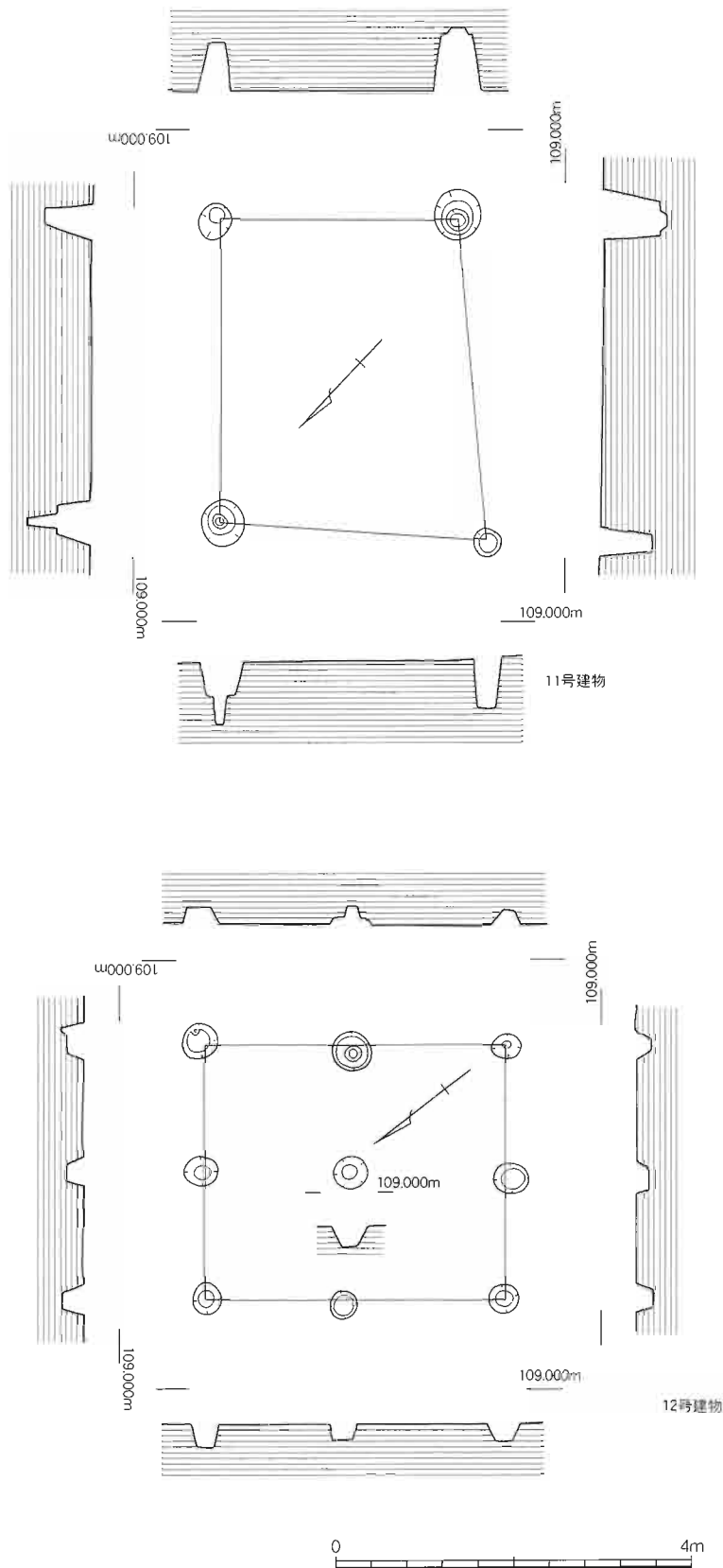
11号建物の北側で確認され、南北方向に長い2間(約2.8m)×2間(約3.4m)の総柱建物である。建物延床面積は約9.5m²と小型で、建物の軸方位はN-38° -Eである。検出面での柱穴掘り方の規模は30cm~45cm、深さは15cm~25cmを測り、全体的に浅い。柱穴からの出土遺物はなかった。

13号掘立柱建物跡(第41・45図)

12号建物の北西側で確認され、南北方向に長い2間(約3.0m)×2間(約3.8m)の総柱建物である。建物延床面積は約11.4m²と小型で、建物の軸方位はN-42° -Eである。検出面での柱穴掘り方の規模は45cm~65cm、深さは35cm~55cmを測



第43図 9・10号掘立柱建物跡実測図(1/80)



り、大きくしっかりしている。柱穴からは、土師器口縁部片が出土した。

14号掘立柱建物跡 (第41・45図)

13号建物の北東側で確認され、ほぼ正方形を呈する2間(約3.3m)×2間(約3.4m)の建物である。15号建物に切られ、また建物の南端柱穴は削平を受け残っていない。建物延床面積は約11.2㎡と小型で、建物の軸方位はN-34°-Eである。検出面での柱穴掘り方の規模は30cm～50cm、深さは10cm～30cmを測り、全体的に浅い。柱穴からの出土遺物はなかった。

15号掘立柱建物跡 (第41・46図)

14号建物の西側で確認され、南北方向に長い2間(約2.4m)×2間(約3.9m)の総柱建物で、14号建物を切る。建物延床面積は約9.4㎡と小型で、建物の軸方位はN-37°-Eである。検出面での柱穴掘り方の規模は30cm～45cm、深さは35cm～60cmを測り、しっかりしている。柱穴からの出土遺物はなかった。

16号掘立柱建物跡 (第41・46図)

15号建物の西側で確認され、東西方向に長い2間(約2.0m)×1間(約2.9～3.0m)の建物で、12号溝と切り合う。建物延床面積は約6㎡と小型で、建物の軸方位はN-38°-Eである。検出面での柱穴掘り方の規模は30cm～35cm、深さは15cm～25cmを測り、全体的に浅い。柱穴からの出土遺物はなかった。

第44図 11・12号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

17号掘立柱建物跡(第41・46図)

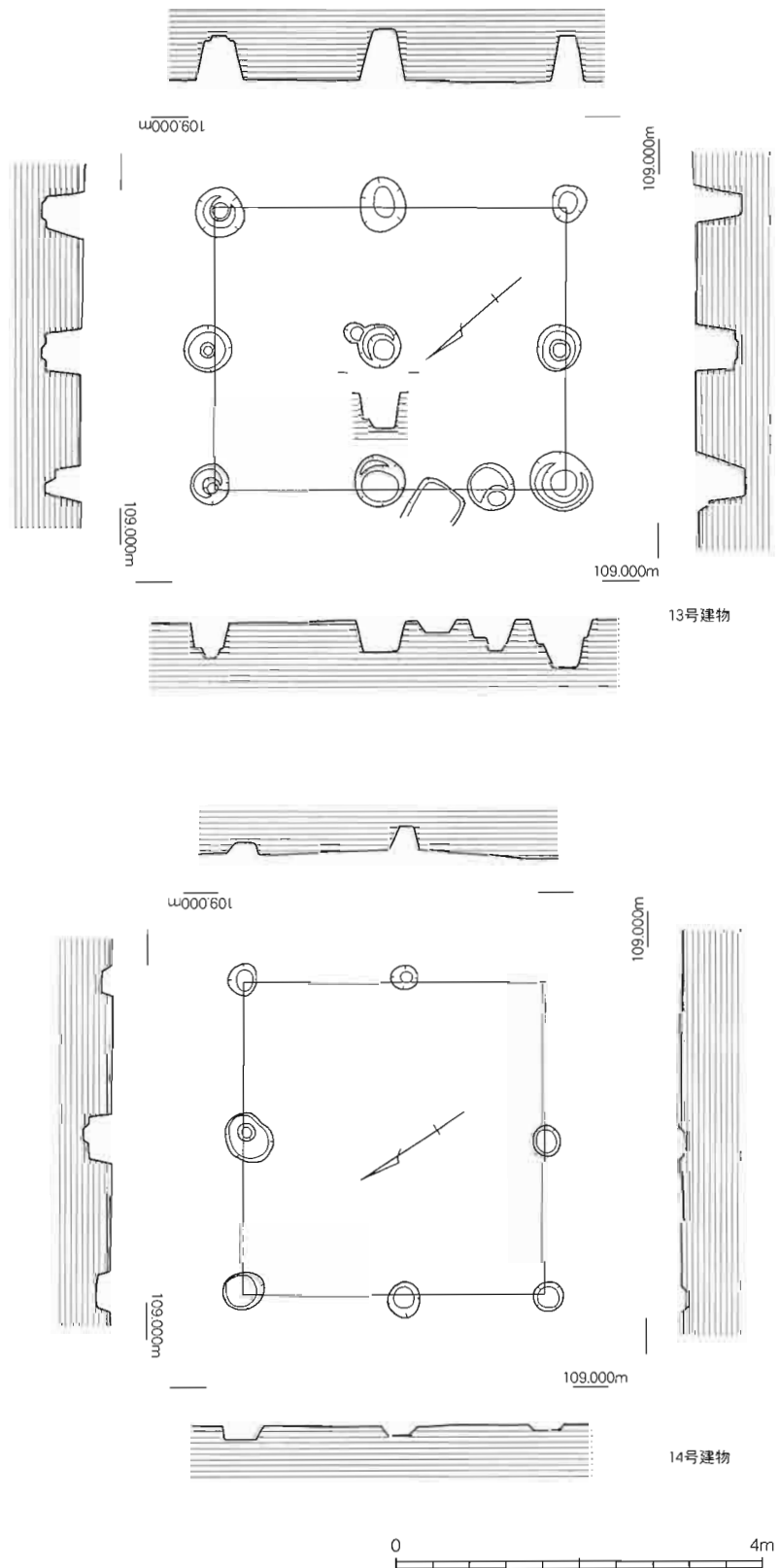
15号建物の北側で確認され、南北方向に長い2間(約3.7m)×2間(約4.5m)の総柱建物で、22号建物と切り合う。建物延床面積は約16.6㎡と他に比べやや大きく、建物の軸方位はN-42°-Eである。検出面での柱穴掘り方の規模は40cm~45cm、深さは35cm~70cmを測り、しっかりしている。柱穴からの出土遺物はなかった。

18号掘立柱建物跡(第41・46図)

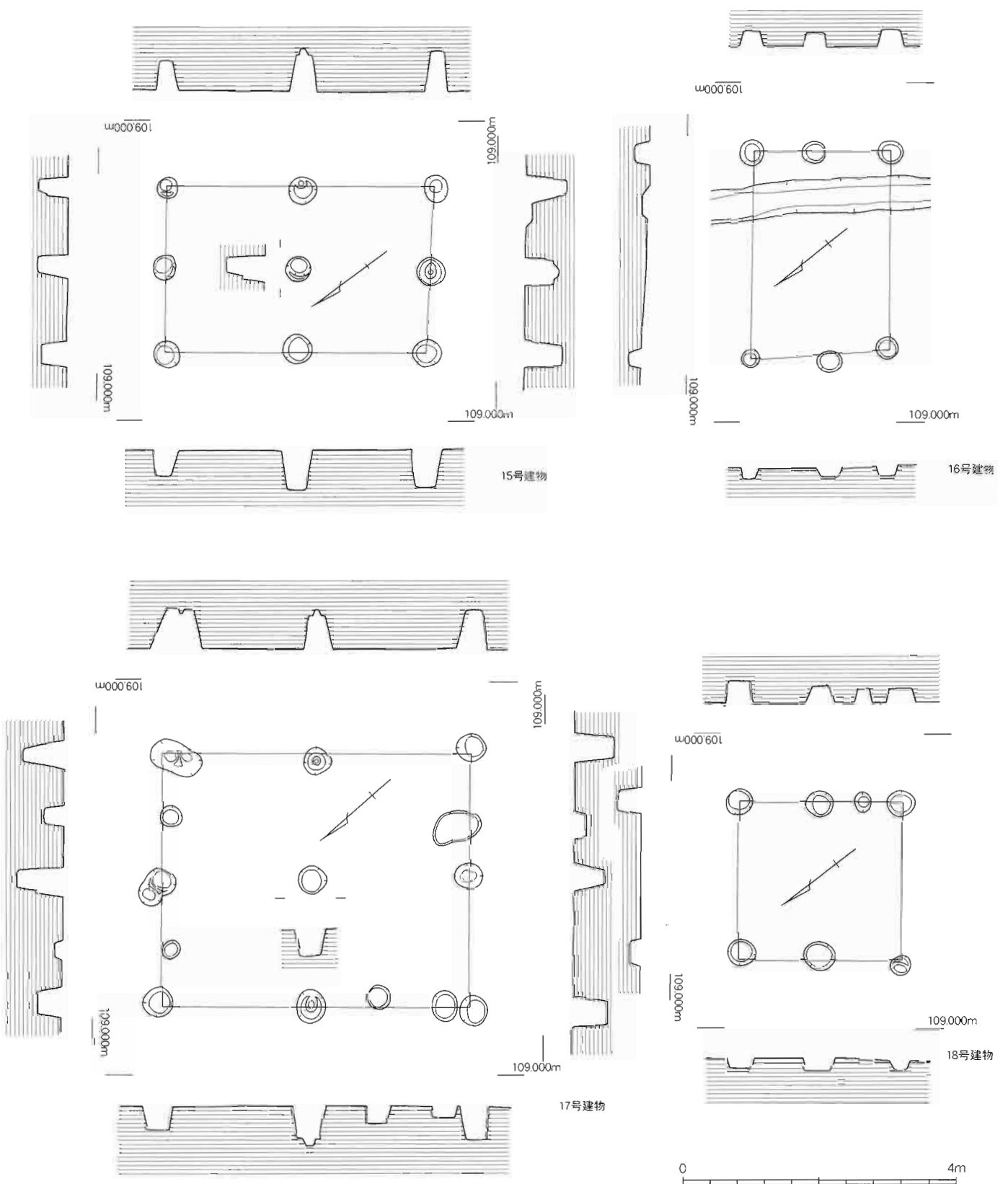
17号建物の北側で確認され、ほぼ正方形に近い1間(約2.3m)×2間(約2.4m)の建物で、19号建物と切り合う。建物延床面積は約5.5㎡と小型で、建物の軸方位はN-38°-Eである。検出面での柱穴掘り方の規模は30cm~45cm、深さは15cm~30cmを測り、全体的に浅い。柱穴からの出土遺物はなかった。

19号掘立柱建物跡(第41・47図)

18号建物の北側で確認され、梁間3間(約4.2m)、桁行4間(約8.0m)を測る。梁間方向の柱間平均は約1.4m、桁行方向の柱間平均は約2.0mを測る。建物延床面積は約33.6㎡で、建物の軸方位はN-54°-Eである。検出面での柱穴掘り方の規模は20cm~35cmを測る。柱穴の深さは15cm~35cmを測る。柱穴からの出土遺物はなかった。



第45図 13・14号掘立柱建物跡実測図(1/80)



第46图 15·16·17·18号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

20号掘立柱建物跡（第41・48図）

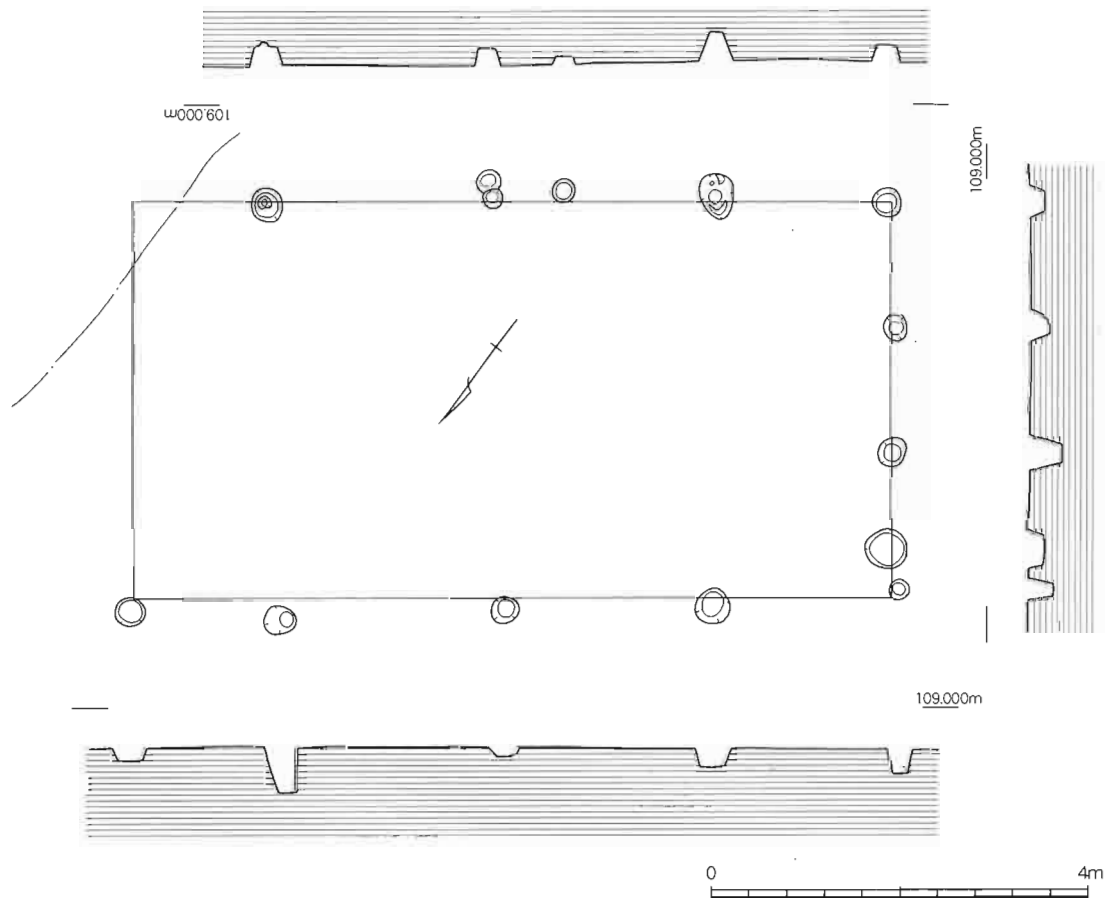
19号建物の西側で確認され、南北方向に長い1間（約1.7m）×1間（約2.0～2.2m）の建物で、12号溝と切り合う。建物延床面積は約3.6㎡と小型で、建物の軸方位はN-36° -Eである。検出面での柱穴掘り方の規模は45cm～55cm、深さは35cm～55cmを測り、大きくしっかりしている。柱穴からは、須恵器や土師器の小片が出土した。

21号掘立柱建物跡（第41・48図）

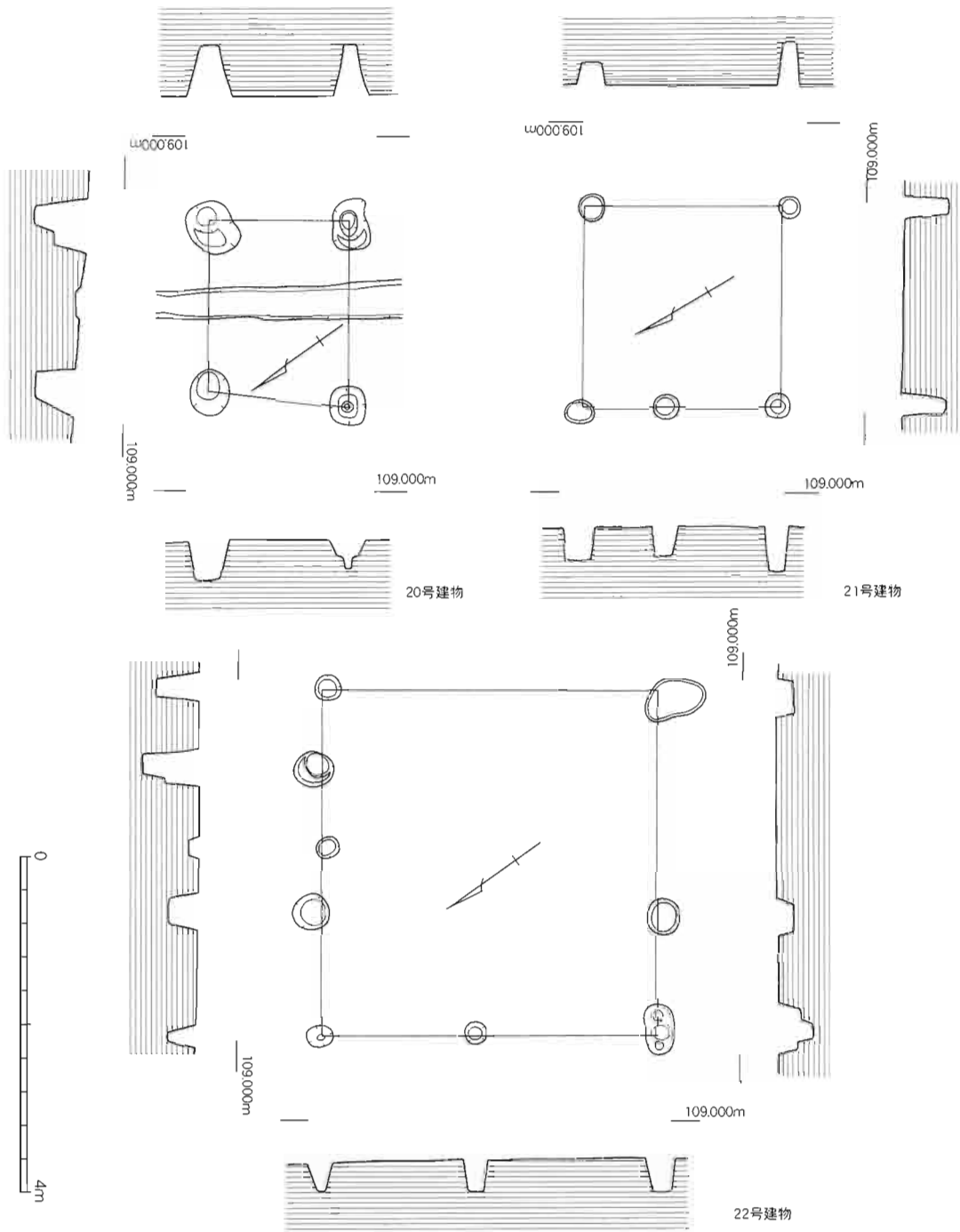
17号建物の東側で確認され、東側柱列中央の柱穴は検出できなかったが、ほぼ正方形に近い1間（約2.3m）×2間（約2.4m）の建物である。建物延床面積は約5.5㎡と小型で、18号建物と同じ規模を測る。建物の軸方位はN-32° -Eである。検出面での柱穴掘り方の規模は30cm～35cm、深さは35cm～50cmを測り、しっかりしている。柱穴からの出土遺物はなかった。

22号掘立柱建物跡（第41・48図）

17号建物と切り合って確認され、東側柱列、及び南側柱列中央の柱穴は検出できなかったが、ほぼ正方形に近い2間（約4.0m）×2間（約4.1m）の建物である。建物延床面積は約16.4㎡で、軸方位はN-35° -Eである。検出面での柱穴掘り方の規模は30cm～35cm、深さは15cm～40cmを測り、まちまちである。柱穴からの出土遺物はなかった。



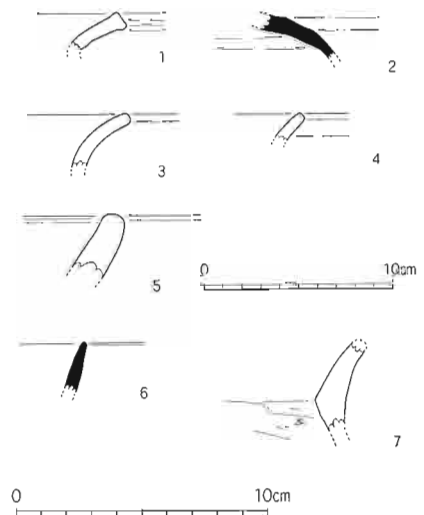
第47図 19号掘立柱建物跡実測図（1/80）



第48図 20・21・22号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

調査区東側掘立柱建物柱穴出土遺物 (第49図)

1・2は10号建物P1より出土。1は弥生土器甕口縁部片。2は須恵器坏蓋である。外面回転ヘラ削り。3・4は13号建物P1より出土。3は土師器甕口縁部で、大きく外反する。4も3と同様である。5は18号建物P1より出土。土師器甕の口縁部である。器壁が分厚く内湾する。6・7は20号建物P1より出土。6は須恵器坏身端部である。丸く収める。7は土師器甕で、口縁部は、「く」の字に外反する。内面横方向のヘラ削り。



第49図 調査区東側建物群出土遺物実測図(1/3・1/4)

3) 調査区北側掘立柱建物群

調査区東側建物群より、東西に調査区を分断する現水路を挟んで北側では、柱穴が多数まとまって検出された。これらの柱穴群は14号溝を中心に溝から5m以内に集中し、とくに溝の内側では、柱穴が折り重なって検出され、幾度も同じ場所に建替を行った様子がうかがわれた。この範囲内には10棟を超える数の建物が本来存在していたと推定されるが、密集度が高くそのため1棟ごとに建物として復元していくことができなかった。しかし、これらの建物群は、16号溝のある付近で唯一23号建物が離れて1棟確認されるのみでそれより北側には広がらない。このことは、ある程度居住地の選定がなされていたことを物語っている。これらの柱穴の埋土は、大部分が淡褐色で粘質性が強く、調査区東側建物群柱穴埋土と比較すると明らかに異なっており、またその中から出土した遺物は、土師質土器や瓦質土器、中国からの輸入陶磁器類など、少ないながらも大半は中世期に帰属するものであった。

23号掘立柱建物跡 (第50・51図)

16号溝に切られて確認され、ほぼ正方形に近い2間(約3.6m)×2間(約3.6m)の建物である。

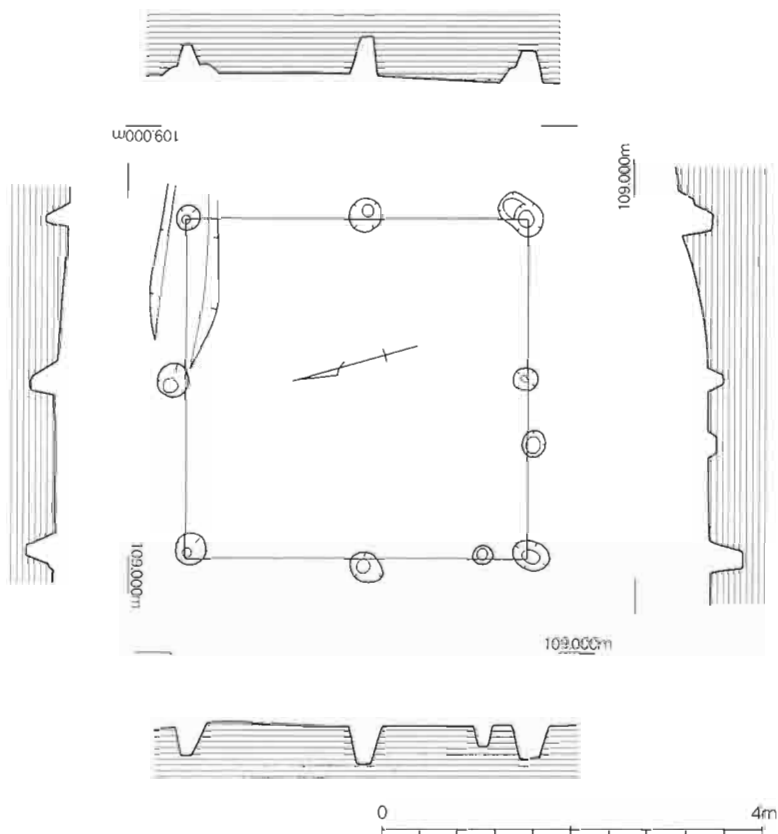


第50図 調査区北側掘立柱建物群位置図 (1/200)

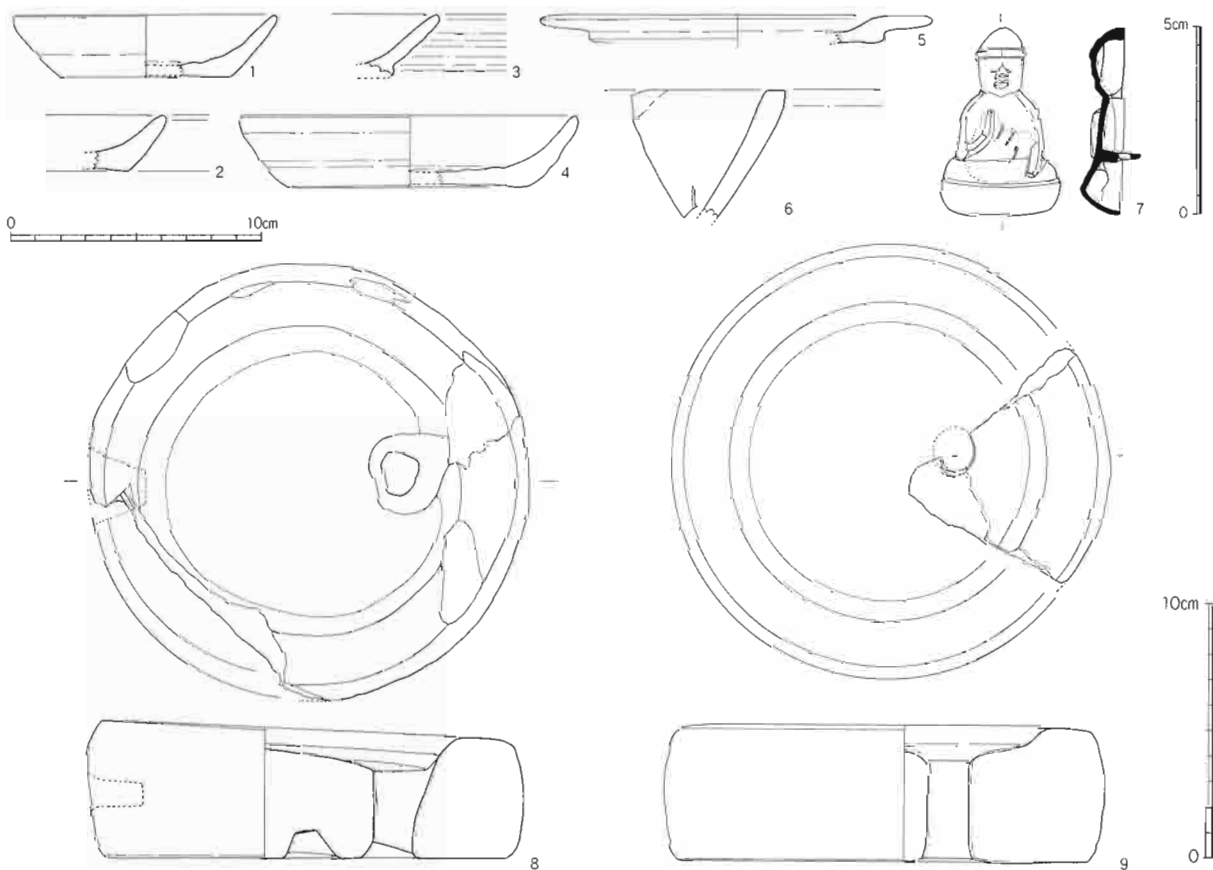
建物延床面積は約13m²と小型で、建物の軸方位はN-15° -Eである。検出面での柱穴掘り方の規模は25cm～35cm、深さは15cm～40cmを測る。柱穴からの遺物の出土はなかった。

調査区北側建物群出土遺物（第52図）

1・2はP1より出土。土師質土器坏。底部糸切り。3はP2より出土の土師質土器坏。4はP3より出土の土師質土器坏。底部糸切り。5はP4より出土。瓦質土器蓋。6はP5より出土。瓦質土器拵鉢。7はP6より出土。青銅製懸仏。胸部には表面の鍍金に彫られた袈裟の跡が一部分残る。8はP2より出土の石臼上石。安山岩製で幅34.8cm、高さ9.4～11.0cm。8はP7より出土の石臼上石片。復元幅約34.6cm、高さ約10.7cm。



第51図 23号掘立柱建物跡実測図（1/80）



第52図 調査区北側建物群出土遺物実測図（1/3・1/4・1/6）

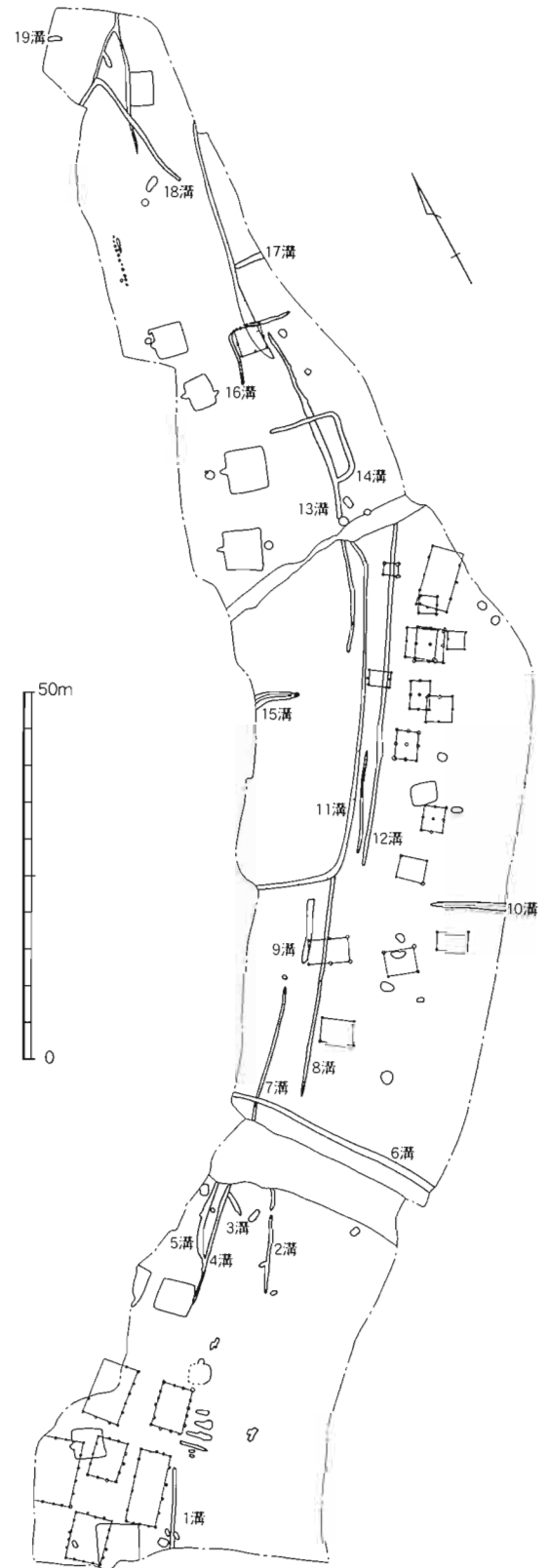
3. 溝状遺構

溝状遺構（以下溝と記す）は、調査区内において、19条が確認された。これらの溝の埋土中からは、少ないながらも遺物が出土し、それにより、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世のそれぞれ異なる時期の溝が存在することが明らかとなった。

弥生時代の溝は2・3号溝が該当するが、両者とも短く、機能としては不明である。

古墳時代の溝は1・4・7・13・18号溝が該当する。これらの溝は途中で途切れているが、全体からみるとすべて南北方向に延び、1本につながる溝であったことが推測される。等高線からその溝の流れの方向を見てみると、調査区中央付近が高く、南北両方向に下っている様子が伺えることから、この溝が水利のための施設とは考え難く、別の機能が付与されていたと考えられる。また、18号溝が途中から鋭角に屈曲し、急に川側の方へ延びる点も、これら溝が何らかの区画をするための溝である場合や道の側溝としての可能性を示している。この点から注目されるのは、調査区南側で検出された1号溝に隣接存在する畝状遺構の存在である。この畝状遺構は検出面での形や長さかまちまちであることから、畑作等の遺構とも考えられる。しかし、1号溝と直交して延びていることから、関連した遺構と判断され、このことから1つの可能性として、畝状遺構は枕木をいれて道とした古代の官道のような施設が想定される。その側溝として、一時代前の古墳時代に1・4・7・13・18号溝が機能していたと考えることができる。

古代の溝は12・15号溝が該当するが、12号溝については、東側建物群と並行して直線的に延び建物と関係して掘られた可能性が高い。この溝の中からは柵列などの痕跡がみられないことから、古墳時代の溝と同様に、道に付属する側溝と考えられる。12号溝の南には、この溝と並行して走っていたと考えられる8号溝があり、遺物は出土していないものの12号溝と同様の深さや埋土を呈する状況から、12号溝と同様の機能が考えられる。したがって、8・12号溝



第53図 溝状遺構配置図 (1/1000)

の間に道があったと推定できる。8・12号溝を道としてみた場合、16号、20号建物と切り合うことになるが、9号、11号も道としての機能をもつならば、建物の立った時期には別の位置に道が存在し、それが造り直しを受けて、位置が変わったことも想像される。

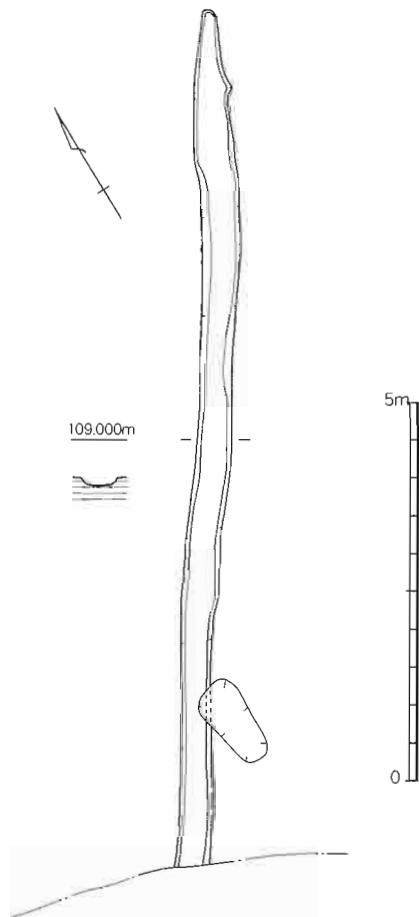
中世の溝は14・16・17号溝が該当するが、14号溝は屋敷地を囲む区画溝であったことは、建物群の位置関係からはっきりしている。5・16・17号溝については、中世の遺物包含層（プラントオパール分析結果から水田と判断される）がそのすぐ下からはじまっていることを考えれば、水路としての機能を果たしていたことが十分想定される。近世の6・10号溝は、現在の水路や畦畔の位置と少しずれてそれと並行しており、現在の水路と同様の機能を果たしていたと考えられる。

1号溝（第53・54図）

調査区南端で確認された溝で、調査区を南北方向にのびる。溝の北側は途中で途切れ、南側は調査区外へ続く。溝の残存長約11.2m、検出面での幅約0.4mを測る。溝の断面は「U」字状を呈し、深さ約15cmと浅い。溝の中からは須恵器や土師器の小片が出土している。

2号溝（第53・55図）

調査区南端で確認された溝で、調査区を南北方向にのびる。溝の南側は途中で途切れ、北側は現水路により切られる。溝はほぼ直線的に延びるが、途中で約1m程一端途切れ、現代溝の近くからやや方向を変え、川のある西側に向かって屈曲する。溝の残存長約14.5m、検出面での幅約0.3mを測る。溝の断面は「U」字状を呈し、深さ約15cmと浅い。溝の中からは弥生土器の底部などが出土している。



第54図 1号溝実測図（1/100）

呈し、深さ約15cmと浅い。溝の中からは土師器の小片が出土している。

5号溝（第53・56図）

3号溝の西側で確認された溝で、調査区を南北方向にやや湾曲しながらのびる。溝の南側は途中

3号溝（第53・55図）

2号溝の西側で確認された短い溝で、調査区を南北方向にのびる。溝の南側は途中で途切れ、北側は4号溝に切られる。溝の残存長約3.5m、検出面での幅約0.5mを測る。溝の断面は「U」字状を呈し、深さ約15cmと浅い。溝の中からは弥生土器の口縁部片などが出土している。

4号溝（第53・56図）

3号溝の西側で確認された溝で、調査区を南北方向にのびる。溝の南側は途中で途切れ、北側は現水路に切られる。また、5号溝に切られる。溝の残存長約16.5m、検出面での幅約0.4mを測る。溝の断面は「U」字状を

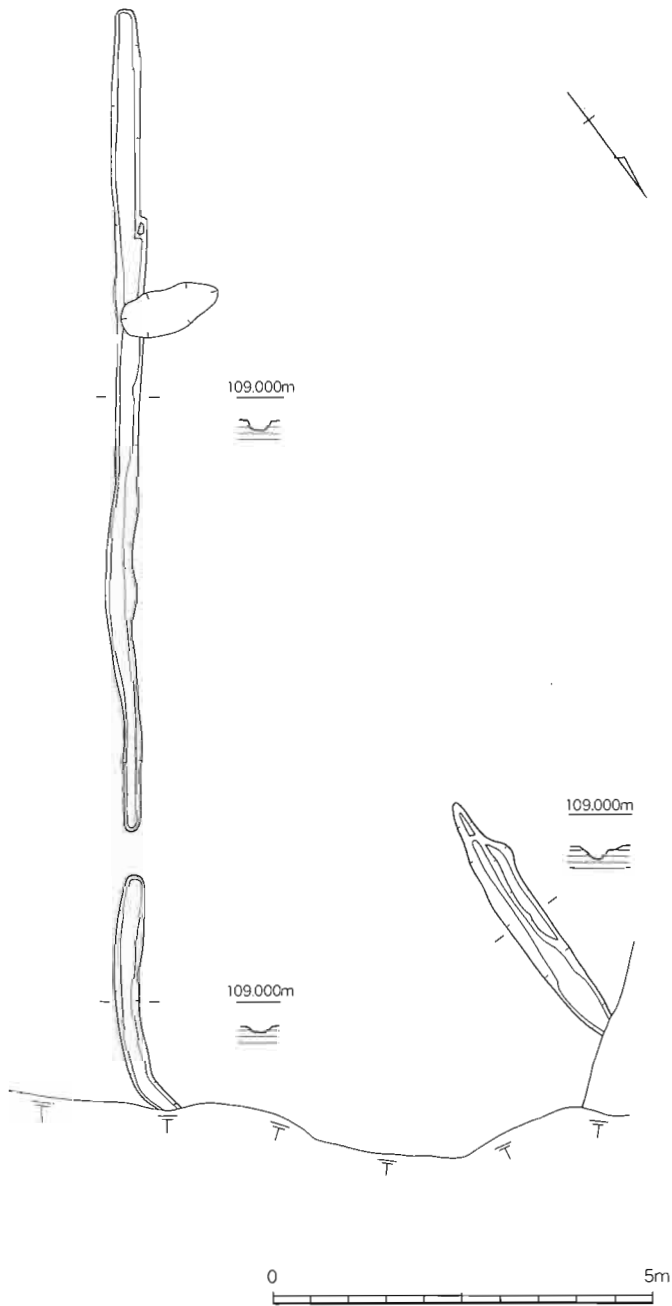
で途切れ、北側は現水路に切られる。また、4号溝を切る。溝の残存長約11.7m、検出面での幅は最大で約0.8mを測る。溝の断面は「U」字状を呈し、深さ約10cmと浅い。溝より南側には、この溝と同じ埋土の中世の遺物包含層が広がっており、薄い水田盤土を形成していた。この中からはわずかながら輸入陶磁器の小片が出土している。

6号溝 (第53図)

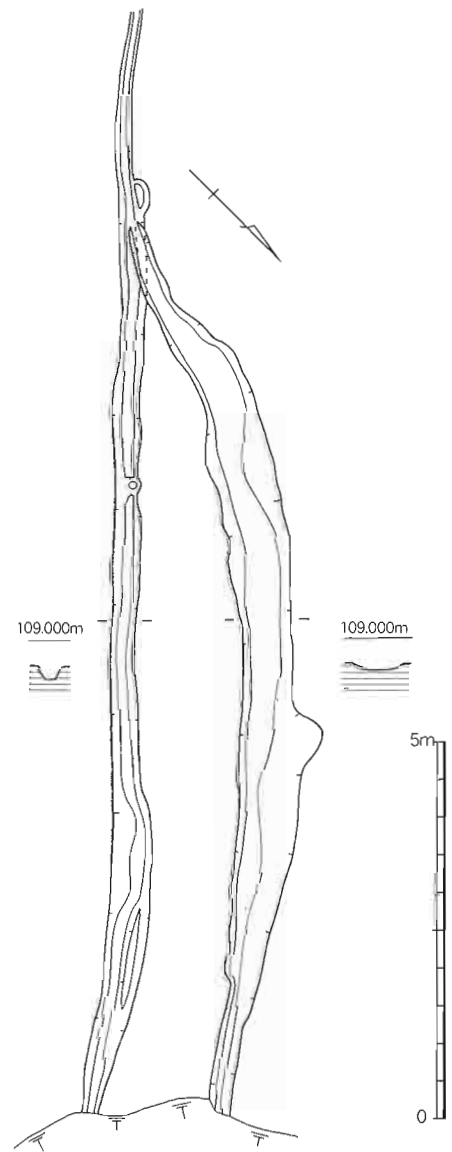
現水路の北側をこれに並行して走る溝で、調査区を東西方向に直線的にのびる。溝の両側は調査区外へと続き、7号溝を切る。溝の残存長約30.0m、検出面での幅は最大で約1.0mを測る。溝の断面は「U」字状を呈し、深さ約10cmと浅い。溝の中からは染付の小片が出土している。

7号溝 (第53図)

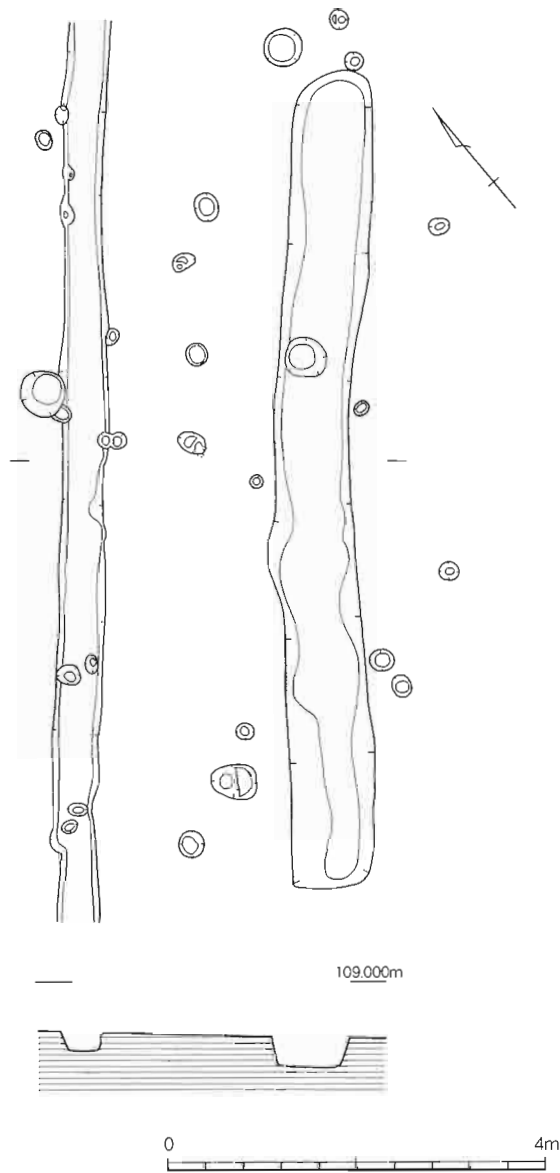
4号溝の現水路を挟んで北側延長線上で確認された溝で、調査区を南北方向にのびる。溝の北側



第55図 2・3号溝実測図 (1/100)



第56図 4・5号溝実測図 (1/100)



第57図 8・9号溝実測図 (1/80)

にのびる。溝の東側は調査区外へと続き、西側は途中で途切れる。溝の残存長約10.2m、検出面での幅は最大で約1.0mを測る。溝の底には、数か所の掘りなおしを行った痕跡が残っていた。溝の深さは約10cmと浅い。溝の中からは染付の小片が出土している。

11号溝 (第53・58図)

調査区中央で確認された溝で、調査区を南北方向にやや蛇行しながらのびる。溝の長さ約13.9m、検出面での幅約0.2mを測る。溝の断面は「U」字状を呈し、深さ約10cmを測る。溝の中からの出土遺物はなかった。

12号溝 (第53・58図)

11号溝の東側で確認された溝で、調査区を南北方向に直線的にのびる。溝の南側は途中で途切れ、北側は現水路により切られ、水田造成により削平を受けている。溝の残存長約46.5m、検出面での幅約0.4mを測る。溝の断面は「U」字状を呈し、深さ約20cmと浅い。溝の中からは、須恵器や土師器

は途中で途切れ、6号溝に切られる。北側は現水路に切られる。溝の残存長約19.2m、検出面での幅約0.4mを測る。溝の断面は「U」字状を呈し、深さ約15cmと浅い。溝の中からは土師器の小片が出土している。

8号溝 (第53・57図)

7号溝の東側で確認された溝で、調査区を南北方向に直線的にのびる。溝の南側は途中で途切れ、北側は現水田造成により削平を受けている。溝の残存長約29.7m、検出面での幅約0.4mを測る。溝の断面は「U」字状を呈し、深さ約20cmと浅い。溝の中からの出土遺物はなかった。

9号溝 (第53・57図)

8号溝の西側、7号溝の北側で確認されたやや幅の広い溝で、調査区を南北方向に直線的にのびる。10号掘立柱建物を切る。溝の長さ約8.6m、検出面での幅約0.9mを測る。溝の断面は「逆台形」を呈し、深さ約30cmを測る。溝の中からの出土遺物はなかった。

10号溝 (第53図)

現畦畔の北側をこれに並行して走る溝で、調査区を東西方向に直線的

の小片が出土している。

13号溝 (第53・59図)

12号溝の西側で確認された溝で、調査区を南北方向に弧状にのびる。溝の両側は途中で途切れ、14号溝に切られる。溝の残存長約47.0m、検出面での最大幅約0.8mを測る。溝の断面は「U」字状を呈し、深さ約25cmを測る。溝の中からは、須恵器や土師器が出土している。

14号溝 (第53・59図)

13号溝の東側で確認された溝で、「コ」字状に区画する。溝は途中で途切れる。13号溝を切る。溝の残存長は北側で約9.6m、東側で約9.5m、南側で3.2mを測る。検出面での最大幅約0.6mを測る。溝の断面は「U」字状を呈し、最も残りのよい東側で深さ約30cmを測る。溝の埋土をみると、粘土の地山ブロックがまとまって入っており、人為的に埋められた様子がうかがえる。溝の中からは、少量ながら白磁や青磁、瓦質土器の小片などが出土している。

15号溝 (第53・60図)

調査区中央西端で確認された溝で、調査区を東西方向にのびる。溝の東側は途中で途切れ、西側は調査区外へと続く。溝の残存長約5.7m、検出面での最大幅約1.9mを測る。溝の断面は「V」字状を呈し、深さ約60cmを測る。溝の中からは、須恵器がまとまって出土している。

16号溝 (第53・61図)

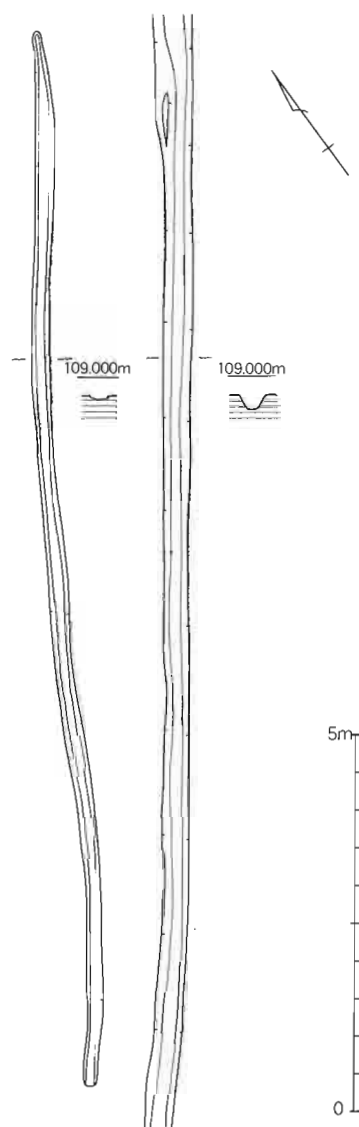
14号溝の北側で確認された溝で、調査区東側から南方向に向かって「L」字状にのびる。溝の南側は途中で途切れ、東側は調査区外へと続く。また23号掘立柱建物切る。溝の残存長は、東西方向で約8.9m、南北方向で約7.1mを測る。検出面での最大幅約0.5mを測る。溝の断面は「U」字状を呈し、深さ約10cmと浅い。溝の中からは、瓦質土器片が出土している。

17号溝 (第53図)

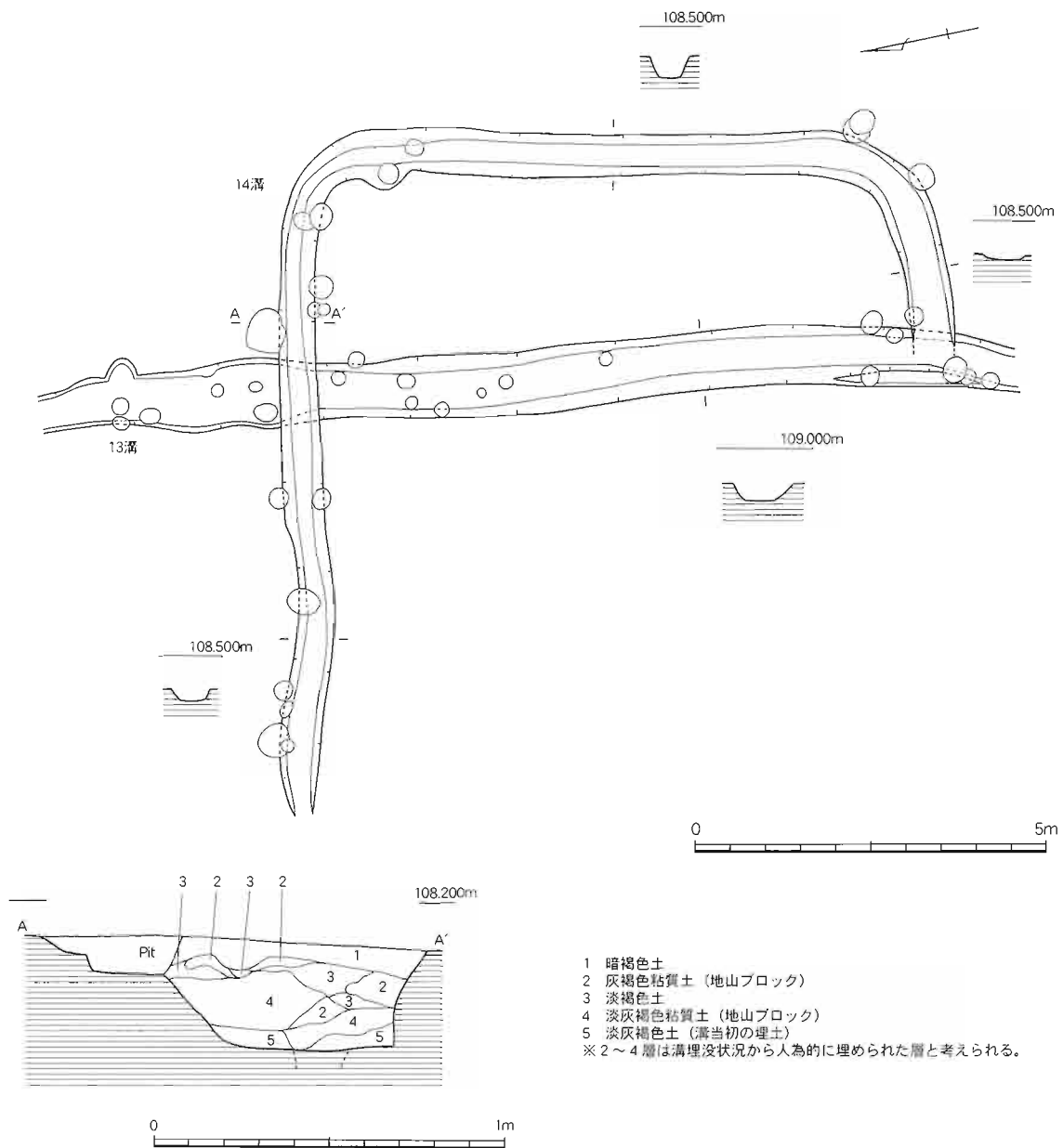
16号溝の北側で確認された溝で、東西方向に向かってのびる。溝の西側は途中で途切れ、東側は調査区外へと続く。溝の残存長は約4.4m、検出面での最大幅約0.6mを測る。溝の断面は「U」字状を呈し、深さ約15cmと浅い。溝の中からは、瓦質土器片が出土している。

18号溝 (第53・62図)

調査区北側端で確認された溝で、南北方向に向かってのび、途中鋭角に屈曲し方向を変え、東西方向にのびる。溝の南側は途中で途切れ、西側は調査区外へと続く。屈曲部までの残存長は約17.9m、屈曲部から区外までは約4.3mを測る。検出面での最大幅は約0.5mを測る。溝の断面は「U」字状を呈し、深さは約0.2mを測る。溝の中からは須恵器や土師器の小片が出土している。



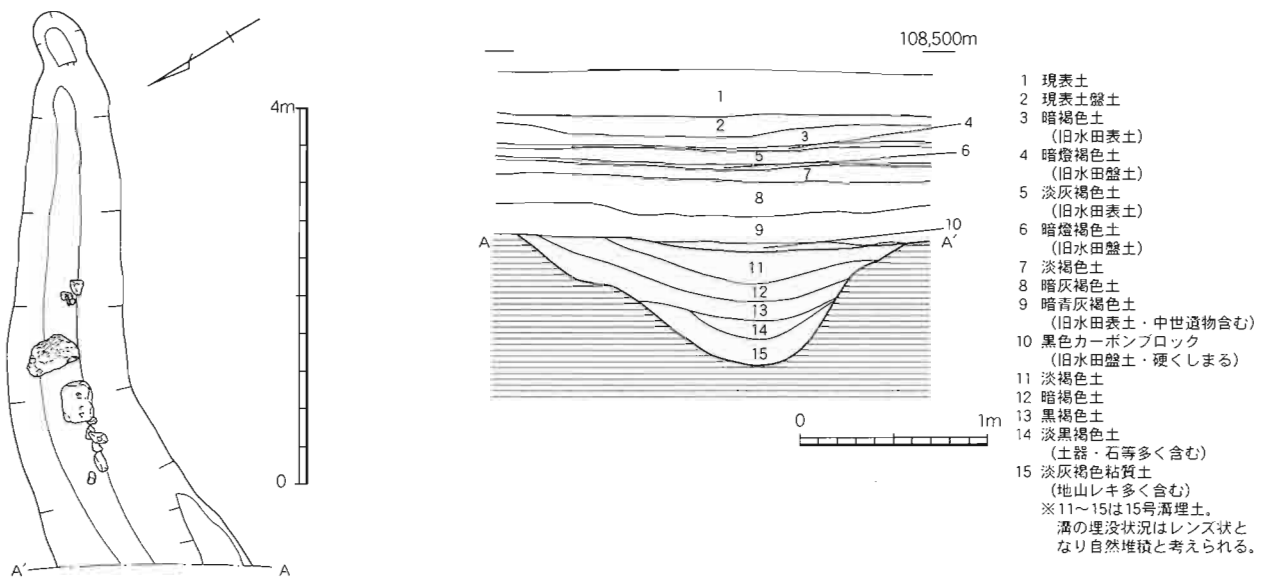
第58図 11・12号溝実測図 (1/100)



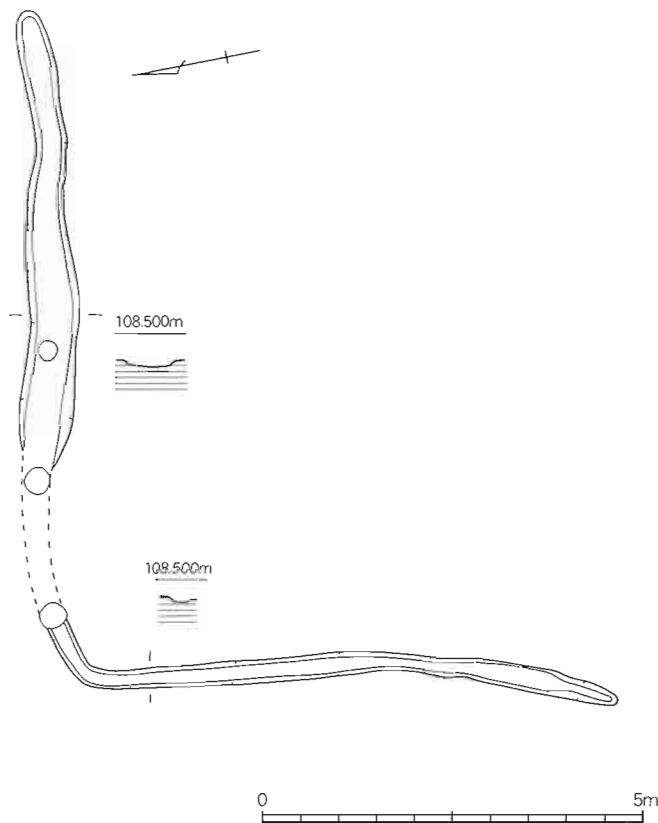
第59図 13・14号溝実測図 (1/100)・14号溝土層図 (1/20)



写真8 14号溝土層



第60図 15号溝実測図 (1/80)・土層図 (1/40)



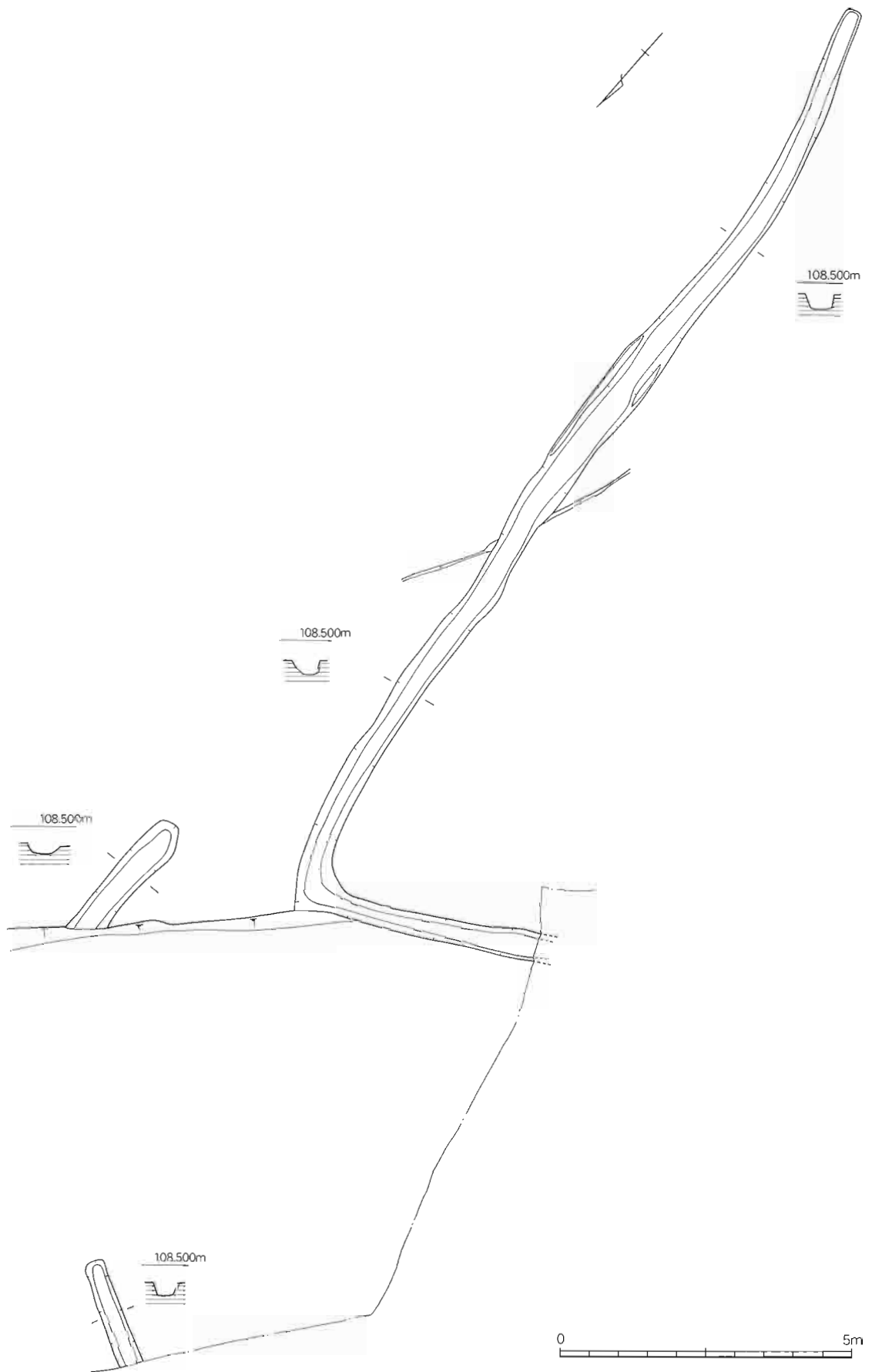
第61図 16号溝実測図 (1/100)



写真9 15号溝土層

19号溝 (第53・62図)

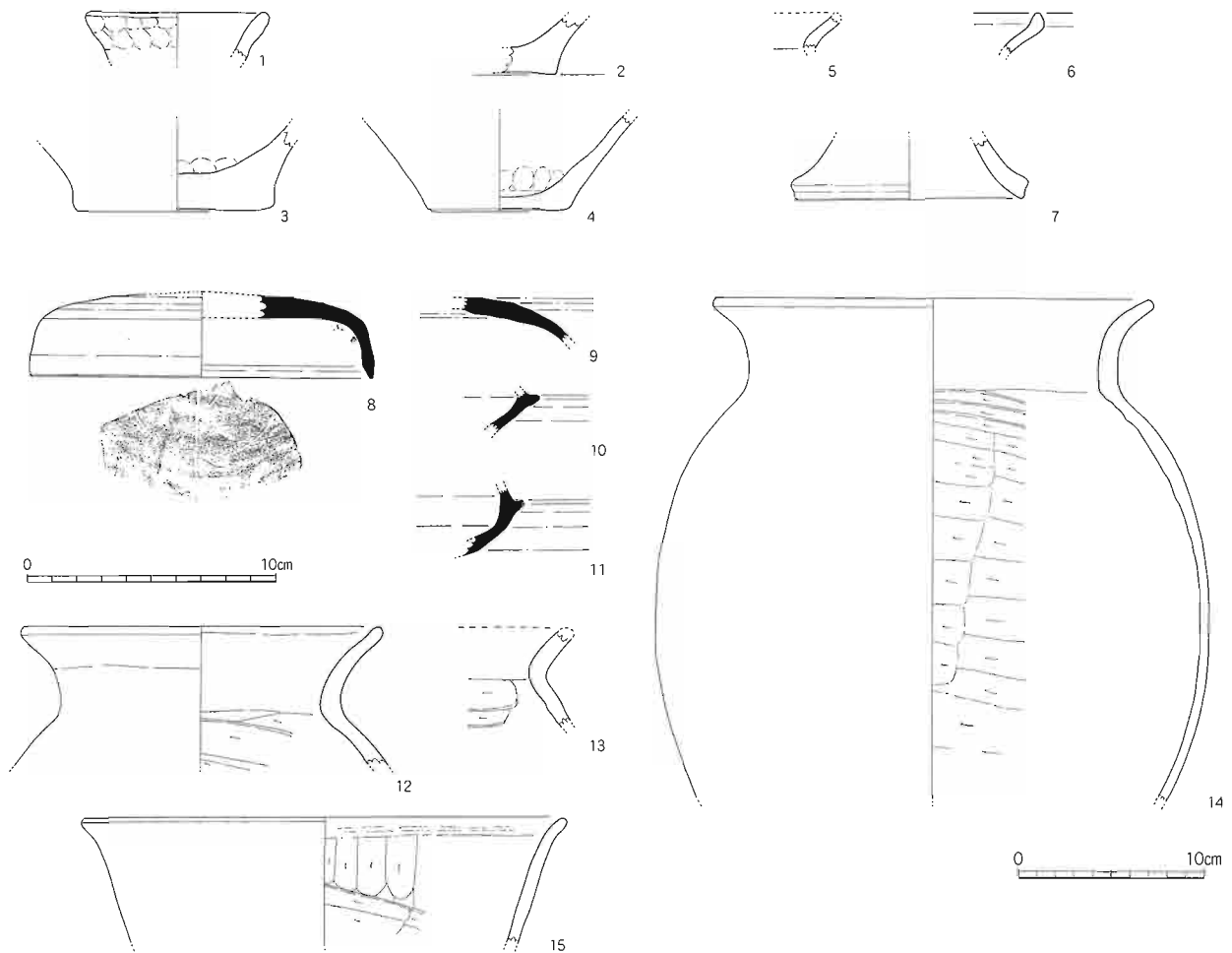
18号溝の北側に隣接して確認された溝で、南北方向に向かったのび、途中削平を受けるが再び調査区北端であられる。18号溝と同様の方向に屈曲している。溝の南側は途中で途切れ、西側は調査区外へと続く。高い位置での残存長は約2.4m、低い位置では区外まで約1.8mを測る。検出面での最大幅は約0.5mを測る。溝の断面は「U」字状を呈し、深さは約0.2mを測る。溝の中からの出土遺物はなかった。



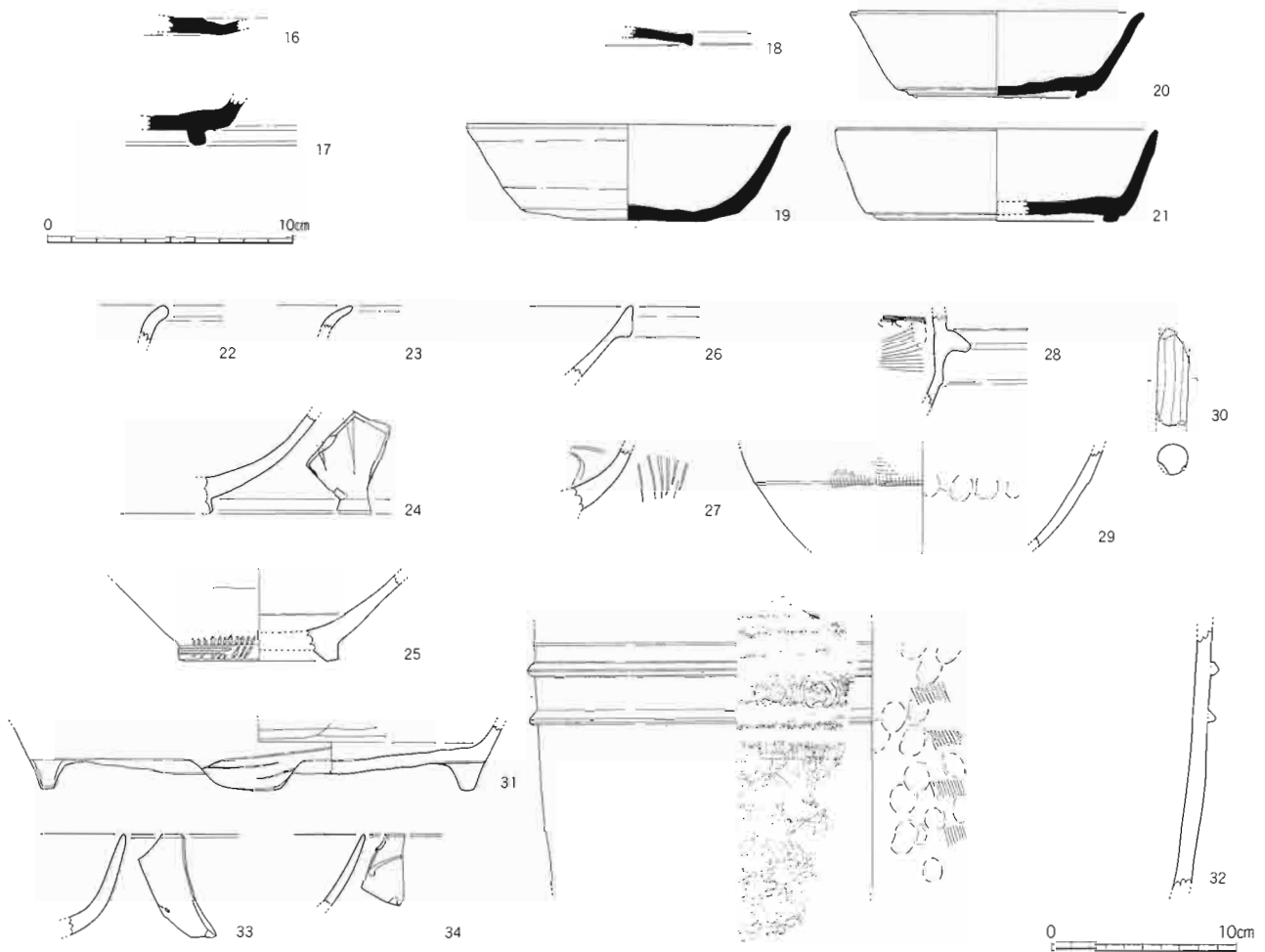
第 62 图 18·19号沟实测图 (1/100)

溝出土遺物（第63・64図）

1～4は2号溝出土。1は手捏土器である。外面指頭圧痕が顕著に残る。2～4は甕の底部である。いずれも底面は上底を呈する。5～7は3号溝出土。5・6は口縁部片で跳上状を呈する。7は器台の脚部である。9・10・15は1号溝出土。9は須恵器坏蓋である。外面回転ヘラ削りを施す。10は須恵器坏身である。浅い体部となる。15は甕である。口縁部はラッパ状に開く。内面は口縁部を横方向のハケ、頸部下はヘラ削り。8・11・14は13号溝出土。8は須恵器坏蓋である。端部はシャープに仕上げる。外面回転ヘラ削り。内面はヘラ記号が刻される。11は須恵器坏身である。深い体部で、外面回転ヘラ削りを施す。14は甕である。口縁部は一端直口方向に立ち上がり、そこから大きく外反する。胴部は大きく膨らむ。内面横方向のヘラ削りを施す。12・13は18号溝出土。12は甕である。口縁部は大きく「く」の字に外反し、端部付近はやや内湾する。内面頸部下半は横方向のヘラ削りを施す。13も甕である。内面横方向のヘラ削りを施す。16・17は12号溝出土。16は須恵器坏蓋である。平坦な天井部を呈する。17は高台付須恵器坏身である。底部から口縁部にかけてはやや開き気味に立ち上がる。底部やや内側に高台は付されている。18～21は15号溝出土。18は須恵器坏蓋である。端部は鳥嘴状を呈する。19は須恵器坏身である。19は底部から口縁部にかけて斜め方向に立ち上がり、端部はわずかに外反する。20は高台付須恵器坏身で、底部から口縁部に向かって斜め方向に立ち上がり、端部付近で外反する。21も高台付須恵器坏身で、口縁部は19・20に比べ



第63図 溝出土遺物実測図1 (1/3・1/4)



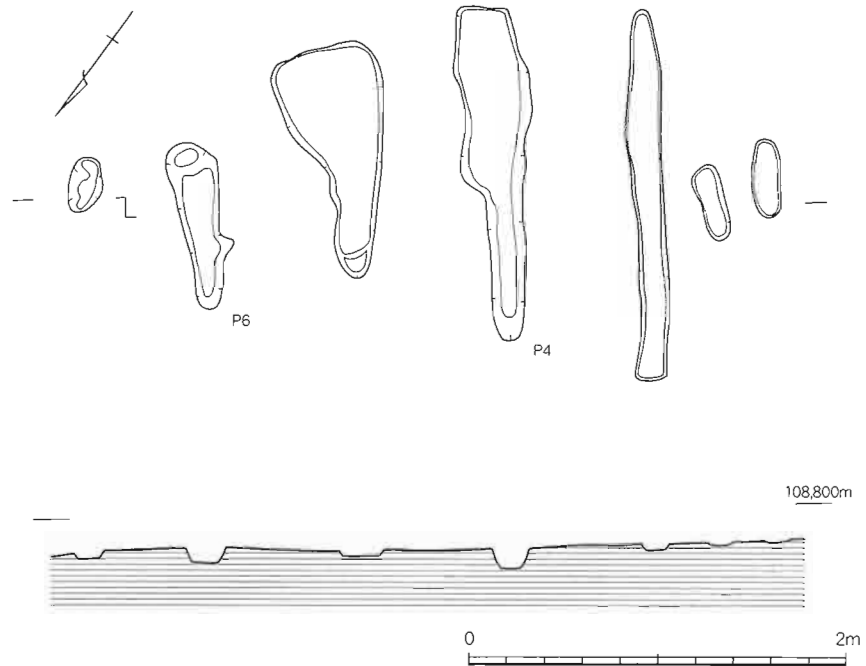
第64図 溝出土遺物実測図2 (1/3・1/4)

短く、直角に近い角度でほぼ直線的に立ち上がる。22・23は5号溝出土。22は青磁碗口縁端部片である。端部は丸く収める。色調は緑灰色を呈する。23は白磁碗口縁端部片である。端部を尖らせる。24・25はその5号溝側包含層(中世水田層)より出土。24は青磁碗底部である。外面細い鎬蓮弁文がみられる。色調は緑灰色を呈する。25は白磁碗底部である。外面高台部分には刻目を施し、内面底部付近は沈線を巡らす。26～30は14号溝出土。26は白磁碗口縁部である。端部を肥厚させる。27は鎬蓮弁文青磁碗である。内面花文がみられる。28・29は瓦質土器羽釜である。28は取手部分で内面ハケによる調整を施す。29は胴部下半で煤が付着している。30は不明土製品である。円柱状を呈し、両端を欠損する。外面は面取りがなされている。31は16号溝出土。瓦質土器火鉢底部である。三か所に脚部を付けるタイプで内面ヘラ削りを施す。32は17号溝出土。瓦質土器火鉢胴部である。外面断面蒲鋒状の貼付突帯が施され、その中にスタンプ文を刻む。内外面ハケによる調整を施す。

4. 畝状遺構

畝状遺構 (第65図)

調査区南側で確認され、大小合わせて7本が検出された。南側から順番にP1～7までとする。P1は、長さ約0.8m、幅約0.3mを測り、深さ約5cm。P2は、長さ約0.8m、幅約0.3mを測り、深さ約5cm。P3は、長さ約3.9m、幅約0.3mを測り、深さ約10cm。P4は、長さ約3.5m、幅約0.7mを測り、深さ約25cm。P5は、長さ約2.5m、幅約1.1mを測り、深さ約10cm。P6は、長さ約1.8m、幅約0.3mを測り、深さ約20cm。P7は、長さ約0.6m、幅約0.2mを測り、深さ約10cm。この遺構からはP3、P4、P6から土器の小片が出土した。

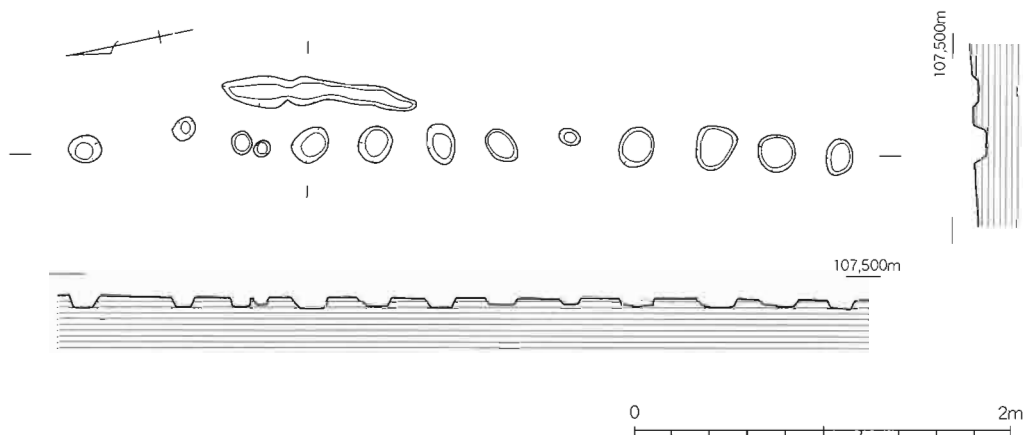


第65図 畝状遺構実測図 (1/80)

5. 柵列状遺構

柵列状遺構 (第66図)

調査区北側で中世の遺物包含層の下より確認され、浅いピット列が南北方向に計13個並んで検出された。検出面でのピットの幅は、約10～40cmとまちまちであるが、深さは約10～15cmと均等に揃えている。これらのピットの中からは土師器の小片が出土している。



第66図 柵列状遺構実測図 (1/80)

6. 墓

1) 甕棺墓

弥生時代の甕棺墓は、調査区内で計3基が確認された。いずれも小児用で、石蓋甕棺墓1基、合口甕棺墓2基の割合である。

1号甕棺墓（第67図）

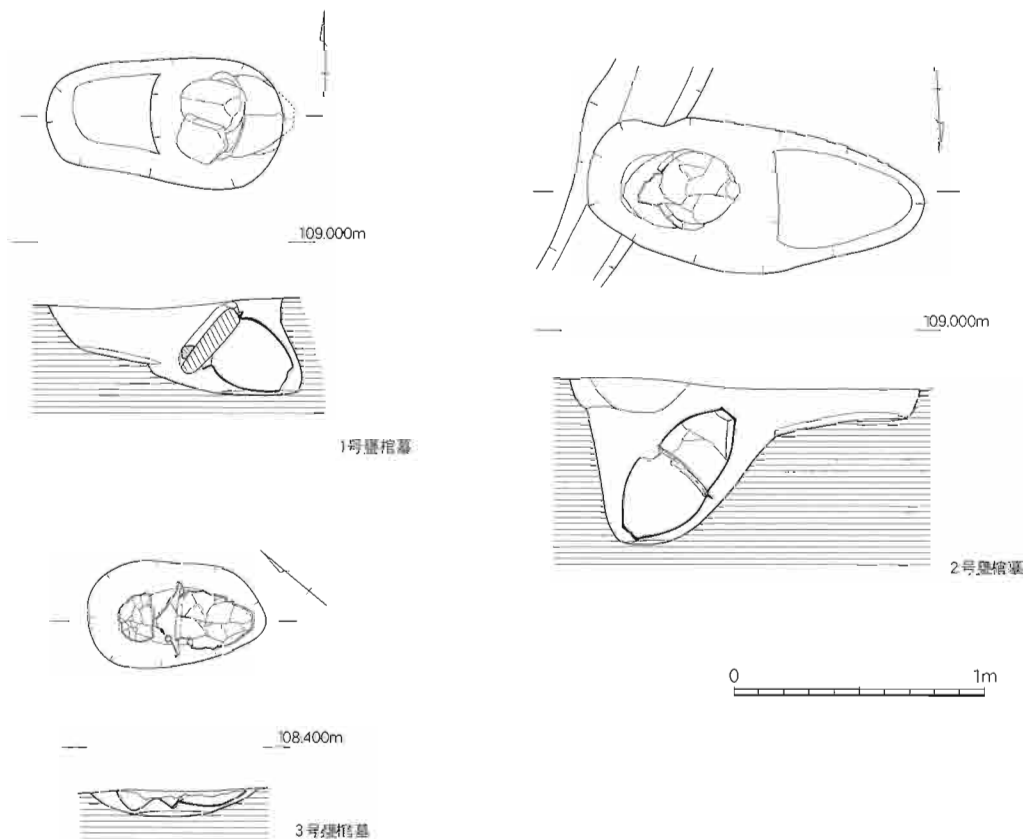
調査区の南側で確認され、主軸を東西方向にとる石蓋甕棺墓である。墓坑検出面での掘り方の規模は、長軸約95cm、短軸約50cmを測る。墓坑は2段掘りを呈し、そこから斜め方向に甕棺を挿入する。甕棺の上蓋は2枚の安山岩の河原石を使用し、底部は打ち欠いている。甕棺の埋置角度は約35°を測る。

1号甕棺（第68図）

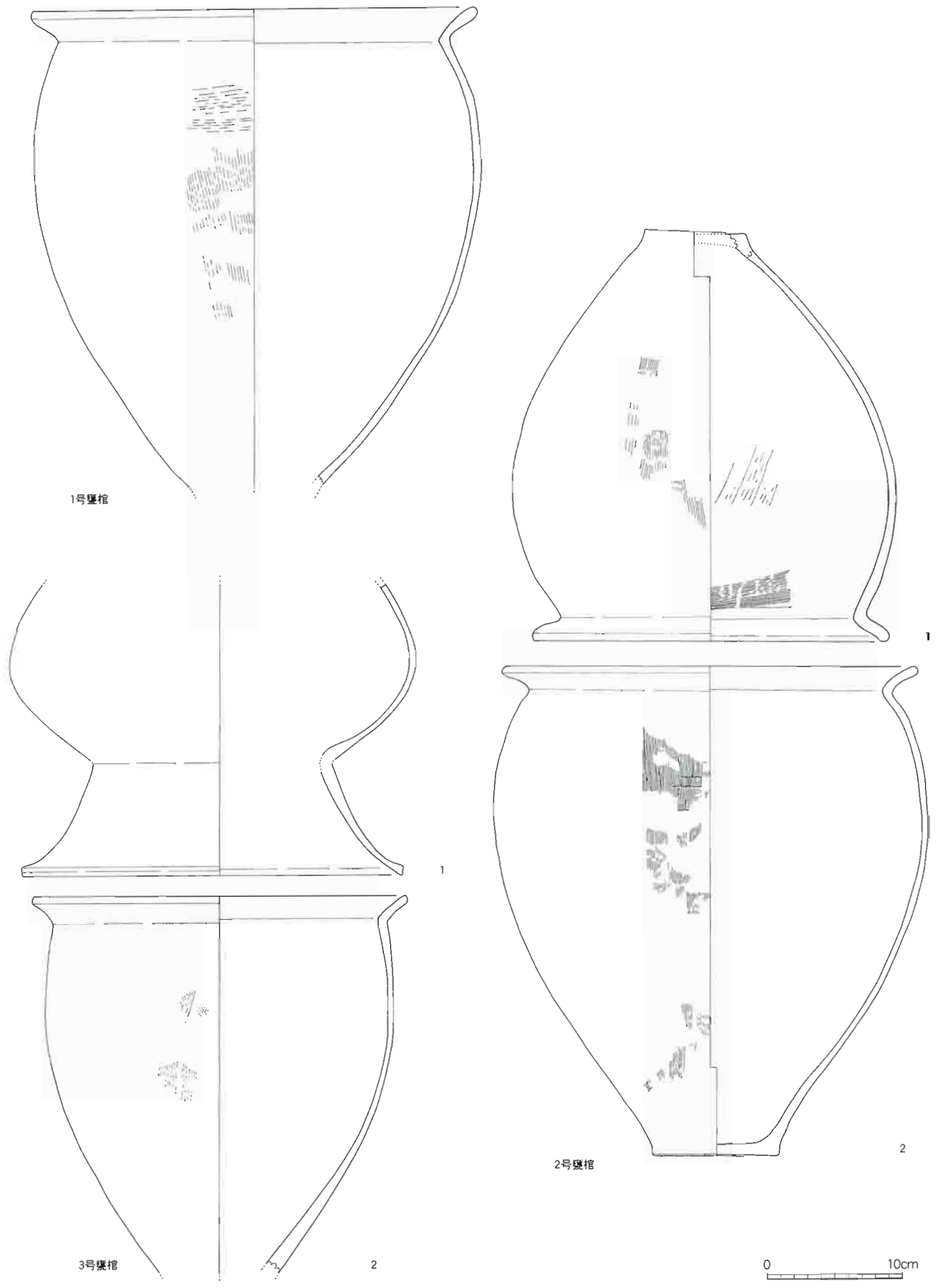
1は下甕である。口縁部は「く」の字状に外反し、端部付近は肥厚する。頸部から胴部にかけてやや膨らみ、底部付近はすぼまる。胴部外面上半は横ハケ、下半は縦ハケによる調整を施す。

2号甕棺墓（第68図）

1号甕棺墓のすぐ北側で確認され、2号溝を切る。主軸を東西方向にとる合口甕棺墓である。墓坑検出面での掘り方の規模は、長軸約135cm、短軸約60cmを測る。墓坑は2段掘りを呈し、そこから斜め方向に甕棺を挿入する。甕の合口部分には薄い白色粘土を用いた目張りが施していた。甕棺の埋置角度は約52°を測る。



第67図 甕棺墓実測図 (1/30)



第 68 图 甕棺実測図 (1/40)

2号甕棺 (第68図)

1は上甕である。口縁部は「く」の字状に外反し、端部付近をやや摘み上げる。頸部から胴部にかけては大きく膨らみ、底部付近はすぼまる。底面はわずかに上底となる。胴部外面上半は横ハケ、下半は縦ハケ、内面は縦ハケによる調整を施す。2は下甕である。口縁部は「く」の字状に外反し、頸部から胴部にかけては大きく膨らみ、底部付近はすぼまる。底部の厚さは薄く、底面はわずかに上底となる。胴部外面は縦ハケ、内面ナデによる調整を施す。

3号甕棺墓 (第67図)

調査区中央より南西側で確認され、主軸を北西方向にとる合口甕棺墓である。墓坑検出面での掘り方の規模は、長軸約70cm、短軸約40cmを測る。墓坑はほとんど上面を削平され、甕棺下部がわずかに残っていた。甕棺の埋置角度はほぼ水平である。

3号甕棺 (第68図)

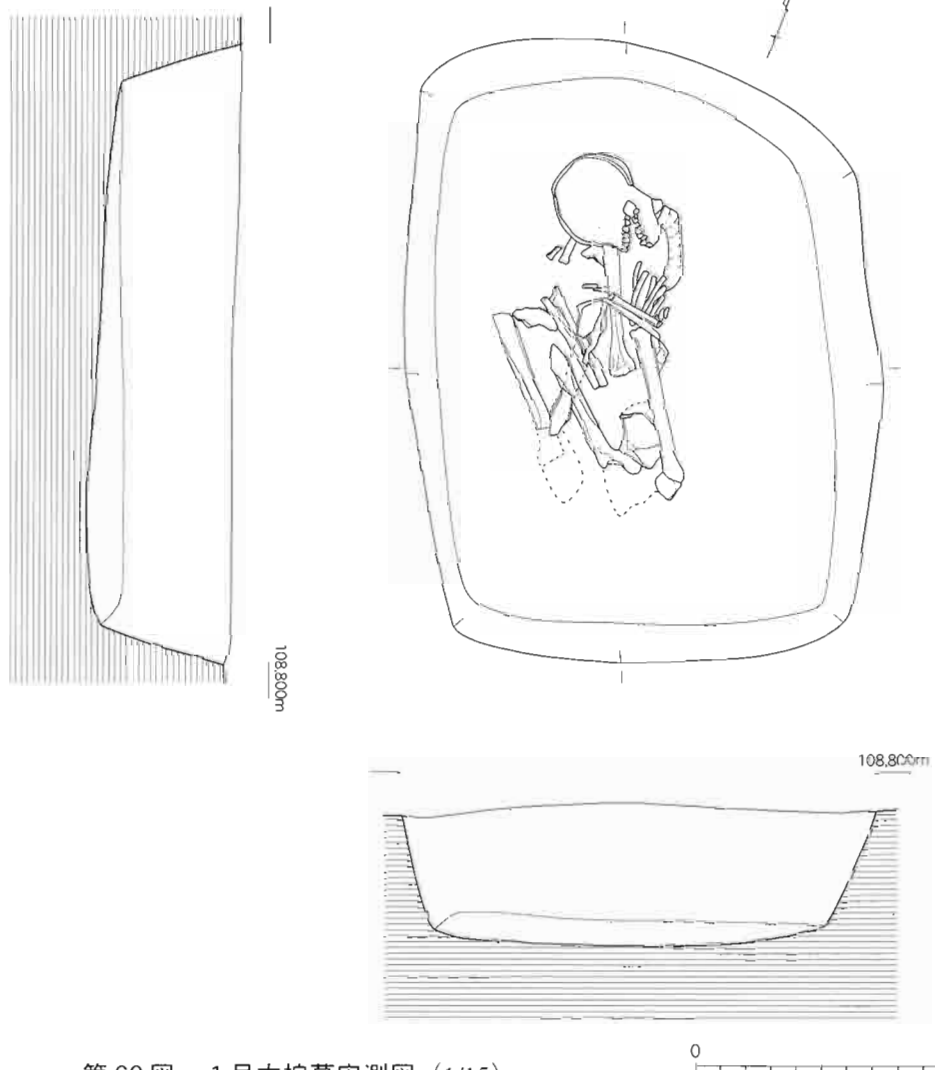
1は上甕で、壺を使用している。口縁部は「ラッパ」状に外反し、端部付近をやや摘み上げる。頸部から胴部にかけては大きく膨らむ。底部は欠損する。内外面ナデ調整。2は下甕である。口縁部は「く」の字状に外反し、頸部から胴部にかけてはあまり膨らまずにすぼまりながらそのまま底部へのびる。底部は欠損する。胴部外面は縦ハケ、内面ナデによる調整を施す。

2) 木棺墓

中世の木棺墓は、調査区北側の14号溝と16号溝の間で2基が確認された。中からは人骨がそれぞれ検出されたが、水田下であるため保存状態は悪かった。

1号木棺墓 (第69図)

主軸を南北方向にとり、墓坑の検出面でのプランは北側を少し丸く膨らませた隅丸長方形を呈する。墓坑の規模は、長軸約120cm、短軸約95cm、深さ約30cmを測る。底面はほぼ平坦に揃え、墓底の平面プランは検出面と同じである。



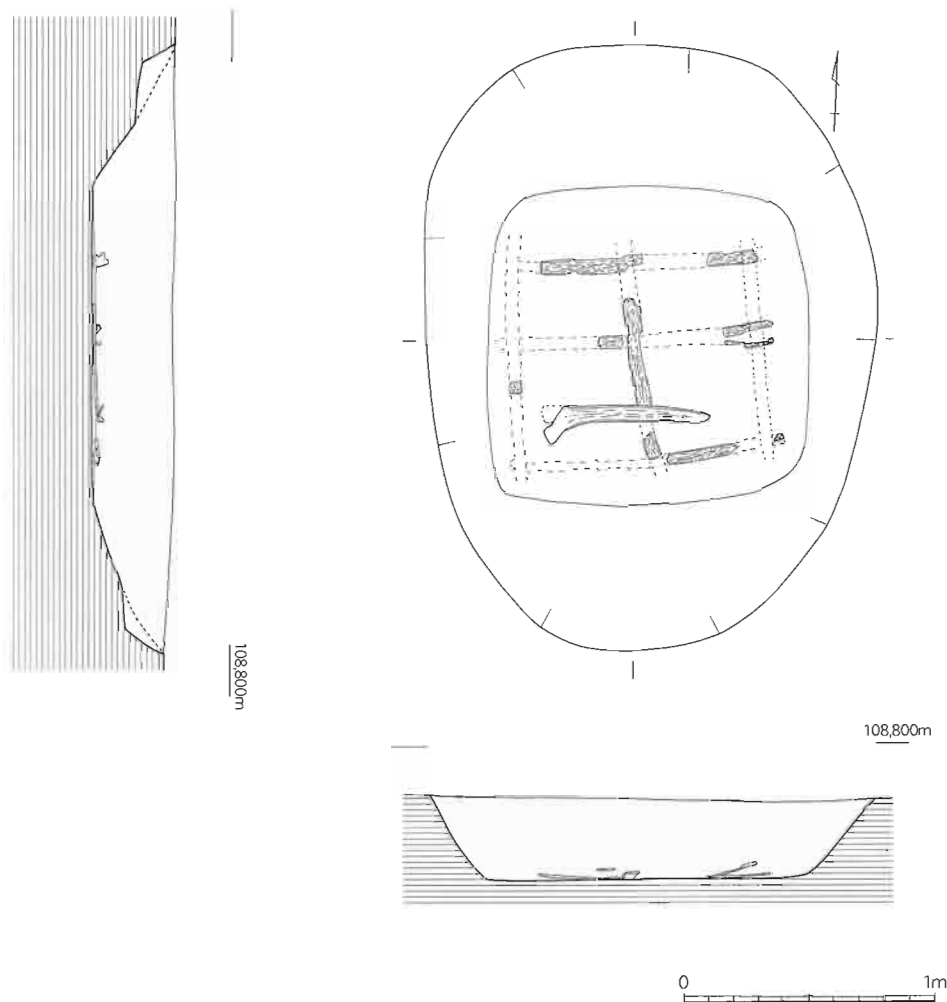
第69図 1号木棺墓実測図 (1/15)

この墓坑の中からは、北を頭位方向とした人骨が1体分出土した。出土状況から足を折り曲げて寝かせた状況がうかがえた。また中からは図示できなかったが、1点土師質土器の小片が出土している。

2号木棺墓（第70図）

主軸を南北方向にとり、墓坑の検出面でのプランは楕円形を呈する。墓坑の規模は、長軸約120cm、短軸約90cm、深さ約15cmを測る。底面はほぼ平坦に揃え、墓底の平面プランはほぼ正方形を呈する。

この墓坑の中からは、腐食により輪郭だけが確認された大腿骨の一部とみられる人骨が出土し、その下の床面上からは幅約4cm程度の薄い木棺組板が検出された。この組板は縦横3列ずつ並んでおり、東西方向の板が南北方向の板の上に乗っている様子がうかがわれた。これから木棺の規模を推測すると約50cm方形の箱型棺となろう。



第70図 2号木棺墓実測図（1/15）

7. 土坑

調査区内では計30基の土坑が確認された。このうちの大部分は出土遺物がなく時期のわかる遺構は少なかった。また、形態もまちまちであり、この中には風倒木痕跡と推測されるようなものや用途として明確な落穴状遺構も含まれている。説明では落穴状遺構とその他を分けて行うことにする。

1) 落穴状遺構

4号土坑 (第71・72図)

調査区南側で確認された。5号土坑を切る。検出面での規模は、長軸約190cm、短軸約55cmを測る隅丸長方形プランを呈し、底面までの深さは約35cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。底面の主軸線上には3個のピットが検出された。このピットの大きさは平均で約15cm、深さは最も深いもので約30cmを測る。この遺構からの出土遺物はなかった。

5号土坑 (第71・72図)

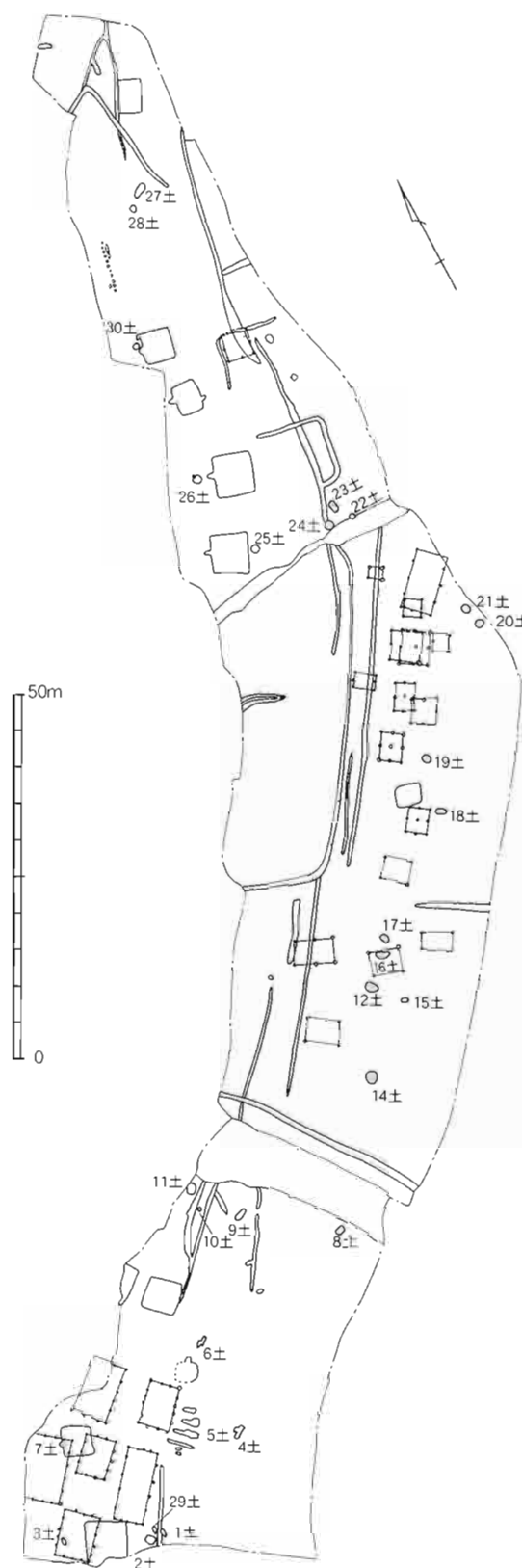
4号土坑と同じ位置で確認された。4号土坑に切られる。検出面での規模は、長軸約70cm、短軸約60cmを測る隅丸長方形プランを呈し、底面までの深さは約45cmを測る。壁面はやや斜め方向に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。底面の中央には1個のピットが検出された。このピットの大きさは約20cm、深さは最も深いもので約15cmを測る。この遺構からの出土遺物はなかった。

8号土坑 (第71・72図)

調査区南東側で確認された。検出面での規模は、長軸約110cm、短軸約50cmを測る隅丸長方形プランを呈し、底面までの深さは約50cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。底面の中央主軸線上には2個のピットが検出された。ピットの大きさは約20cm、深さは約20cmを測る。この遺構からの出土遺物はなかった。

15号土坑 (第71・72図)

調査区南東側で確認された。検出面での規模

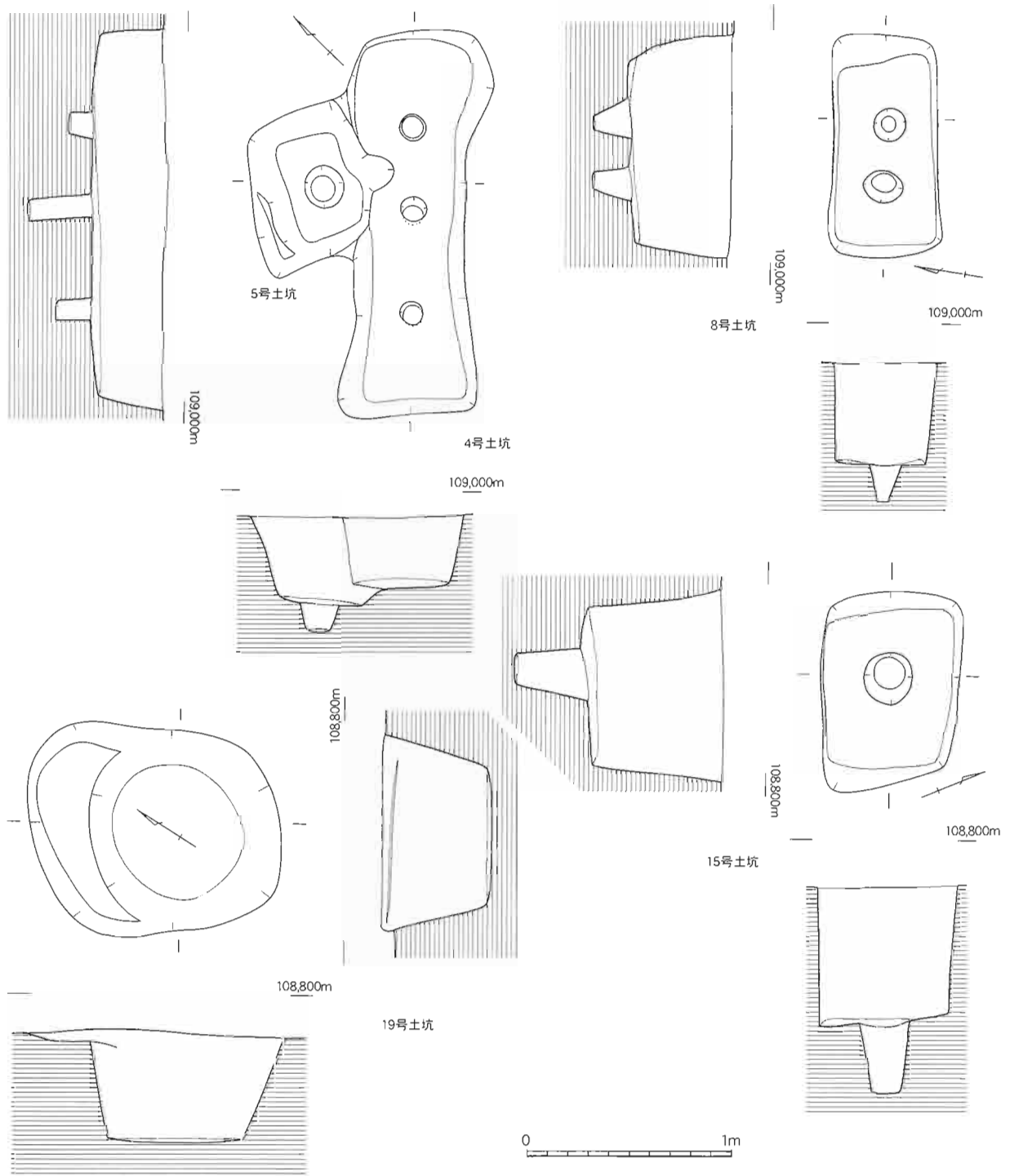


第71図 調査区内土坑配置図 (1/1000)

は、長軸約100cm、短軸約70cmを測る隅丸長方形プランを呈し、底面までの深さは約70cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。底面の中央にはピットが検出された。ピットの大きさは約25cm、深さは約35cmを測る。この遺構からの出土遺物はなかった。

19号土坑（第71・72図）

調査区ほぼ中央で確認された。検出面での規模は、長軸約125cm、短軸約100cmを測る楕円形プランを呈し、底面までの深さは約60cmを測る。壁面はやや斜め方向に立ち上がり、北側で段がつく。底面はほぼ平坦である。底面にはピットは検出されなかった。この遺構の中からは縄文土器片が1点出土した。



第72図 落穴状遺構実測図 (1/30)

2) その他の土坑

1号土坑 (第71・73図)

調査区の南端で確認された。検出面での規模は、長軸約120cm、短軸約60cmを測る隅丸長方形プランを呈し、底面までの深さは約10cmと浅い。壁面は斜め方向に立ち上がり、底面はやや緩やかな傾斜がつく。底面には浅いピットが掘り込まれていた。この遺構の中からは弥生土器片が1点出土した。

2号土坑 (第71・73図)

1号土坑のすぐ西側で確認された。検出面での規模は、長軸約140cm、短軸約100cmを測る不定形プランを呈する。遺構西側で一端段を有し、東側にさらに落ちる。底面は平坦で、中に浅いピットが掘り込まれている。底面までの深さは約20cmを測る。この遺構の中からの出土遺物はなかった。

3号土坑 (第71・73図)

調査区の南西端で確認された。検出面での規模は、長軸約105cm、短軸約60cmを測る隅丸長方形プランを呈する。底面は、中央部分が窪んでいる。底面までの深さは約15cmと浅い。この遺構の中からの出土遺物はなかった。

6号土坑 (第71・73図)

調査区の南側で確認された。検出面での規模は、長軸約135cm、短軸約55cmを測る楕円形プランを呈する。遺構東側で一端段を有し、地山面から奥に掘り窪めるようにそこから斜めに傾斜する。底面までの深さは約70cmを測る。この底面までの間には赤褐色に焼成を受けたブロックが多く混入し、壁面自体も一部赤く焼けていた。この遺構の中からは弥生土器片が数点出土した。

7号土坑 (第71・73図)

調査区の南西側で確認され、2号竪穴住居跡を切る。検出面での規模は、長軸約125cm、短軸約50cmを測る楕円形プランを呈する。遺構の長軸方向両側で一端段を有し、そこから斜め方向に傾斜し、底面につづく。底面はほぼ平坦である。底面までの深さは約30cmを測る。この遺構の中からは、床面上からほぼ完形の土師器の甕が出土した。

9号土坑 (第71・73図)

調査区の南側で確認された。検出面での規模は、長軸約190cm、短軸約70cmを測る隅丸長方形プランを呈する。東側で一端段を有し、西側へ落ちる。底面はほぼ平坦である。底面までの深さは約30cmを測る。この遺構の中からの出土遺物はなかった。

10号土坑 (第71・73図)

調査区の南西側で確認された。検出面での規模は、長軸約65cm、短軸約60cmを測るほぼ円形プランを呈する。南側で段を有する。壁面は斜め方向に立ち上がる。底面はやや南へ向かって傾斜する。検出面から約5cm下で赤褐色の焼成面がみられた。床面までの深さは約20cmを測る。この遺構の中からの出土遺物はなかった。

11号土坑 (第71・73図)

調査区の南西側で確認された。検出面での規模は、長軸約130cm、短軸約120cmを測る不定形プランを呈する。底面はレンズ状を呈し、壁面はゆるやかに立ち上がる。遺構の西側には中世の遺物包含層となる段落ちが続いている。床面までの深さは約20cmを測る。この遺構の中からの出土遺物はなかった。

12号土坑（第71・74図）

調査区のほぼ中央付近で確認された。検出面での規模は、長軸約140cm、短軸約75cmを測る不定形プランを呈する。南北長軸方向に段を有し、底面はややレンズ状を呈する。壁面は斜め方向に立ち上がる。床面までの深さは約50cmを測る。この遺構の中からは弥生土器底部が出土している。

13号土坑（第71・74図）

調査区のほぼ中央付近で確認された。検出面での規模は、長軸約110cm、短軸約100cmを測る不定形プランを呈する。北側に段を有し、底面はややレンズ状を呈する。反対側の壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面までの深さは約40cmを測る。この遺構の中からの出土遺物はなかった。

14号土坑（第71・74図）

調査区のほぼ中央付近で確認された。検出面での規模は、長軸約185cm、短軸約135cmを測る楕円形プランを呈する。底面に向かっていくつもの段落ちがみられる。床面までの深さは約50cmを測る。この遺構の中からの出土遺物はなかった。

16号土坑（第71・74図）

調査区のほぼ中央付近で確認された。検出面での規模は、長軸約205cm、短軸約95cmを測る不定形プランを呈する。底面は比較的平坦で、西に向かってわずかに傾斜する。床面までの深さは約25cmを測る。この遺構の中からの出土遺物はなかった。

17号土坑（第71・74図）

調査区のほぼ中央付近で確認された。検出面での規模は、長軸約120cm、短軸約70cmを測る不定形プランを呈する。南側に平坦な段を有し、北側向かって傾斜する。床面までの深さは約35cmを測る。この遺構の中からの出土遺物はなかった。

18号土坑（第71・74図）

調査区のほぼ中央付近で確認された。検出面での規模は、長軸約155cm、短軸約90cmを測る楕円形プランを呈する。東西の長軸方向両側に段を有し、中央の床面に向かって緩やかに傾斜する。床面までの深さは約20cmを測る。この遺構の中からの出土遺物はなかった。

20号土坑（第71・75図）

調査区の東側で確認された。検出面での規模は、長軸約130cm、短軸約115cmを測るほぼ円形プランを呈する。床面はほぼ平坦で、床面中央に浅いピットが掘り込まれる。床面までの深さは約15cmを測る。この遺構の中からの出土遺物はなかった。

21号土坑（第71・75図）

20号土坑に隣接して確認された。検出面での規模は、長軸約115cm、短軸約90cmを測る楕円形プランを呈する。床面はほぼ平坦で、北側に向かってわずかに傾斜する。床面までの深さは約20cmを測る。この遺構の中からの出土遺物はなかった。

22号土坑（第71・75図）

調査区北側で確認され、南側を現代の溝に切られる。検出面での規模は、長軸約95cm、短軸約70cmを測る楕円形プランを呈する。床面はややレンズ状となっている。床面までの深さは約15cmを測る。この遺構の中からは青磁碗片が1点出土した。

23号土坑（第71・75図）

22号土坑西側に隣接して確認された。検出面での規模は、長軸約170cm、短軸約100cmを測る長方

形プランを呈する。床面はややレンズ状を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面中央よりやや東にピットが掘り込まれている。床面までの深さは約40cmを測る。この遺構の中からは1点白磁皿底部片が出土した。

24号土坑（第71・75図）

23号土坑西側に隣接して確認された。検出面での規模は、長軸約135cm、短軸約130cmを測るほぼ円形プランを呈する。床面は直径約50cmの円形でややレンズ状を呈し、壁面は斜め方向に立ち上がる。遺構の断面をみると楯鉢状を呈する。床面までの深さは約75cmを測る。この遺構の床面近くからは凝灰岩を加工した石塔の一部が出土した。

25号土坑（第71・75図）

7号竪穴住居跡のすぐ東側で確認された。検出面での規模は、長軸約105cm、短軸約95cmを測るほぼ円形プランを呈する。床面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。床面までの深さは約10cmを測る。この遺構の中からは1点瓦質土器片が出土した。

26号土坑（第71・76図）

8号竪穴住居跡のすぐ西側で確認された。検出面での規模は、長軸約120cm、短軸約115cmを測るほぼ円形プランを呈する。床面はほぼ平坦で、壁面は斜め方向に立ち上がる。床面までの深さは約10cmを測る。この遺構の中からの出土遺物はなかった。

27号土坑（第71・76図）

調査区北側で確認された。検出面での規模は、長軸約215cm、短軸約100cmを測る不定形プランを呈する。床面はほぼ平坦で、壁面は斜め方向に立ち上がる。床面までの深さは約20cmを測る。この遺構の中からは高台付須恵器坏身の小片が出土した。

28号土坑（第71・76図）

27号土坑の西側に隣接して確認された。検出面での規模は、長軸約105cm、短軸約90cmを測るほぼ円形プランを呈する。床面はほぼ平坦で、壁面は斜め方向に立ち上がる。床面までの深さは約20cmを測る。この遺構の中からの出土遺物はなかった。

29号土坑（第71・76図）

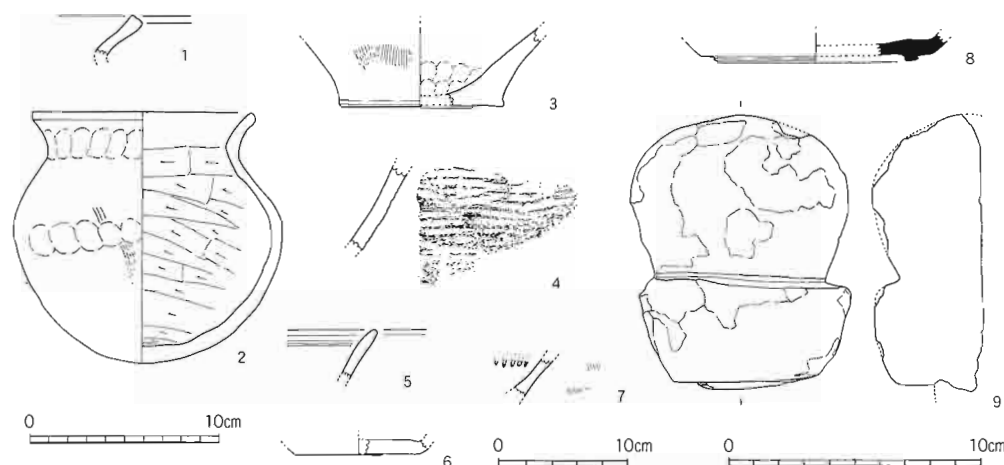
1号土坑の北側に隣接して確認された。検出面での規模は、長軸約160cm、短軸約90cmを測るほぼ隅丸長方形プランを呈する。床面はレンズ状となり、壁面は斜め方向に立ち上がる。床面までの深さは約50cmを測る。この遺構の中からの出土遺物はなかった。

30号土坑（第71・76図）

10号竪穴住居跡の西側で土坑の西側で確認された。検出面での規模は、長軸約115cm、短軸約105cmを測るほぼ円形プランを呈する。床面はほぼ平坦で、壁面は斜め方向に立ち上がる。床面までの深さは約25cmを測る。この遺構の中からの出土遺物はなかった。

土坑出土遺物（第77図）

1は1号土坑出土。弥生土器甕口縁部片である。端部は跳ね上げ状口縁を呈する。2は7号土坑出土。土師器小型甕である。口縁部は「く」の字状に外反し、頸部から胴部にかけて大きく膨らむ。外面ハケ、内面ヘラ削りが施される。3は12号土坑出土。弥生土器底部片である。底面やや上底状を呈する。外面ハケ調整。4は19号土坑出土。縄文時代の条痕文土器片である。5は22号土坑出土。青磁碗口縁部片である。内面沈線を浮き彫りしている。6は23号土坑出土。白磁皿底部片である。底面全体まで釉がかりがみられる。7は25号土坑出土。瓦質土器播鉢である。内面5本の播り目がみられる。8は27号土坑出土。須恵器坏身底部片である。底面には高台を付す。9は24号土坑出土。五輪塔宝珠部分の破片である。凝灰岩を加工している。残存長10.9cmである。



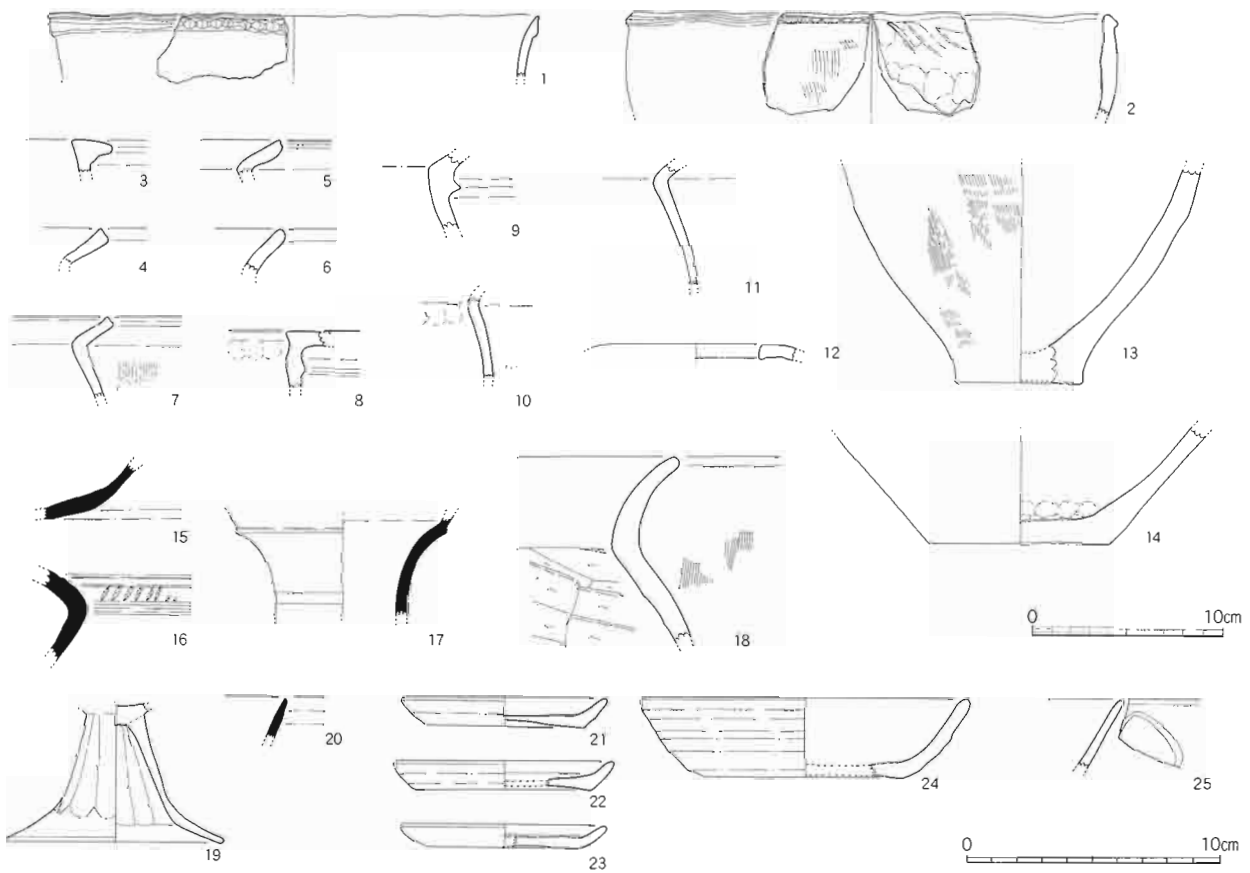
第77図 土坑出土遺物実測図（1/3・1/4・1/6）

8. その他の遺構出土遺物（第78・79図）

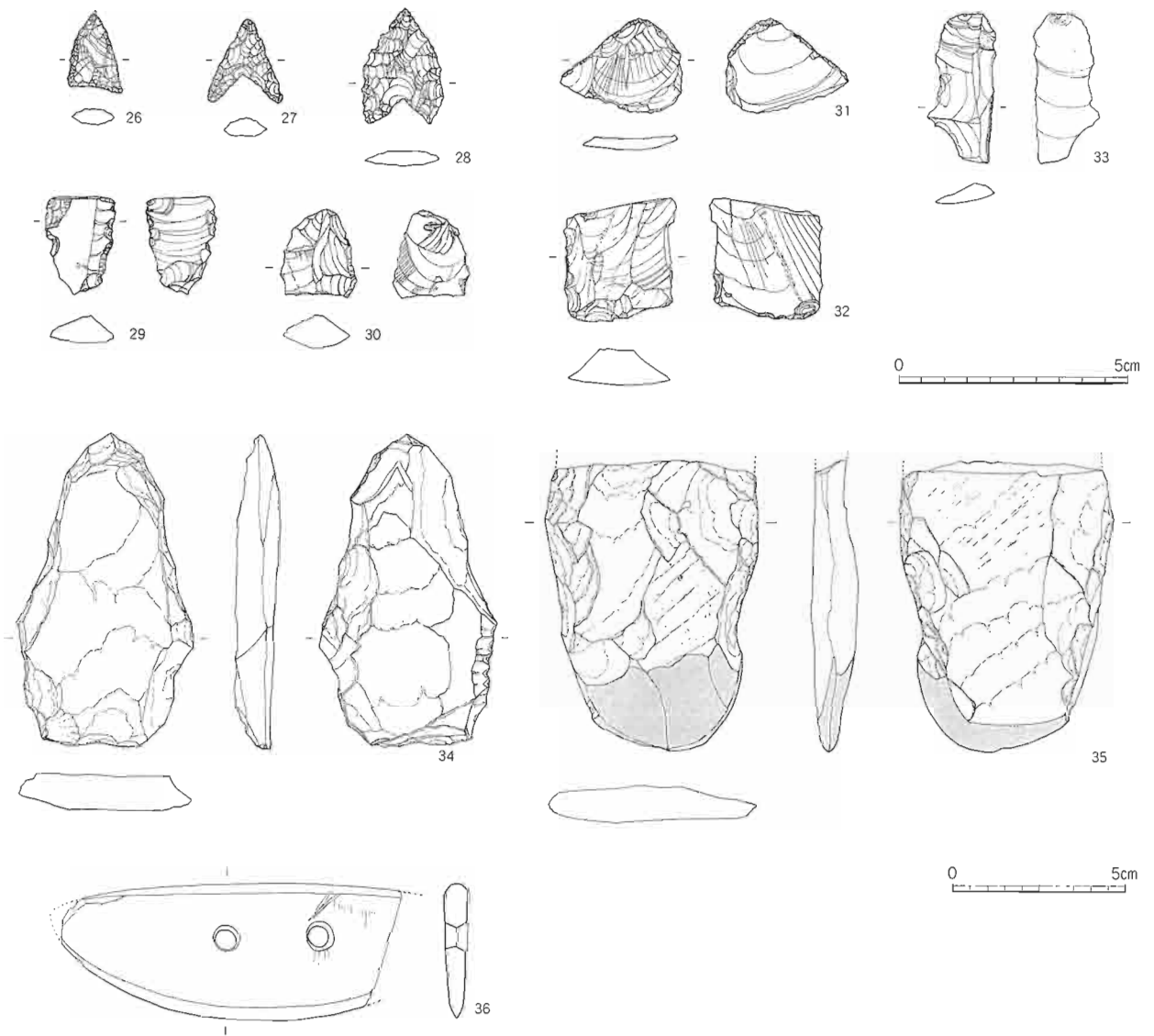
1は包含層出土。甕口縁部片である。口縁端部よりやや下に刻目突帯を巡らす。口縁部は緩やかに開く。2も包含層出土。甕口縁部片である。口縁端部よりやや下に刻目突帯を巡らす。2次焼成を顕著に受ける。外面ハケ調整、内面指頭圧痕が目立つ。3はP 8より出土。甕口縁部片である。亀ノ甲タイプの口縁を呈する。4はP 9より出土。甕口縁部片である。跳ね上げ状口縁を呈する。5はP 10より出土。甕口縁部片である。跳ね上げ状口縁を呈する。6はP 11より出土。甕口縁部片である。跳ね上げ状口縁を呈する。7はP 12より出土。甕口縁部片である。口縁部は「く」の字状に外反し、跳ね上げ状口縁を呈する。外面ハケ調整。8はP 13より出土。甕口縁部片である。須玖式口縁を呈し、口縁部下に1条の突帯を巡らす。外面赤色顔料が塗布される。9はP 14より出土。甕頸部片である。口縁部は「く」の字に外反し、頸部付近に断面三角突帯を巡らす。10はP 15より出土。甕頸部片である。頸部内面に指頭圧痕が顕著に残る。11はP 16より出土。甕頸部片である。口縁部は「く」の字に外反する。胴部はやや膨らむ。

12はP 17より出土。無頸壺の可能性もある。外面には赤色顔料が塗布される。13はP 12より出土。甕底部である。底部は厚く、やや上底となる。外面ハケ調整。14はP 12より出土。壺底部である。

底面はほぼ平坦で底端部から胴部にかけては大きく広がる。15はP 18より出土。須恵器坏身片である。底部は回転ヘラ削りが施される。16はP 18より出土。瓦泉胴部である。外面には刻目が巡っている。17はP 19より出土。須恵器瓦泉である。口縁部は稜を持ち外に大きく開く。18はP 18より出土。甕である。口縁部は「く」の字状に大きく外反し、外面ハケ、内面ヘラ削りが施される。19は1号住居跡上包含層内より出土。高坏脚部である。内外面ヘラ削りによる調整が施される。20はP 19より出土。須恵器坏身口縁端部片である。先端部は細く尖らせている。21～24はP 20より出土。21は土師質土器小皿である。底面は上底で、糸切り離しである。口縁部は短い。22・23も21と同様である。24は土師質土器坏である。底面は上底で、外面は横方向のナデによる稜線が残る。底端部から口縁部にかけてはやや内湾気味に立ち上がる。底面は糸切り離しである。25は包含層より出土。外面単弁鑄蓮弁文を浮き彫りする。色調は淡緑黄灰色を呈する。26から36は調査区内の包含層等から流れ込みで出土した石器である。26～28は石鏃である。先端部を欠損し、翼部はあまりのびない。全長約1.8cm、最大幅約1.1cm、厚さ約0.3cmを測る。石材は黒耀石である。27は翼部が発達し長くのびる。全長約1.8cm、最大幅約1.7cm、厚さ約0.4cmを測る。石材は黒耀石である。28は翼部が発達し長くのびる。全長約2.6cm、最大幅約1.7cm、厚さ約0.3cmを測る。石材は黒耀石である。29～33は2



第78図 その他の遺構出土遺物実測図1 (1/3・1/4)



第79図 その他の遺構出土遺物実測図2 (2/3・1/2)

次加工剥片である。全長約2.1cm、最大幅約1.5cm、厚さ約0.6cmを測る。石材は黒耀石である。30は、全長約1.8cm、最大幅約1.6cm、厚さ約0.7cmを測る。石材は黒耀石である。31は全長約2.0cm、最大幅約2.6cm、厚さ約0.2cmを測る。石材は姫島産黒耀石である。32は全長約2.4cm、最大幅約2.3cm、厚さ約0.8cmを測る。石材は黒耀石である。33は全長約3.3cm、最大幅約1.4cm、厚さ約0.3cmを測る。石材は黒耀石である。34は打製石斧である。全長8.8cm、最大幅約5.0cm、厚さ約0.8cmを測る。石材は安山岩である。35は局部磨製石斧で下半を欠損する。残存長約8.2cm、最大幅約6.0cm、厚さ約0.9cmを測る。石材は安山岩である。36は石庖丁である。残存長約7.8cm、最大幅約4.0cm、最大厚約0.6cmを測る。石材は輝緑凝灰岩である。

第1表 遺跡出土土器観察表(1)

挿図 番号	遺物 番号	遺構名	種 別	器種	法量()は復元径(cm)			胎土 (有灰/A・長石/B・陶片/C・金雲母/D・ 赤色土/E・白灰土/F・磁石/G)	色調	備考
					器高	口径	底径			
第7図	1	1号住居跡	弥生土器	壺		(10.0)		A・B・C	淡黄褐色	
第7図	2	1号住居跡	弥生土器	壺		(8.4)		A・B・C	淡黄褐色	
第7図	3	1号住居跡	弥生土器	壺			(7.6)	A・B・C	淡黄褐色	
第7図	4	1号住居跡	弥生土器	壺			(9.6)	A・B・C・E	淡灰褐色	
第7図	5	1号住居跡	弥生土器	壺			(12.2)	A・B・C・E	淡灰褐色	
第10図	1	2号住居跡	須恵器	坏蓋	3.7	14.4		A・C・F	暗灰色	
第10図	2	2号住居跡	須恵器	坏蓋	4.0	(14.8)		A	淡灰色	
第10図	3	2号住居跡	須恵器	坏身	3.4	12.6		A	青灰色	
第10図	4	2号住居跡	須恵器	坏身				A	淡灰色	
第10図	5	2号住居跡	土師器	甕		21.4		A・B・C・E	黄褐色	
第10図	6	2号住居跡	土師器	甕		(21.8)		A・B・C・E	淡茶褐色	
第10図	7	2号住居跡	土師器	甕		(17.8)		A・B・C・E	淡褐色	
第10図	8	2号住居跡	土師器	甕		28.0		A・B・C	淡灰色	
第12図	1	3号住居跡	土師器	甕				A・B・C・F	淡褐色	
第15図	1	4号住居跡	須恵器	坏蓋	4.7	(12.2)		A	淡青灰色	
第15図	2	4号住居跡	土師器	甕		(19.4)		A・B・C・E	淡茶褐色	
第17図	1	5号住居跡	須恵器	坏身	4.5	(12.7)		A	暗灰色	
第19図	1	6号住居跡	弥生土器	甕		(27.8)		A・B・C・E	淡褐色	
第19図	2	6号住居跡	弥生土器	甕		(30.4)		A・B・C・E	淡黄褐色	
第19図	3	6号住居跡	弥生土器	甕		(30.4)		A・B・C・E	淡黄褐色	
第19図	4	6号住居跡	弥生土器	壺				A・B・C	淡黄褐色	
第19図	5	6号住居跡	弥生土器	鉢				A・B・C・G	淡灰褐色	
第22図	1	7号住居跡	須恵器	坏蓋	4.4	14.5		A・F	暗灰色	
第22図	2	7号住居跡	須恵器	坏蓋	4.2	14.0		A・F	暗灰色	
第22図	3	7号住居跡	須恵器	坏身				A・F	暗灰色	
第22図	4	7号住居跡	土師器	坏蓋	4.2	(13.5)		A・D・E	燈褐色	
第22図	5	7号住居跡	土師器	甕		(14.0)		A・B・C・E	暗褐色	
第22図	6	7号住居跡	土師器	甕		(14.6)		A・B・C・E	暗褐色	
第22図	7	7号住居跡	土師器	甕	18.2	13.5		A・B・C・E	淡褐色	
第22図	8	7号住居跡	土師器	甕	22.6	14.9		A・B・E	淡褐色	
第22図	9	7号住居跡	土師器	甕		(17.0)		A・B・C・E	淡褐色	
第26図	1	8号住居跡	須恵器	坏蓋	4.0	(13.2)		A・C・F	淡紫灰色	
第26図	2	8号住居跡	須恵器	坏蓋		(14.2)		A・C	灰白色	
第26図	3	8号住居跡	須恵器	坏身		(12.0)		A	淡灰色	
第26図	4	8号住居跡	須恵器	坏身		(10.6)		A	淡灰色	内面ヘラ記号
第26図	5	8号住居跡	須恵器	坏身	4.8	11.8		A	紫褐色	
第26図	6	8号住居跡	須恵器	坏身	4.0	(13.0)		A	淡青褐色	
第26図	7	8号住居跡	須恵器	坏身	4.8	12.5		A	淡灰色	
第26図	8	8号住居跡	須恵器	坏身	4.1	(13.6)		A・B	淡灰色	
第26図	9	8号住居跡	須恵器	坏身	4.5	12.9		A	淡青灰色	外面ヘラ記号
第26図	10	8号住居跡	土師器	坏蓋	4.1	12.8		A・D・E	燈褐色	
第26図	11	8号住居跡	土師器	坏身	3.6	12.0		A・E・F	燈褐色	
第26図	12	8号住居跡	土師器	高坏				A・D・E	淡黄褐色	
第26図	13	8号住居跡	土師器	甕		(14.0)		A・B・C・E	淡茶褐色	
第26図	14	8号住居跡	土師器	甕		(13.6)		A・B・C・E	淡褐色	
第26図	15	8号住居跡	土師器	甕		(18.7)		A・B・C・E	淡褐色	
第26図	16	8号住居跡	土師器	甕				A・B・C・E	暗灰褐色	
第26図	17	8号住居跡	土師器	甕		18.8		A・B・C	暗灰褐色	
第26図	18	8号住居跡	土師器	甕				A・B・C・E	淡灰褐色	
第29図	1	9号住居跡	須恵器	坏蓋		(14.0)		A	淡青灰色	
第29図	2	9号住居跡	須恵器	坏身				A・F	暗灰色	外面ヘラ記号
第30図	1	10号住居跡	須恵器	坏蓋	3.7	(14.4)		A・E	暗灰色	
第30図	2	10号住居跡	須恵器	坏蓋				A	淡青灰色	

第2表 遺跡出土土器觀察表(2)

挿図 番号	遺物 番号	遺構名	種 別	器種	法量()は復元径(cm)			胎土 (石質/A・長石/B・角閃石/C・蛭石/D・ 赤色粘/E・白粘/F・埴粉料/G)	色調	備考
					器高	口径	底径			
第30図	3	10号住居跡	須恵器	坏身	4.0	(9.7)		A	淡紫灰色	
第30図	4	10号住居跡	須恵器	坏身				A・F	淡青灰色	
第30図	5	10号住居跡	土師器	甕		(15.2)		A・B・C・E	淡褐色	
第33図	1	11号住居跡	須恵器	坏蓋	3.4	12.8		A	淡青灰色	
第33図	2	11号住居跡	土師器	鉢	7.6	(10.2)		A・D・E	燈褐色	
第33図	3	11号住居跡	土師器	鉢		(11.2)		A・C・E	淡燈褐色	
第38図	1	1号建物跡	須恵器	坏蓋				A	青灰色	
第38図	2	2号建物跡	弥生土器	甕		(6.8)		A・B・C	淡黄褐色	
第38図	3	3号建物跡	弥生土器	器台		(10.6)		A・B・C・E	淡黄褐色	
第38図	4	3号建物跡	弥生土器	高坏		(15.9)		A・B・C・E	淡茶褐色	
第38図	5	3号建物跡	弥生土器	壺				A・B・C・E	茶褐色	
第38図	6	4号建物跡	弥生土器	甕				A・B・C・E	淡黄白色	
第38図	7	5号建物跡	須恵器	坏蓋				A	暗灰褐色	
第38図	8	5号建物跡	須恵器	坏身				A・F	暗灰色	
第38図	9	5号建物跡	縄文土器	浅鉢				A・B・C	淡褐色	
第38図	10	5号建物跡	土師器	坏身				A・D・E	燈褐色	
第38図	11	6号建物跡	弥生土器	甕				A・B・C・E	淡黄褐色	
第38図	12	6号建物跡	弥生土器	甕				A・B・C・E	淡褐色	
第47図	1	10号建物跡	弥生土器	甕				A・B・C・E	淡褐色	
第47図	2	10号建物跡	須恵器	坏蓋				A・F	淡灰色	
第47図	3	13号建物跡	土師器	甕				A・B・C・G	淡褐色	
第47図	4	13号建物跡	土師器	甕				A・B・C・E	淡黄褐色	
第47図	5	18号建物跡	土師器	甕				A・B・C・E	淡赤褐色	
第47図	6	20号建物跡	須恵器	坏身				A	暗灰色	
第47図	7	20号建物跡	土師器	甕				A・B・C・E	淡黄褐色	
第50図	1	柱穴P1	土師質土器	坏	2.4	(10.5)		A・B・C・E	淡茶褐色	
第50図	2	柱穴P1	土師質土器	坏	2.2			A・B・C・E	淡茶褐色	
第50図	3	柱穴P2	土師質土器	坏				A・B・E	燈褐色	
第50図	4	柱穴P3	土師質土器	坏	2.8	(13.4)		A・B・C・E	淡灰褐色	
第50図	5	柱穴P4	瓦質土器	蓋		(15.6)		A・D・E	暗褐色	
第50図	6	柱穴P5	瓦質土器	搦鉢				A・F	暗灰色	
第61図	1	2号溝	弥生土器	手捏		(9.9)		A・B・C・E	淡灰褐色	
第61図	2	2号溝	弥生土器	甕				A・B・C・E	赤茶褐色	
第61図	3	2号溝	弥生土器	甕			10.5	A・B・C・E	淡黄茶色	
第61図	4	2号溝	弥生土器	甕			7.6	A・B・C・E	淡褐色	
第61図	5	3号溝	弥生土器	甕				A・B・C・E	淡黄褐色	
第61図	6	3号溝	弥生土器	甕				A・B・C・E	淡灰色	
第61図	7	3号溝	弥生土器	器台			12.4	A・B・C	淡褐色	
第61図	8	13号溝	須恵器	坏蓋		(13.8)		A	淡青灰色	
第61図	9	1号溝	須恵器	坏蓋				A	暗灰色	
第61図	10	1号溝	須恵器	坏身				A	灰白色	
第61図	11	13号溝	須恵器	坏身				A・F	暗灰白色	
第61図	12	18号溝	土師器	甕		(19.6)		A・B・C	淡灰褐色	
第61図	13	18号溝	土師器	甕				A・B・C・E	淡灰茶色	
第61図	14	13号溝	土師器	甕		(23.6)		A・B・C・E	淡茶褐色	
第61図	15	1号溝	土師器	甕		(26.2)		A・B・C・E	淡茶褐色	
第62図	16	12号溝	須恵器	坏蓋				A	淡青灰色	
第62図	17	12号溝	須恵器	坏身				A	淡青灰色	
第62図	18	15号溝	須恵器	坏蓋				A・F	青灰色	
第62図	19	15号溝	須恵器	坏身	3.8	13.2	8.9	A・F	淡灰色	
第62図	20	15号溝	須恵器	坏身	3.5	(12.0)	(7.2)	A	青灰色	
第62図	21	15号溝	須恵器	坏身	3.8	(13.2)	(9.9)	A	青灰色	
第62図	22	5号溝	青磁	碗					緑灰色	

第3表 遺跡出土土器観察表(3)

挿図 番号	遺物 番号	遺構名	種 別	器種	法量()は復元径(cm)			胎土 (石美/A・長石/B・角閃石/C・金雲母/D 赤鉄鉱/E・白色砂/F・珪砂粒/G)	色調	備考
					器高	口径	底径			
第62図	23	5号溝	白磁	碗					灰白色	
第62図	24	5号溝	青磁	碗					淡緑灰色	
第62図	25	5号溝	白磁	碗			(8.6)		灰白色	
第62図	26	14号溝	白磁	碗					灰白色	
第62図	27	14号溝	青磁	碗					淡緑灰色	
第62図	28	14号溝	瓦質土器	羽釜				A・B・C	暗灰色	2次焼成受ける
第62図	29	14号溝	瓦質土器	羽釜				A・B・C	暗灰色	2次焼成受ける
第62図	30	14号溝	不明土製品					A・B・C	暗茶褐色	
第62図	31	16号溝	瓦質土器	火鉢			(23.6)	A・B・C	淡褐色	
第62図	32	17号溝	瓦質土器	火鉢				A・B・C	淡褐色	
第62図	33	6号溝	染付	碗					白色	
第62図	34	6号溝	染付	碗					白色	
第66図	1	1号甕棺墓	弥生土器	甕		32.8		A・B・C	淡褐色	
第66図	2	2号甕棺墓	弥生土器	甕	30.0	26.2	7.4	A・B・C	淡黄褐色	
第66図	3	2号甕棺墓	弥生土器	甕	35.8	30.6	9.4	A・B・C	暗黄褐色	
第66図	4	3号甕棺墓	弥生土器	壺		(28.2)		A・B・C	淡黄褐色	
第66図	5	3号甕棺墓	弥生土器	甕		(27.6)		A・B・C	淡褐色	
第74図	1	1号土坑	弥生土器	甕				A・B・C・E	淡黄灰色	
第74図	2	7号土坑	土師器	甕	10.0	8.8		A・B・C・D	黄褐色	
第74図	3	12号土坑	弥生土器	甕			(8.6)	A・B・C	淡黄褐色	
第74図	4	19号土坑	縄文土器	深鉢				A・B・C・G	暗褐色	
第74図	5	22号土坑	青磁	碗					淡黄緑色	
第74図	6	23号土坑	白磁	皿			(5.0)		白灰色	
第74図	7	25号土坑	瓦質土器	播鉢				A	淡茶褐色	内面撞目
第74図	8	27号土坑	須恵器	坏身			(8.2)	A	青灰色	
第75図	1	包含層	縄文土器	深鉢		(25.0)		A・B・C・G	淡黒褐色	刻目突帯
第75図	2	包含層	弥生土器	甕		(26.0)		A・B・C・G	淡赤茶色	
第75図	3	柱穴P9	弥生土器	甕				A・B・C・G	淡褐色	
第75図	4	柱穴P10	弥生土器	甕				A・B・C・E	淡黄褐色	
第75図	5	柱穴P11	弥生土器	甕				A・B・C	淡黄灰色	
第75図	6	柱穴P12	弥生土器	甕				A・B・C・E	淡黄褐色	
第75図	7	柱穴P13	弥生土器	甕				A・B・C・E	淡黄褐色	
第75図	8	柱穴P14	弥生土器	甕				A・B・C・E	淡黄灰色	外面赤色顔料
第75図	9	柱穴P15	弥生土器	甕				A・B・C・E	淡黄茶色	
第75図	10	柱穴P16	弥生土器	甕				A・B・C・E	淡黄灰色	
第75図	11	柱穴P17	弥生土器	甕				A・B・C・G	淡褐色	
第75図	12	柱穴P18	弥生土器	壺		(6.8)		A・B・C	淡褐色	外面赤色顔料
第75図	13	柱穴P13	弥生土器	甕		(9.6)		A・B・C・E	淡黄灰色	
第75図	14	柱穴P18	須恵器	坏身				A	灰白色	
第75図	15	柱穴P19	須恵器	甕				A・C	淡灰色	
第75図	16	柱穴P20	須恵器	甕				A・C	暗黒灰色	
第75図	17	柱穴P19	土師器	甕				A・B・C・E	淡褐色	
第75図	18	包含層	土師器	高坏			(11.6)	A・E・F	淡黄褐色	
第75図	19	柱穴P20	須恵器	坏身				F	暗灰色	
第75図	20	柱穴P21	土師質土器	小皿	1.2	8.2	6.3	A・B・C・E	淡茶褐色	
第75図	21	柱穴P21	土師質土器	小皿	1.2	(8.8)	(6.9)	A・B・C・E	淡茶褐色	
第75図	22	柱穴P21	土師質土器	小皿	0.9	(8.2)	(6.0)	A・B・C・E	淡茶褐色	
第75図	23	柱穴P21	土師質土器	坏	3.2	(13.2)	(7.6)	A・B・C・E	淡茶褐色	
第75図	24	包含層	青磁	碗					黄緑色	外面鑄蓮弁文

第4表 遺跡出土石器観察表

挿図 番号	遺物 番号	遺構名	種 別	石材	法量()は残存長(cm)			備 考
					最大長	最大幅	最大厚	
第15図	3	4号住居跡	紡錘車	滑石		4.2	1.1	
第52図	8	柱穴P2	石臼	安山岩		34.8	11.0	
第52図	9	柱穴P7	石臼	安山岩			10.7	
第77図	9	24号土坑	五輪塔宝珠	凝灰岩	(10.9)			
第79図	26	包含層	石鏃	黒曜石	(1.8)	1.1	0.3	
第79図	27	包含層	石鏃	黒曜石	1.8	1.7	0.4	
第79図	28	包含層	石鏃	黒曜石	2.6	1.7	0.3	
第79図	29	包含層	2次加工剥片	黒曜石	2.1	1.5	0.6	
第79図	30	包含層	2次加工剥片	黒曜石	1.8	1.6	0.7	
第79図	31	包含層	2次加工剥片	黒曜石	2.0	2.6	0.2	
第79図	32	包含層	2次加工剥片	黒曜石	2.4	2.3	0.8	
第79図	33	包含層	2次加工剥片	黒曜石	3.3	1.4	0.3	
第79図	34	包含層	打製石斧	安山岩	8.8	(5.0)	0.8	
第79図	35	包含層	局部磨製石斧	安山岩	(8.2)	6.0	0.9	
第79図	36	2号住居跡	石庖丁	凝灰岩	(7.8)	4.0	0.6	

第3章 調査のまとめ

以上のように、調査区内からは縄文時代から近世に至るまでの各時期の遺構・遺物が検出された。調査の内容の中で、一部遺構の時期等について説明を加えた所もあるが、それらも踏まえて、各時期の様相と調査区周辺で発掘調査された成果も合わせて、検討していくことにする。

1. 縄文時代の遺構について

この時期の遺構としては、4・5・8・15・19号土坑があげられる。これらは落穴状遺構として説明を加えたが、落穴遺構は、掘り方が深く、床面はほぼ平坦に整え、壁面はほぼ垂直に立ち上がり、床面の中央などには1から数か所のピットを伴う例が多いなどの特徴を持つ。本遺跡例はそれらの特徴を兼ね備えている。これらの落穴状遺構の掘られた位置関係についてみると、調査区内を南北方向に約30m程度の間隔をもって存在していることがうかがえ、これらが獣道上に作られた罾としての機能を有していると考え、同一時期に掘り込まれた可能性の高いことを示している。遺構の中からは、遺物はほとんど出土しなかったが、唯一19号土坑の中からは外面に貝殻条痕の残る深鉢胴部が出土している。この遺物は縄文時代後期から晩期にかけてのものと考えられ、丘陵上にある有田塚ヶ原遺跡や同じ沖積地の森ノ元遺跡でも同時期の落穴状遺構が検出されていることから、調査区周辺の広い範囲が狩猟地として利用されていたと考えられる。

2. 弥生時代の遺構について

この時期の遺構としては、1・6号竪穴住居跡、1～3号甕棺墓、2・3号溝があげられる。これらの遺構は主に調査区中央より南側で検出されたが、調査区北側でも柱穴の中からこの時期の遺物が検出されているため、遺構の分布範囲はもっと広がると考えられる。これらの遺構の細かい時期は、出土した土器の口縁部や底部の特徴などから、2・3号溝、3号甕棺墓が最も古く中期後半段階に、1号竪穴住居跡、1・2号甕棺墓が中期末から後期初頭段階に、6号竪穴住居跡が後期前半段階にそれぞれ比定される。甕棺墓はいずれも小児用であったが、近くに竪穴住居跡が存在することは、中期後半から後期前半にこの沖積地一帯に集落が存在していたことを意味する。これらの遺構がつくられた時期とそれを同じくして展開していったのが、調査区北東丘陵上にある祇園原遺跡である。先に紹介したようにこの遺跡では、中期後半から後期中頃にかけての竪穴住居跡や掘立柱建物跡、小児用甕棺墓などが見ついている。竪穴住居跡は5・6軒を単位として、中央広場を中心に円形に配置され、一つの単位集落の様子を示している。さらにこの集落は、大型掘立柱建物や高床式倉庫を住居跡で囲まれた中央に配置する点から、この時期の中心集落とみることができる。祇園原遺跡については、今後の評価も含めて検討する必要があるが、遺構の内容や密度などを比較してみると、本調査区では集落としてのまとまりを持っていないことから、中心となるのは祇園原遺跡であることは間違いなさそうである。しかし、本調査区からは弥生時代前期末から中期初頭以降の遺物も出土しており、祇園原遺跡に先行する集落が存在していた可能性がうかがえることから、中期後半段階になって尾漕遺跡一帯の沖積地上に存在していた集落の一部が分岐し、祇園原遺跡に集落拠点を構えた見方もできる。この点に関しては、今後調査区周辺部での前期末から中期初頭の遺構の調査例を待って再検討してみる必要がある。また、後期後半段階以降の遺物は調査区内では全く検出されなかったが、その時期には祇園原遺跡北側の丘陵裾部に平島遺跡E区が、沖積地の微高地上には環濠を伴う平島遺跡A・B区などの集落遺跡が形成されており、それらの遺跡へ集

落の移動が行われた可能性が考えられる。

3. 古墳時代の遺構について

この時期の遺構としては、2・4・5・7・8・9・10・11号竪穴住居跡、1～6・10・19号掘立柱建物跡、1・4・7・13・18号溝、畝状遺構などがあげられ、調査区全体から検出された。

竪穴住居跡は出土した須恵器の特徴から、いずれも6世紀後半段階に比定されるものの、9号を除き住居跡同士での切り合い関係はほとんどみられない。そこで、集落の総体での検討をするために住居跡ごとの比較を行うといくつかの特徴がみられた。西半を削平されている5号を除き、いずれもカマドを住居跡西側壁面中央に据え付けており、カマドも9号が粘土のみの構築であったのを用いては、いずれも凝灰岩の加工石を袖や支脚に使用するなどの共通点を多く持っている。住居跡内での遺物の出土状況を見てみると、4・7・8号住居跡では、カマドの袖石や支脚はそのままの状態であったにもかかわらず、その上に架けていたと見られる凝灰岩の加工石が、住居跡のかなり埋没している段階で、カマドから少し離れた位置に人為的に動かされていた状況が検出された。また、5・7・8・10号住居跡では、カマドと反対方向の住居跡東側壁面中央付近で、これも住居跡がある一定期間埋没した段階で、人為的に捨てられたとみられる須恵器が割れた状態で検出された。これらの埋没過程にある住居跡の共通点から、住居跡の入口とみられる場所で何らかの飲食儀礼とも呼べる祭祀行為を行い、合わせてカマドを壊したのではないかと考えられる。このようにカマド設置の方向性やカマド使用石材の有無、そして祭祀行為のあり方の特徴から、これらの集落内における一定の決まりごとのようなものが存在していた可能性を見出すことができそうである。

掘立柱建物跡についてであるが、調査区南側で6棟の建物跡が切り合いを持たずに並んだ状態で検出された。調査の内容で触れたように、これらの建物群は同一時期と考えられるが、2号竪穴住居跡の埋没した後から掘り込まれることから、6世紀後半以降と考えられる。ただし、この南側調査区における柱穴や土坑などからは古代や中世に属する遺物は全く出土していないのに対して、これらの建物群柱穴からは、竪穴住居跡とほぼ同時期の須恵器や土師器が出土したことから、建物群は竪穴住居跡が埋没した直後に建てられた可能性が高いと判断される。これらの建物群は、建物規模が延床面積で40m²を超える大型建物もあり、また整然と配置された様子は、古代における官衙的な様相さえ垣間見せている。しかし、建物の柱穴等にはまとまりがなく、主とした棟持柱も存在しないことから、祇園原遺跡における弥生時代の掘立柱建物と同様の伝統的な建物のつくりといえる。これらの建物群の性格については、すぐ西側の2次調査区より、求来里川の蛇行方向と並行するように川側に並んで検出された5棟の総柱建物群との関係が1つの手がかりとなる。この建物群については、村上久和氏が尾漕遺跡2次調査区でまとめており、求来里川の水運を利用した物資集積の倉庫としての解釈がなされている。村上氏はその物資を鉄製品に求めており、そのことを示すように尾漕遺跡の東側谷部に存在する長迫遺跡では、当該期の竪穴住居跡の中から鍛冶の傍証を示す鉄滓や鞆羽口が出土し、本遺跡の7号住居跡からも鉄滓が出土している。調査区南側建物群は、この鉄滓と時期的に合致し、関連があったと考えれば、これらの建物はそれらの倉庫群を管理するための施設であった可能性が考えられる。また、1・4・7・13・18号溝は途中で切れているものの1本の溝と考えられ、第2節3ですでに触れたように、畝状遺構と関連して、道の側溝としての機能を果たしていたと推測される。この道の方向をみると、2号掘立柱建物を一部横切るように延び、4号竪穴住居跡のすぐ東側を通り、調査区北側まで延びたのち、11号竪穴住居跡の西側で鋭角に屈



第80図 調査区周辺の遺跡分布図 (1/5000)

曲し、求来里川の流れる西側に向かって方向を変えて下っている点から、この場所にも2次調査区でみられたような物資運搬の基地としての倉庫群が存在していた可能性も十分に想像される。

3. 古代の遺構について

この時期の遺構としては、3号竪穴住居跡、12～18・20～22号掘立柱建物跡、12・15号溝、27号土坑があげられるが、溝については8・9・11号溝もこの時期の遺構の可能性はある。これらの遺構のうち、3号竪穴住居跡や27号土坑のように調査区南側及び北側まで展開する遺構もみられるものの、大部分は調査区東側で検出されており、また、柱穴等からの出土遺物の分布範囲も同様であることから、周辺部にはあまり展開していなかったと考えられる。

掘立柱建物跡は全部で10棟検出され、そのうち総柱建物が4棟で、それ以外はいずれも1間×1間、2間×2間のような小型の建物である。延床面積は総柱のものも含めて、すべて20m²未満の小型のものであり、総柱以外のものもすべて高床式倉庫であった可能性がある。これらの建物群は、切り合うものもあるが、12号溝とほぼ平行していることから、12号溝に沿って同時期に整然と並んでいたと推測される。これらの遺構の時期は、建物柱穴からの出土遺物が時期比定の困難な土師器や須恵器の小破片のみであるものの、同時期と考えられる12号溝から出土した須恵器坏蓋が平坦な天井部を持ち、須恵器高台付坏身底部がしっかりしていることなどの特徴から、8世紀後半から9世紀前半段階とみることができる。この12号溝は、第2節3で触れたように道の側溝としての機能が考えられることから、古墳時代以降、道は継続して使用され、古代には少し高い場所に位置を変え、直線的につくり直されたと想定される。ただし、この道は、調査区東側だけでのみ検出されているので、建物群に付随して重点的に整備されたと考えられる。また、建物群の西側で検出された15号溝は、出土した須恵器の特徴から12号溝とほぼ同時期と見られ、求来里川の流れる方向に向かって幅広く延びており、深さも斜めに下っていくことから、川へ向かって下りる道であった可能性がある。これら溝との関係からみると、12～18・20～22号建物群は尾漕遺跡2次調査区で確認された総柱建物群のあり方に似ており、古墳時代と同様に鉄素材の備蓄、鉄製品を格納する物資運搬のための倉庫群であった可能性が考えられる。以上の点及び、この時期に長迫遺跡の東側尾根を挟んで向かいの谷に存在するクビリ遺跡から古代の建物群や鉄滓などの鍛冶資料が出土していることなどから、古代においても、前小節で述べたような古墳時代から継続し同様の機能を持つ建物群が造営される可能性があり、その場合には長迫遺跡と本調査区の間調査区南側建物群のような管理建物の存在が想定される。尾漕遺跡と距離的に近い長迫遺跡C地点では、A・B・D地点で確認されなかった棟持柱のしつかりした古代と考えられる大型建物が検出されているようであり、その点で本調査区倉庫群との関係が注目されるが、これについては本報告を待って検討したい。また、3号竪穴住居跡については、ここからの遺物は小破片の土器しか出土しなかったが、住居跡のカマドが外に大きく張り出し小型であること、カマド方位が他の住居と異なっていることなどの特徴を備えており、8～9世紀頃の住居跡に相応しよう。

5. 中世の遺構について

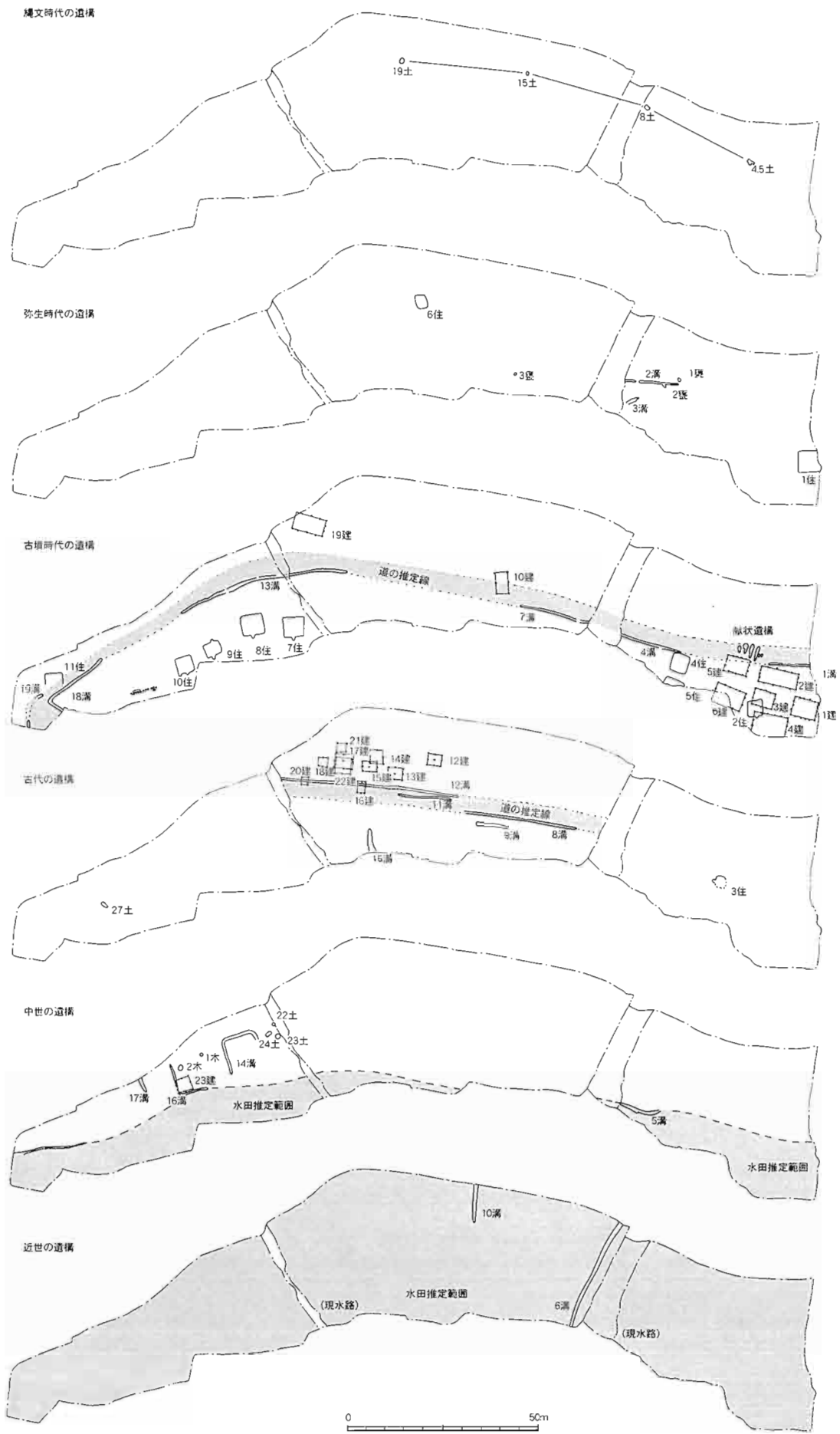
中世の遺構としては、23号掘立柱建物跡、5・14・16・17号溝、1・2号木棺墓、22～24号土坑があげられる。5号溝を除いてはいずれも調査区北側にあたり、中世の建物とみられる柱穴群や墓、土坑は、調査区東側と北側の境としている現水路と16号溝の間で検出された。これらの遺構はその配置に特徴をもつ。まず、建物は14号溝を中心に多数の柱穴が切り合ってみられることから、先に

触れた範囲の中の、さらに一定の場所に何度も建物の建替えが行われたと考えられる。また、土坑は、いずれも現水路の近くに固まってみられ、建物の近くには存在しない。同様に墓も16号溝と14号溝の間の高い位置で検出されたが、この近くにも建物の柱穴は存在していない。これらの特徴から、建物の示す居住地と墓地、そして用途不明の土坑はそれぞれ当初より配置が決められていたと考えられる。これら遺構の配置の意味について考える上で興味深い資料として、14号溝コーナー側より出土した金銅製懸仏があり、これは、高さ約5cmで、背中に棒や紐を通す穴が鑄出されており、何かに懸けて奉っていたと考えられる。また、建物群の東側に隣接する宅地は、園田氏の調べで大座（村の仏事を担当する布教施設）という屋号が残っており、この家の所有者から聞いた話では、昔から家に仏像が置かれており、現在でも近所の人々がお参りに来るという。明治時代には玄関先の畑の中から木造の仏像が出土したそうである。これらのことを合わせて考えると、中世以来伝統的にこの場所が仏事のための施設として使われてきたことが想起される。これらの遺構の時期は、14号溝出土した白磁碗や鎬蓮弁文青磁碗の特徴から、12世紀後半から末を上限とし、14号溝や16号溝、またそれ以外の建物柱穴などから出土した瓦質土器や土師質土器などの特徴から、15世紀から16世紀代を下限とすると考えられる。これらの遺物は、この遺構群の埋没時期を表しており、柱穴同士の切り合いからみても、長期間にわたって、建物が継続して営まれていたものと推測される。

この他の5号溝や16・17号溝の性格については、この溝より下からみられた中世遺物包含層がブランドオパール分析調査の結果、水田として判明したことで、5・16・17号溝の間に広い範囲に分布する水田への用水路として機能していた可能性が高いと考えられる。これらの溝も溝内より出土した瓦質土器から、建物群とはほぼ同時期に埋没し、近世の水田・水路へと移っていったと推測される。

《参考文献》

- 村上久和編 『尾瀬遺跡』（第2次調査区、第5次調査区）大分県文化財調査報告書第112集 大分県教育委員会 2000
- 行時志郎編 『クビリ遺跡』『平成7年度 日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1997
- 土居和幸編 『祇園原遺跡』『平成8年度 日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1998
- 土居和幸編 『長迫遺跡A・B地点』『長迫遺跡D地点』『平成9年度 日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1999
- 土居和幸編 『長迫遺跡C地点』『平島遺跡E地点』『平成10年度 日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2000
- 友岡信彦編 『尾瀬遺跡群・有田塚ヶ原遺跡群』大分県教育委員会 1998



第 81 図 調査区内時期別遺構変遷図 (1/1500)

プラント・オパール分析結果から見た尾漕遺跡4次調査区の水田開発史

大分短期大学助教授

佐々木 章

はじめに

尾漕遺跡は北向きに流れる求来里川の右岸の緩斜面に立地する。今回、圃場整備に伴う発掘調査で、弥生から中世にかけての住居址や、掘立柱建物、溝など多くの遺構を検出した。

調査区のさらに西部は求来里川に面した低地で、この部分では河川改修に伴う発掘調査が行なわれている。その結果、南調査区東部では古墳時代初期の水田状遺構と東から流れる同時期の水路遺構が検出され、北調査区でも古墳時代の遺物を含む水路遺構が北東方向に続いているのが検出された。水路遺構の西では古墳期の掘立柱建物跡群が検出され、また現在の求来里川に接するようにレキの多い水田遺構も検出された。プラント・オパール分析の結果によると、南調査区の水田状遺構土壌からやや多量のイネ機動細胞プラント・オパールが検出され、南北調査区をつなぐ拡張区の断面でも同じ土層からイネ機動細胞プラント・オパールが検出された。しかし隣接する水路遺構の埋土からは検出できなかった。また、北調査区の水路遺構の埋土上層からもイネ機動細胞プラント・オパールが多数検出されたが、底部からは検出されなかった。北調査区東断面では、ほぼ水平に堆積した中世の土層以上で多量のイネ機動細胞プラント・オパールが検出された。下部の土層は水平堆積ではないが、少量のイネ機動細胞プラント・オパールが検出された。中世以前から水田が営まれていたが、中世になって安定した水田が拓かれた様子を示している。さらに離れた北東部の断面でも、ほぼ中世以降に水田化したことがうかがえた。

今回の発掘調査区は求来里川の氾濫が届かない西向きの緩斜面で、遺跡の主要部を含んでいる。なお、調査区の東にも遺跡が連続すると考えられるが、集落が営まれており、調査がおよんでいない。また、集落の背後には有田塚ヶ原遺跡群があり、山腹に形成された小谷にも水田開発が及んだと考えられる。この一部は木材加工団地造成に伴う発掘調査を終えて、現在、取りまとめ中である。尾漕遺跡周辺の水田開発史は、これらを含めて総合的に検討する必要があるが、今回のプラント・オパール分析で明らかになった緩斜面上での水田開発史をあとづけてみたい。

分析試料および方法

発掘調査区の南壁面に接して弥生時代の後期と考えられる1号住居址が検出された。住居址の一部は調査区外になるため、南断面には住居の埋め土が残されていた。この住居部でプラント・オパール分析の基本になる土壌試料を上層から下層まで層ごとに採取した。(A) なおこの位置では4層が欠けるため、西側1.3mの地点で4層を採取した。発掘担当者によると、現在の水田作土の下に犁床層(0層)と淡褐色の1層がある。2層は近世、3層・3下層は中世～近世、4層は中世、5層は古代、6層は古墳時代、住居址を埋める7層～9層は弥生後期と考えられている。また基本試料を採取した地点の東側3.4mでは、1号溝の延長断面が検出されたので溝内の土壌試料をその上層を含めて採取した。1号溝は古墳時代と考えられている。

さらに弥生時代と考えられる6号土壙には埋め土が残っていたので土壌試料を採取した。

調査区では多くの遺構が検出されたが、その中には1号溝以外にも多数の溝が認められた。溝の

多くは等高線に沿ってほぼ南北方向に、あるいはそれと直行する最大傾斜の方向につくられている。14号溝のようにコの字形に折れ曲がる場合でもそれぞれの方向は他の溝と平行である。分析試料の採取時には発掘調査が進行しており、これらの溝を埋めた土はすでにほとんどが掘り上げられていた。しかし一部に残っていた溝内土壌を採取して分析を行ない、溝の用途、特にその上流部に水田が営まれていた可能性を検討した。土壌試料を採取した3号溝は弥生時代、13号溝は古墳時代、8・12・15号溝は古代、14号溝・17号溝は中世、6号溝は近世と考えられている。

これらの土壌試料を後代の攪乱を受けていないと思われる部分から採取した。このとき、採取時の汚染（コンタミネーション）がないよう用具をそのつど洗浄するなど細心の注意をはらった。

こうして採取した試料を研究室に持ち帰り、図1に示す手順に従って定量分析を行った。

分析結果および考察

分析結果を植物体重に換算して図3～図8に示す。縦軸は深さ、横軸は広さ10a (1,000m²) 深さ1cmの土壌中に埋没した植物の地上部乾物重 (t) で示してある。イネについては、生産されたであろう粗量も推定してあわせ示した（細線部）。植物体重に換算するには表1の植物体中の珪化機動細胞密度を使った。

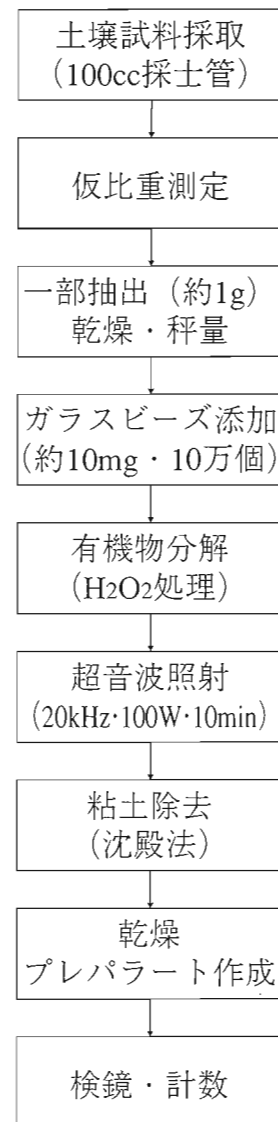


図1 プラント・オパール定量分析手順

表1 植物体中の珪化機動細胞密度

プラント・オパール 分析分類名	代表植物	植物体中密度 (10 ⁴ 個/g)
イネ	イネ <i>Oryza sativa</i>	3.40
ヨシ属	ヨシ <i>Phragmites communis</i>	1.44
タケ亜科	ゴキダケ <i>Pleioblastus Chino</i> <i>var virides f pumilis</i>	20.83
ウシクサ族	ススキ <i>Miscanthus sinensis</i>	2.79

1号住居址(A)の分析結果では、0層と1層ではイネ機動細胞プラント・オパールが非常に少ないが、近世の2層や中世～近世の3層・3下層、古墳と中世の間にあり古代に相当すると考えられる5層は、比較的に多量にイネ機動細胞プラント・オパールが検出された。古墳時代の6層、弥生時代の住居埋土である7～9層では検出されていない。また、西側部で採取した、中世に相当する4層からも比較的に多量のイネ機動細胞プラント・オパールが検出された。

現在まで発掘によって畦畔などの遺構が検出された水田遺構の作土層の分析結果では、経験的にイネ初に換算して1 (t/10a/cm) を超えることが多い。古代以降、近世までの土壌試料の分析結果はこの値にはやや及ばないが、この場所あるいはごく近傍でイネが栽培されていたと考えられる。

一方、現在の犁床層の0層と、その下層で淡褐色の1層ではイネ機動細胞プラント・オパールが非常に少なかった。現在の水田造成時、他の場所から客土したのであろうか。また、古墳以前ではイネ機動細胞プラント・オパールが検出されないことから、すくなくともこの場所でイネを栽培した可能性は低い。弥生後期の6号土壇の結果、および3号溝の結果も同様であった。

1号住居の東側3.4mの1号溝地点では、現在の作土から多量のイネ機動細胞プラント・オパールが検出された。しかし、犁床を形成する0層とその直下の1層ではひじょうに少ない。これらは客土層であろう。この場所では、近世遺物を包含する2層でも少なかったが、その理由は不明である。古墳時代と考えられる1号溝内の埋土などではまったく検出されていない。

南北方向にほぼ等高線に沿って建設された1号溝の性格は不明だが、たとえ水田に灌漑する目的の水路であったとしても、水路の上流がわ、水田作土が流入する場所には水田は広がっていないであろう。溝に沿う東側部が踏み固められた形跡がある。それは等高線方向に、発掘区全体にわたっており最北端では西側に折れ曲がっていて、古墳時代の道跡と解釈されている。古墳期の8号溝、古代の12号溝・13号溝・18号溝などは、道の側に掘られた水路の可能性はあるが、イネ機動細胞プラント・オパールは検出されなかった。これらの溝のすぐ東あるいは南には水田が無かったであろう。1号住居址の周囲には古墳時代の柱穴が多数認められ、住居区の可能性はある。水田があったとすると下流側に相当する、西あるいは北部にその可能性がある。

15号溝は古代であるが、最大傾斜方向で短い。ここでもイネ機動細胞プラント・オパールは検出できなかった。状況から見て、自然災害による崩壊跡のような印象をうけた。修復が客土によるものだとすれば、イネ機動細胞プラント・オパールが検出されないことも肯定できる。

また、中世では14号溝で少量のイネ機動細胞プラント・オパールが検出されたが、17号溝、近世の6号溝では検出されなかった。

14号溝は斜面の下部にむかって開いたコの字形をしており、中世の柱跡群を囲んでいる。この場所は現在「おお座」と呼ばれる集落の中心的な旧家のすぐ前面にあたっている。周囲には他にも中世の柱穴が多いので、水田であったとは考えにくい。検出されたイネ機動細胞プラント・オパールは、イネ葉身を収穫後の作業残屑あるいは廃屋根材などのイネ藁などに起因しているのではないだろうか。

14号溝および17号溝の流路方向すぐ西側では、中世の水田層と考えられる4層が検出されており、その下の6層からは古墳時代の柱穴が多数検出されている。この場所でプラント・オパール分析を行っていないので確証はないが、古墳以降、おそらく中世に水田化されたのではないだろうか。近世の6号溝は、傾斜方向に東西に流れるが、試料を採取したのが最上流付近であった。この上流

部には近世の水田はなかったと考えられる。試料採取地点から下流側が水田化していたかどうかは明らかでない。

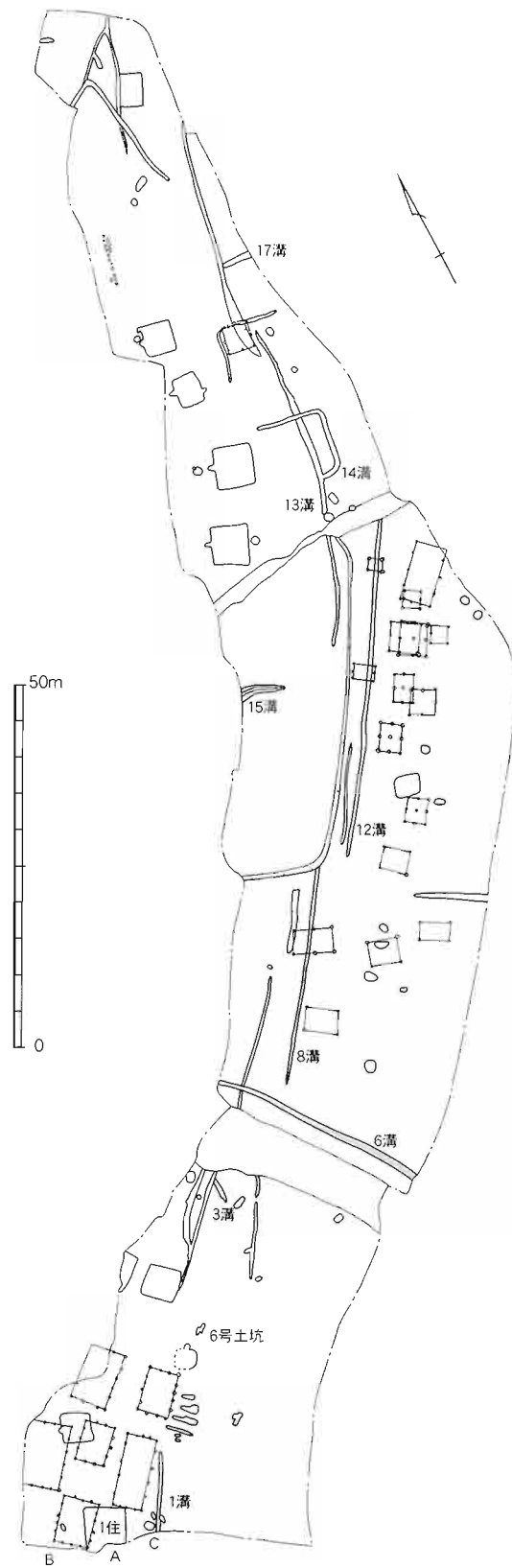
なお、遺跡の立地から、畑作の可能性を視野に入れる必要があると考え、アワ・キビ・ヒエなどの雑穀を含むキビ族の機動細胞プラント・オパールを注意深く探したが、今回は検出されなかった。また、ムギ類については今のところプラント・オパール分析では同定できない。このためキビ族とムギ類については図示しなかった。

また、多くのタケ・ササ類が属するタケ亜科の検出量はいずれの分析結果もごく少なかった。また、ススキ・チガヤなどを含むウシクサ族も全体にあまり多くない。しかし、古代期以前の土層から比較的に多量のヨシ属が検出されることは注目に値する。1号住居址地点(A)の古代期に相当する5層以下、弥生期の6号土壙と3号溝、古代期の15号溝などがそれである。他には古代期の12号溝でヨシ機動細胞プラント・オパールが多かった。特に遺跡南部は、すでに弥生から古代期にかけてヨシが生育できるほど湿潤であったことが考えられる。あるいはヨシが生育する湿地から導水する溝が弥生期には近くに存在した可能性も否定できない。

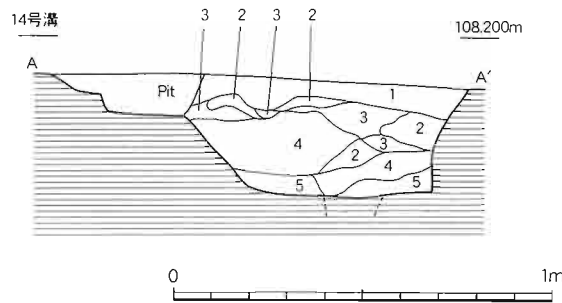
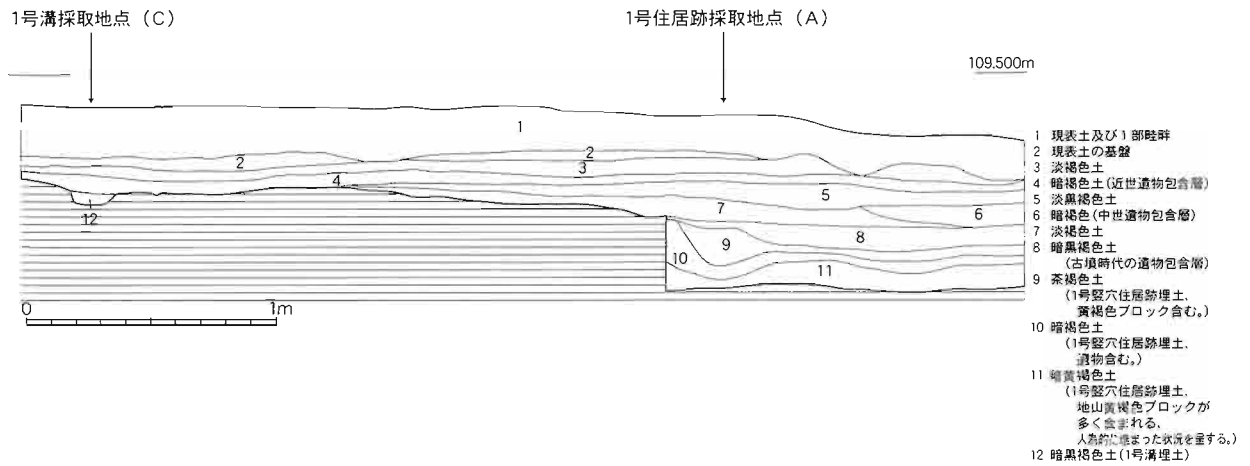
水田開発を考える場合、古墳期の道跡とその両側の溝を境に斜面の上にあたる東部と斜面の下にあたる西部にわけて考える必要がある。やや標高の低い西部については遺跡南部では少なくとも古代にはイネの栽培が始まっていた。しかし、北部まで広がっていたかどうかは明らかでない。中世になると東部には住居が、西部には水田が営まれるようになる。東部が水田化される時期は不明だが、現在は水田化されている。

大規模な水田開発は中世と現代であったといえよう。

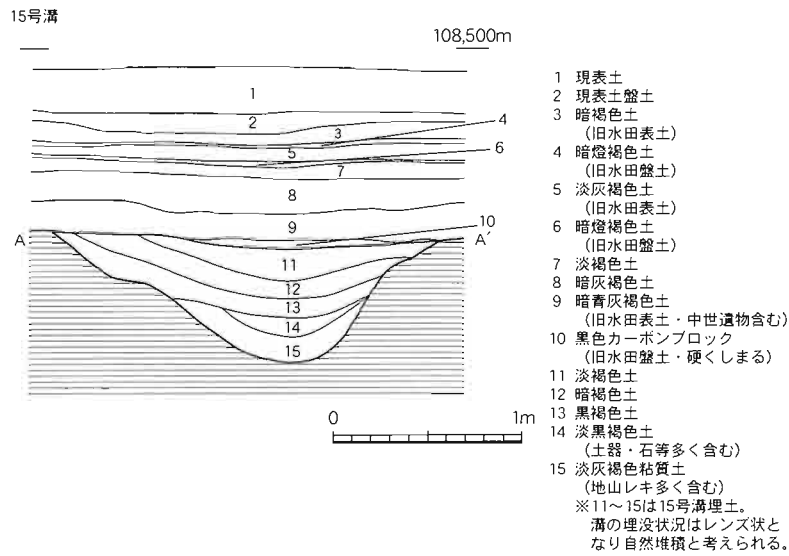
註) プラント・オパール分析：イネをはじめアワ・ヒエ・キビなど主要な雑穀類を含むイネ科植物の葉身中に存在する機動細胞は、その細胞壁に珪酸が沈積しやすく植物の種類ごとに特徴的な形状をしている。また、厚い珪化細胞壁は、植物が枯死した後も分解をうけにくいいため、機動細胞の形状を保ったまま、永く土壌中にとどまっている。そこで、土壌中に残った珪化機動細胞の化石（プラント・オパール）を顕微鏡下で検出することで、給源植物を推定することができる。さらにプラント・オパールが全て土壌中に残っていると仮定できる場合には、現生植物中の珪化機動細胞密度を使って土壌中のプラント・オパールの量を給原植物体重に換算することにより、過去のイネ科植生やイネ科作物の生産量を推定することもできる。これをプラント・オパール分析とよぶ。プラント・オパールの大きさは50 μ m程度で、肉眼では観察できない。そのため分析試料の採取にあたっては、後代の攪乱や採取時の汚染（コンタミネーション）に対して細心の注意が必要である。



第 82 図 プラント・オパール分析試料採取地点位置図 (1/1000)



- 1 暗褐色土
 - 2 灰褐色粘質土(地山ブロック)
 - 3 淡褐色土
 - 4 淡灰褐色粘質土(地山ブロック)
 - 5 淡灰褐色土(溝当初の埋土)
- ※2~4層は溝埋没状況から人為的に埋められた層と考えられる。



第 83 図 プラント・オパール採取地点土層図 (1/1000)

1号住居址(A)

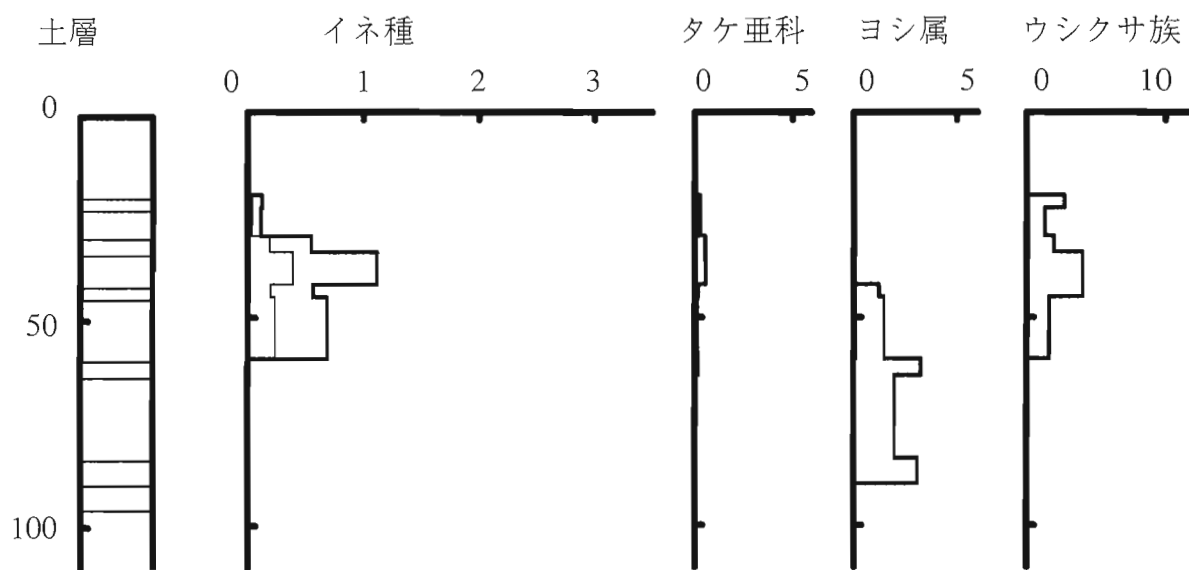


図3 1号住居址地点のプラント・オパール密度から推定した埋没植物量 (t/10a/cm)

1号住居址西側(B)

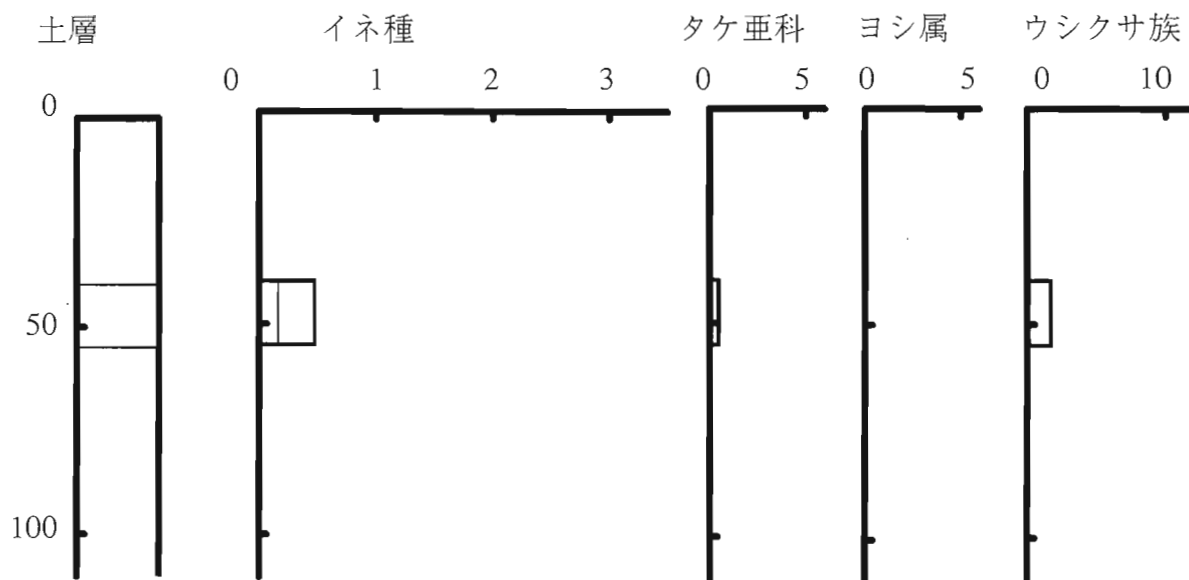


図4 1号住居址西側地点のプラント・オパール密度から推定した埋没植物量 (t/10/cm)

1溝(C)(古墳)

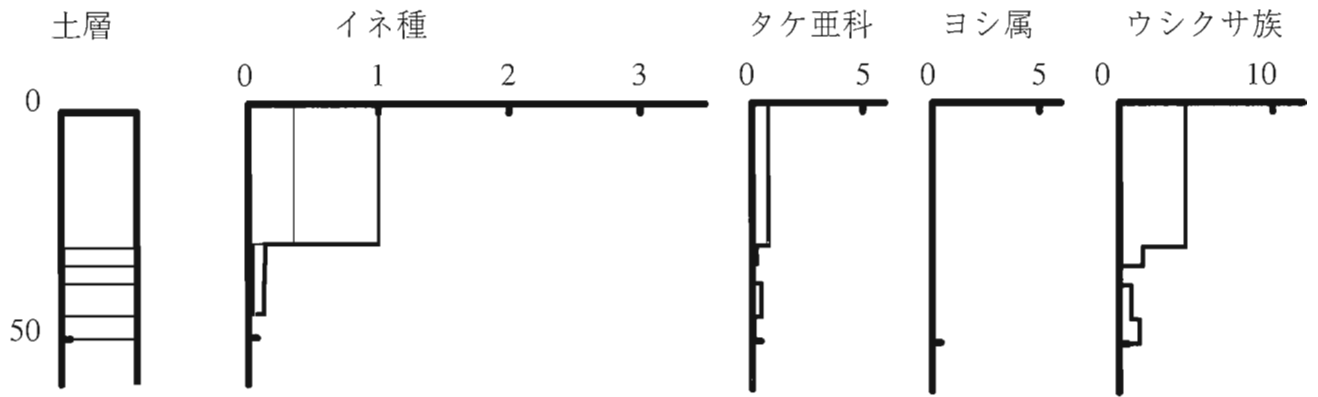


図5 1号溝部のプラント・オパール密度から推定した埋没植物量 (t/10a/cm)

6号土壌(弥生?)

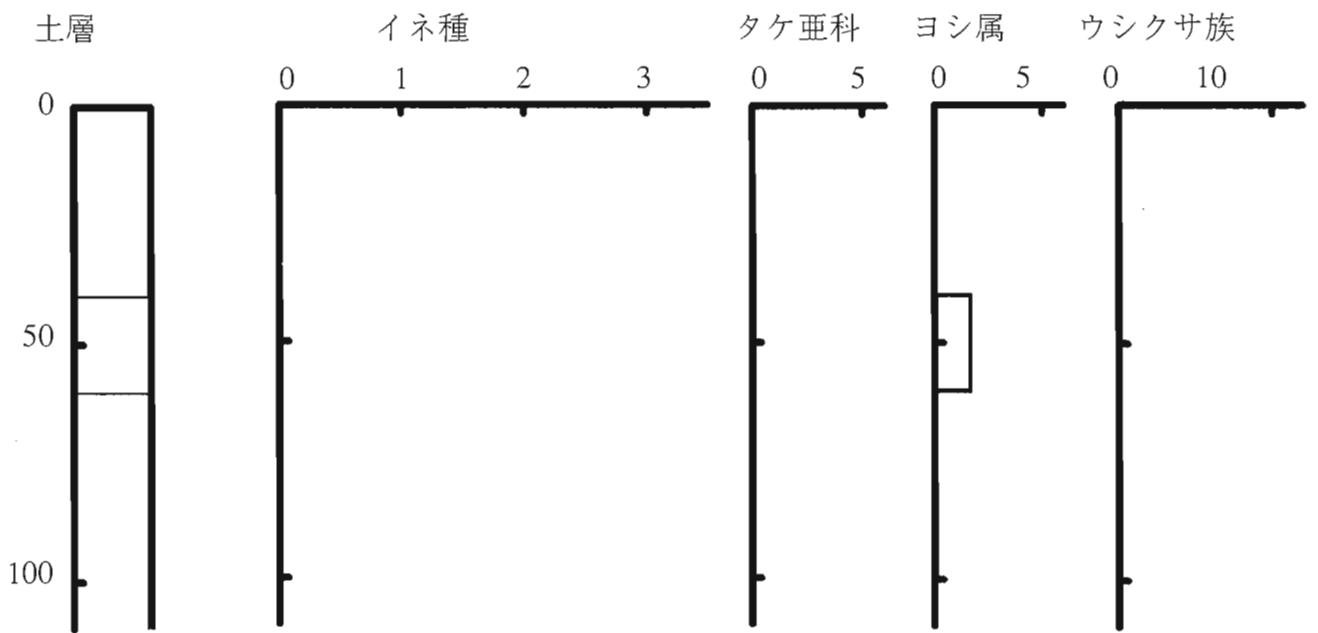


図6 6号土壌のプラント・オパール密度から推定した埋没植物量 (t/10a/cm)

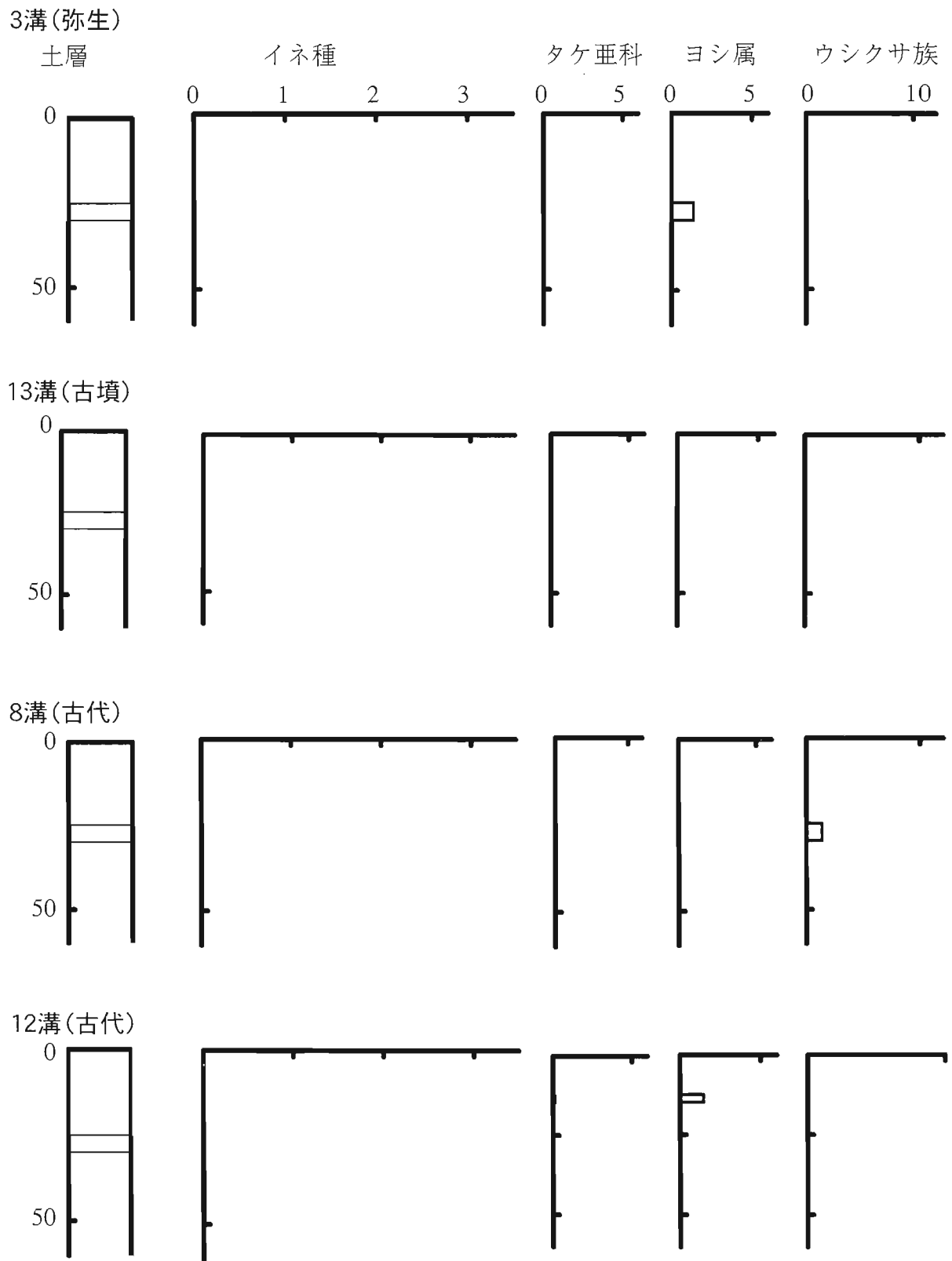


図7 溝埋土のプラント・オパール密度から推定した埋没植物量 (t/10a/cm)

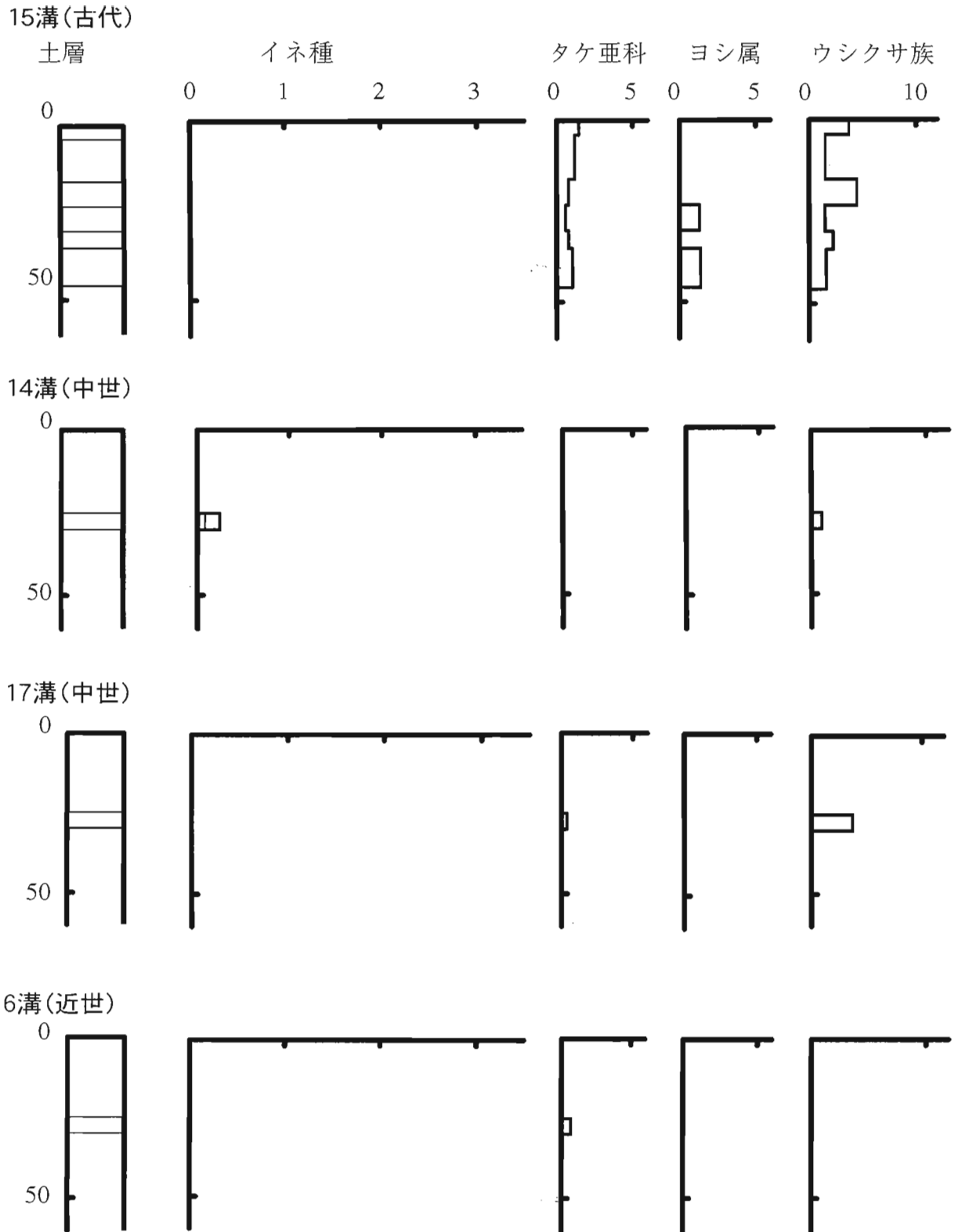


図8 溝埋土のプラント・オパール密度から推定した埋没植物量 (t/10a/cm)

尾漕遺跡出土人骨について

舟橋京子¹⁾・田中良之²⁾

1) 九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座

2) 九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座

1. はじめに

大分県日田市尾漕遺跡の中世の土壙墓から人骨が出土し、九州大学大学院比較社会文化研究科（当時）基層構造講座に調査の依頼があった。それを受けて、本講座の大森円および平美典が現地におもむき、調査および取り上げを行った。その後、人骨は九州大学へと搬入され、同講座において整理・分析をおこなった。以下にその結果を報告する。なお、人骨は現在九州大学大学院比較社会文化研究院考古人類資料室に保管されている。

2. 出土状況

【1号墓（1号人骨）】

隅丸長方形の墓壙プランで、北側から頭蓋骨および歯牙が出土している。歯牙は歯列弓を保った状態であり、上・下顎の歯牙の位置から見て顔面を南に向けた状態と考えられる。頭蓋骨の南側からは、上肢骨が肘関節を屈曲した状態で出土しており、右の方がより強く屈している。さらにその南側からは下肢骨が強屈して右へ倒した状態で出土している。

以上のことから、頭位を北に向け、首もまた強く曲げた右側臥屈葬であったと考えられる。

【2号墓（2号人骨）】

楕円形の墓壙内から人骨が出土しているが、保存状態が不良であり、埋葬姿勢は不明である。

3. 人骨所見

1号人骨

【保存状態】

本人骨は保存状態が不良であり、部位同定不可能な頭蓋骨片および長管骨片が多数遺存している。歯牙も一部遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

/	/	/	/	/	/	/	/	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	/	/	/
M ₃	/	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	/	/	/	P ₂	M ₁	/	/	/

○歯槽開放 ×歯槽閉鎖 /欠損 △歯根のみ

・遊離歯 ()未萌出 以下同様

歯牙の咬耗度は栃原（栃原1957）の2° aである。

【年齢・性別】

年齢は、歯牙の咬耗度から成年と推定される。性別は、判定可能な部位が遺存しておらず不明である。

2号人骨

【保存状態】

本人骨は保存状態が不良であり、部位同定不可能な長管骨片が遺存している。歯牙も一部遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

/ / / / / / / / / /	/ / / / / / / / / /
/ / / / / / / / / /	/ / / / / / / / / /

P¹ P²

歯牙の咬耗度は栃原（栃原1957）の2° aである。

この他にも左右同定不可能な下顎第一大臼歯片が遺存している。

【年齢・性別】

年齢は、歯牙の咬耗度から成年と推定されるが、対咬歯牙が遺存していないため、断定はできない。性別は、判定可能な部位が遺存しておらず不明である。

4. まとめ

以上、出土人骨についての記載・報告を行ってきた。本遺跡出土人骨はいずれも保存状態が不良で、計測に耐えうる人骨はなく、形質的比較を行える個体は得られなかった。埋葬姿勢に関しては、側臥屈葬であることが確認された。

最後に本報告にあたり、日田市教育委員会各位にはご便宜を賜り、かつご迷惑をおかけした。感謝したい。また、九州大学比較社会文化学府基層構造講座の岡崎健治氏には人骨整理から報告の過程で多くのご助力を頂いた。あわせて感謝したい。

参考文献

栃原博，1957：日本人歯牙の咬耗に関する研究．熊本医学会雑誌，31．補冊4



写真10 1号木棺墓人骨出土状況



写真11 2号木棺墓人骨出土状況

尾漕遺跡周辺の地名・屋号の調査について

別府大学大学院生 園田 大

1.はじめに

本調査は、1997年度に大分県日田市求来里川流域の調査を実施した地名・屋号の調査成果の報告である。この調査は、池辺地区県営圃場整備事業に伴う尾漕遺跡・森ノ元遺跡(以下、遺跡と略記)の発掘調査に平行して実施し、遺跡周辺部を中心に行った。調査対象範囲は地名・屋号が遺跡周辺部を中心に、水利は灌漑範囲の関係上、遺跡から北は諸留町内平島・片山・瀬戸の各地区と有田町、一方南は池辺町までとしている。

なお、調査方法は、圃場整備対象地域となった水田に、地名・屋号・水利を記録し、そして下記の成果を1/2,500地形図におとした。

2.調査の成果

1) 調査成果の概要

聞き取り調査により明らかとなった地名・屋号は、下記の表のごとく地名38点、屋号41点の合計79点にのぼる。このうち、前者は田畑にその多くが付与されており、後者は遺跡周辺部の民家が対象となっている。後者からは、代表的なものとして、下屋敷(△35)、上屋敷(△36)、大座(△37)などの興味深い屋敷・座地名などを確認することができた。

一方の水利については、遺跡より北で諸留町内瀬戸に位置する日掛井堰とその他の堤により、南では池辺に位置する矢形井堰により灌漑されていることがわかった。

2) 成果の内容

ここでは、第84図に地名を(●)で、屋号を(△)で番号を付し、その内容については表として地図に落とした位置と照合できるようにしている。

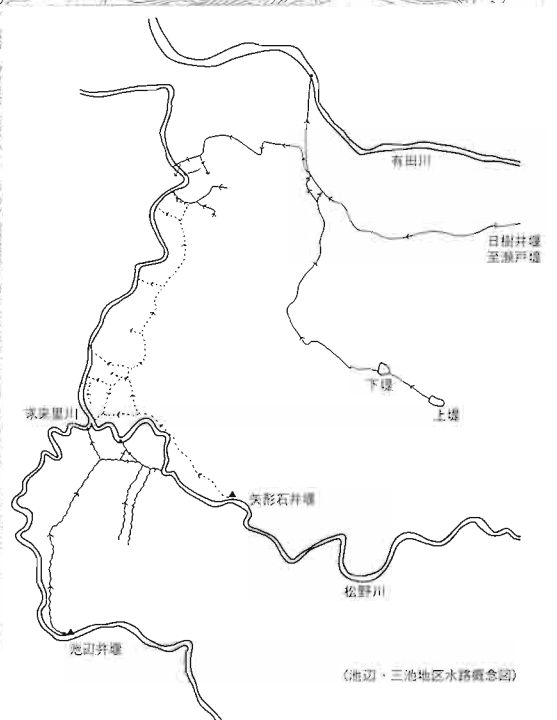
(1) 地名

場 所	地 名	音 読	由 来	備 考
●1	下ン田	シモンタ	下ン田	
●2	寺ン田	テランウエ	緑芳寺の上	
●3	大田	オオタ	大きな田	元は一枚の田
●4	大田	オオタ	同上	同上
●5	キドロ	キドグチ	不明	
●6	下ンホウノ田	シモンホウノタ	下の田	
●7	三角田	サンカクダ	三角の形をした田	
●8	道添	ミチソエ	道路沿いの田	
●9	七畝	ナナセ	面積七畝の田	
●10	大田	オオタ	大きな田	
●11	ソウロク	ソウロク	不明	
●12	新田	シンデン	不明	新しい田か
●13	丸田	マルタ	丸い形をした田	現在は丸くない
●14	下ン田	シモンタ	下の田	
●15	ウータン	ウータン	面積一町以上の田	大きな田とも呼ぶ
●16	ドンサコ	ドンサコ	不明	
●17	北ン裏	キタンウラ	屋号北の裏	
●18	前ン田	マエンタ	前の田	
●19	上ノ原	ウエノハラ	不明	
●20	向コウノ田	ムコウノタ	向かいの田	
●21	川端ノ田	カワバタノタ	池辺川沿いの田	
●22	トンボウス	トンボウス	昔、川に石があった	石の形が坊さんの頭をしていた
●23	宮田	ミヤタ	元は東神社所有の田	現在は公民館として利用
●24	前畑	マエバタケ	前の畑	
●25	茶園原	チャエンウラ	茶畑として利用	
●26	社田	シャデン	不明	東神社所有の田だったのか
●27	サコネケ	サコネケ	不明	

場 所	地 名	音 読	由 来	備 考
●28	サコン前	サコンマエ	不明	サコンネケの前か
●29	向田	ムコウノタ	向かいの田	
●30	段々原	ダンダンハラ	不明	
●31	ナゴノ下	ナゴノシタ	屋号ナゴノネケの下の田	
●32	カサン田	カサンタ	傘の形をした田	
●33	小段	ショウダン	小さな田	
●34	クツガタ	クツガタ	不明	
●35	矢形石ノ田	ヤガタイシノタ	不明	
●36	井手元	イデモト	不明	矢形石井堰と関係あるのか
●37	前ノ田	マエノタ	前の田	同上
●38	上ノ田	ウエノタ	上の田	

(2) 屋号

場 所	地 名	音 読	由 来	備 考
△1	ナゴノネケ	ナゴノネケ	不明	ナゴノネケとも呼ぶ
△2	屋根ノ下	ヤネシタ	不明	
△3	マンダン上	マンダンウエ	屋号マンダの上	
△4	マンダ	マンダ	不明	
△5	上ノ段	ウエノダン	不明	
△6	峠	トウゲ	不明	
△7	北ノ上	キタンウエ	屋号北の上	
△8	北	キタ	不明	
△9	梅田	ウメダ	不明	
△10	新屋	シンヤ	不明	
△11	門先	モンサキ	不明	
△12	下ノ本家	シモンホンケ	不明	
△13	マンジュウヤ	マンジュウヤ	不明	話者によって場所が異なる
△14	川上	カワカミ	不明	池辺川沿いの上か
△15	四辻	ヨツジ	不明	ヨツツウジとも呼ぶ
△16	一ノ下	イチノシタ	不明	
△17	向道	ムコウミチ	向かいの道	
△18	上堂道	ウエンドウミチ	東神社に通じる道	
△19	清水元	シミズガモト	昔清水が湧いていた	
△20	前	マエ	不明	
△21	一本木	イッポンギ	不明	イップウギとも呼ぶ
△22	榎ノ木	ナラノキ	不明	性は榎木
△23	奥	オク	不明	
△24	木下	キノシタ	不明	
△25	中	ナカ	不明	
△26	新屋	シンヤ	不明	
△27	鍛冶屋	カジヤ	お金もちの家だったらしい	
△28	鍛冶屋ノ下	カジヤンシタ	屋号鍛冶屋の下	
△29	鍛冶屋ノ上	カジヤンウエ	屋号鍛冶屋の上	
△30	カイ曲	カイマワリ	不明	
△31	屋敷	ヤシキ	武士の屋敷跡だったらしい	近くに墓あり
△32	松葉	マツバ	不明	
△33	松葉屋	マツバヤ	不明	話者によって場所が異なる
△34	小堤下	コツ ツミシタ	堤の下	
△35	下屋敷	シモヤシキ	不明	屋号上屋敷と関係あるのか
△36	上屋敷	カミヤシキ	不明	
△37	大座	オオザ	仏事を担当する施設	同じ屋号が平島にもあり
△38	マガレノキ	マガレノキ	不明	
△39	シュウジ	シュウジ	不明	
△40	宮ノ下	ミヤノシタ	祇園社の下	
△41	ダイモ	ダイモ	不明	
△42	ダイモ下	ダイモシタ	不明	屋号ダイモの下か
△43	新宅	シンタク	不明	



《池辺・三池地区水路概念図》

第84図 地名・屋号・水利分布図 (1/5,000)

(3) 水利

遺跡周辺の水利調査について、北は諸留町内瀬戸地区に位置する日掛井堰と瀬戸・上・下の各堤により、その灌漑範囲は同町内瀬戸・片山・平島の各地区、有田町、池辺町の一部へと広範囲に及んでおり、有田・求来里の各河川沿いに位置する水田を潤している。一方、各堤の現状は、瀬戸地区の位置する瀬戸堤が水利としての機能を有しているのに対し、平島地区に位置する上・下堤は木材加工団地の造成により消滅しているが、本来は平島集落南側の細長い谷間の水田部を潤していたのであろう。南は、池辺町に位置する矢形石井堰により、求来里川沿いと池辺・三池の各集落の間に位置する水田を潤している。

3.調査のまとめ

以上のような調査結果からその成果をまとめる。今回調査した池辺・三池の各地区一帯には、中世以前の状況を伺い知ることのできる文献史料等は残っていなかったものの、しかしながら注目すべき屋号として大座(△37)がある。この大座については聞き取り調査によると、村の仏事を担当する布教施設で、布教するための座(特権)を持っていた事がわかった。近世期には久留島・森藩の藩主がここに立ち寄った際にも接待を催したことが伝えられている。

一方、考古学の発掘成果を借用すると、大座周辺からは注目すべき遺構と遺物を確認することができている。まず、遺構としては、溝で囲まれた屋敷地と人骨の出土した2基の木棺墓、さらには五輪塔の宝珠部分が出土した土坑などが、大座の屋号を持つ民家のすぐ両側で確認されている。さらに屋敷地に建てられた建物柱穴の中からは、高さ約5cmの青銅製の懸仏が出土している。上述のごとく、大座が仏事に関する布教施設であるならば、考古学成果とあわせて大座周辺には中世期における宗教関連の施設があり、現在まで屋号を通じて伝わったのであろう。

最後に、調査によって確認された地名・屋号であるが、残念ながら由来の大半以上は不明であった。これは、人々の言い伝えによる記憶が、行政地名が進行することにより薄れていったためと考えられるが、さらにこの地区一帯で進められてきた道路建設、木材加工団地造成などの大規模開発により、この現象は加速されていくものとみられる。

(付記)

本調査を実施するにあたっては、池辺・三池・平島各地区の在住の方々と水利組合関係者の皆様方にはご迷惑にもかかわらず、快くご協力を頂くことができました。また、別府大学飯沼賢司教授、九州大学服部英雄教授には、本調査を行うにあたってご指導賜りました。心よりお礼を申し上げます。

写真図版

図版 1



1号竪穴住居跡



2号竪穴住居跡



2号竪穴住居跡カマド



3号竪穴住居跡



4号竪穴住居跡



4号竪穴住居跡カマド



5号竪穴住居跡



5号竪穴住居跡内遺物出土状況



6号竪穴住居跡



6号竪穴住居跡内遺物出土状況



7号竪穴住居跡



7号竪穴住居跡カマド



7号竪穴住居跡カマド



7号竪穴住居跡内遺物出土状況



8号竪穴住居跡



8号竪穴住居跡カマド



8号竖穴住居跡カマド



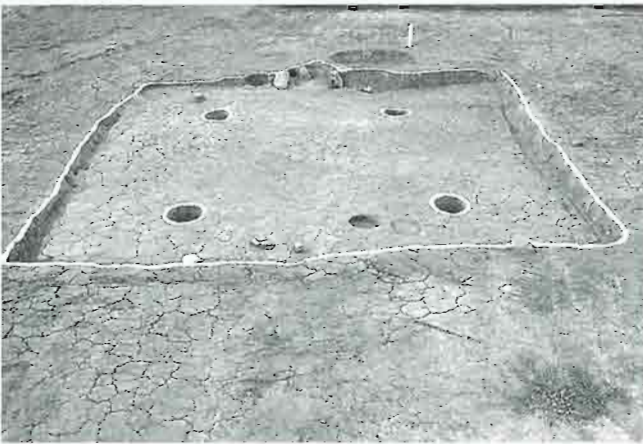
8号竖穴住居跡内遺物出土状況



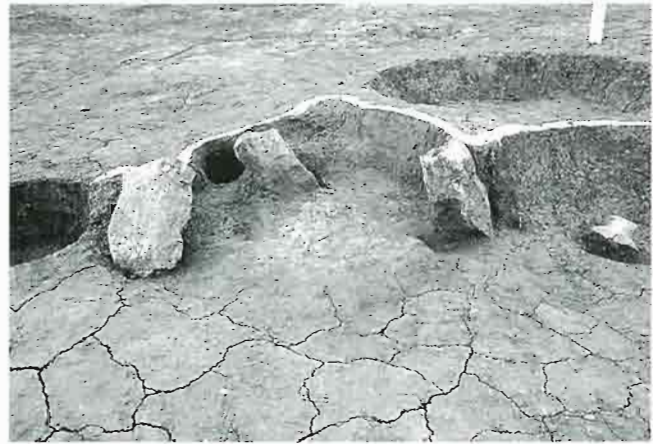
9号竖穴住居跡



9号竖穴住居跡カマド



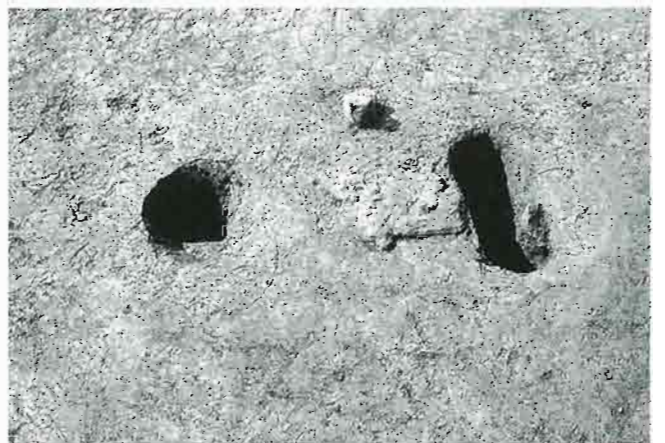
10号竖穴住居跡



10号竖穴住居跡カマド



11号竖穴住居跡



11号竖穴住居跡カマド



1号掘立柱建物跡



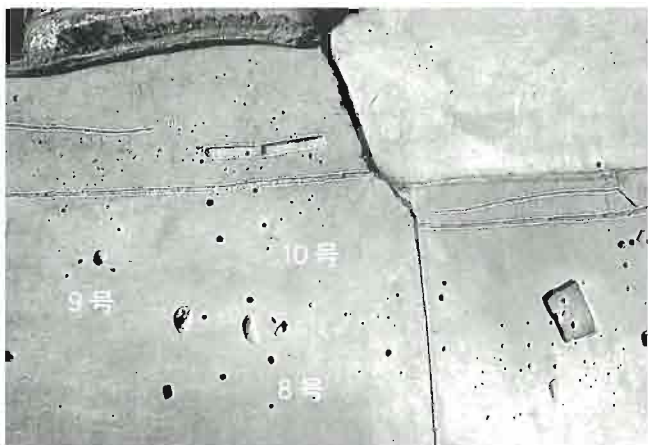
2号掘立柱建物跡



3・4号掘立柱建物跡



5・6号掘立柱建物跡



8～12号掘立柱建物跡



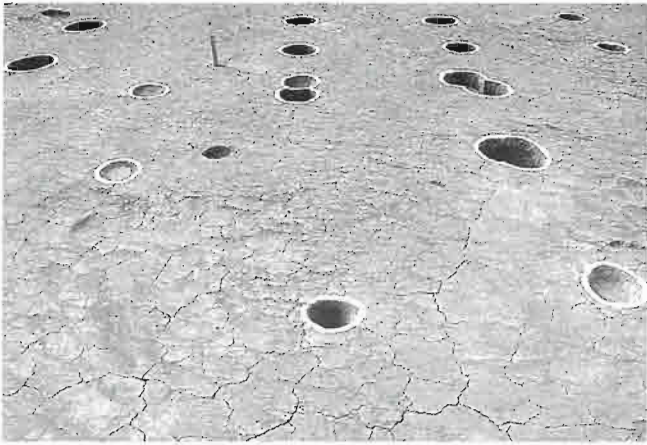
9号掘立柱建物跡



12号掘立柱建物跡



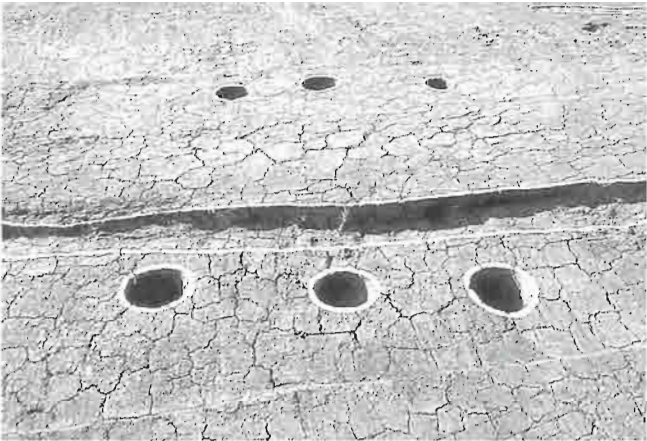
13号掘立柱建物跡



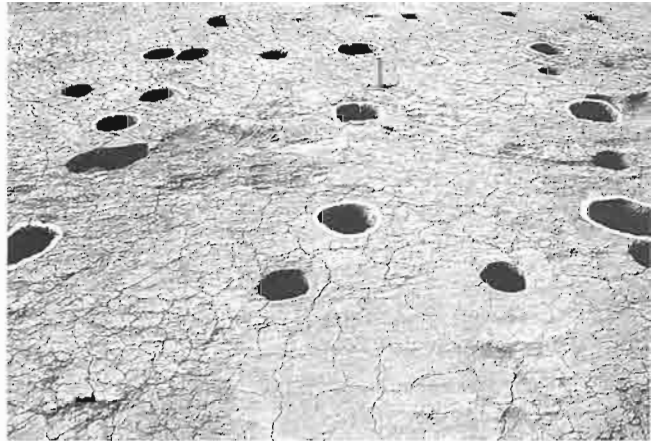
14号掘立柱建物跡



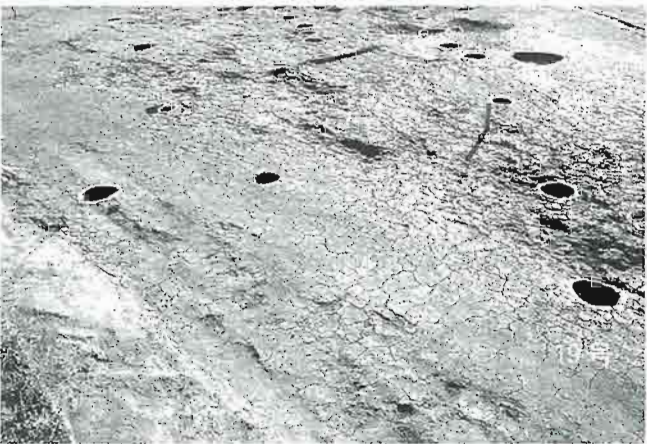
15号掘立柱建物跡



16号掘立柱建物跡



17号掘立柱建物跡



18・19号掘立柱建物跡



20号掘立柱建物跡



調査区北側建物群



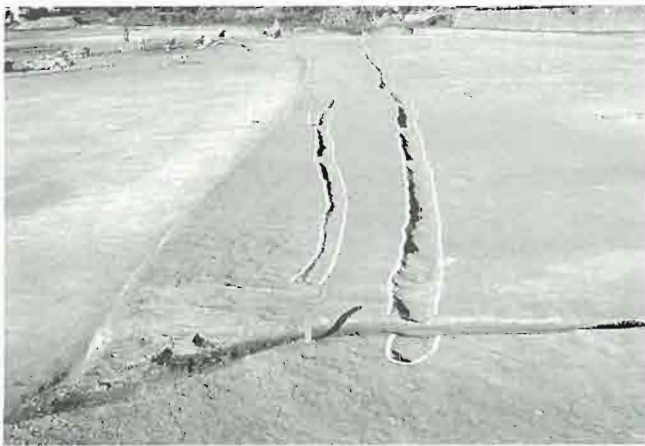
建物柱根検出状況



1号溝と畝状遺構



7～9号溝



11・12号溝



12号溝と東側建物群



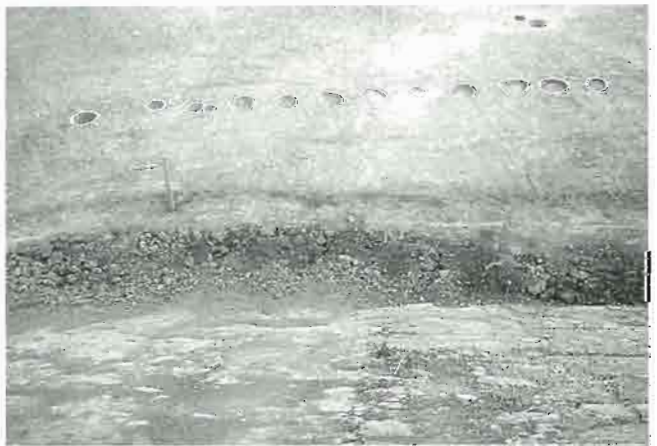
14号溝と建物柱穴群



15号溝



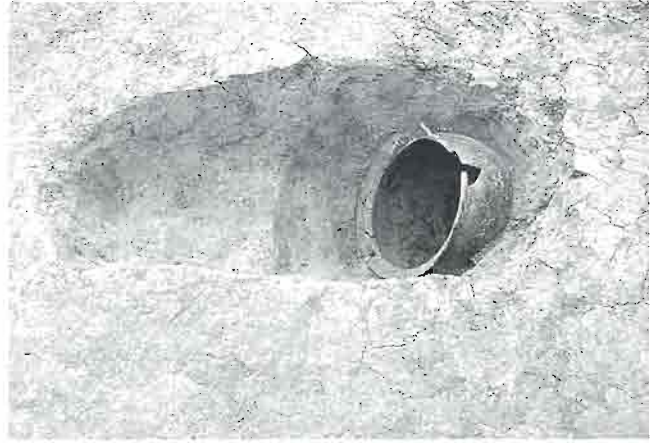
15号溝遺物出土状況



柵列状遺構



1号甕棺墓



1号甕棺墓



2号甕棺墓



3号甕棺墓



1号木棺墓



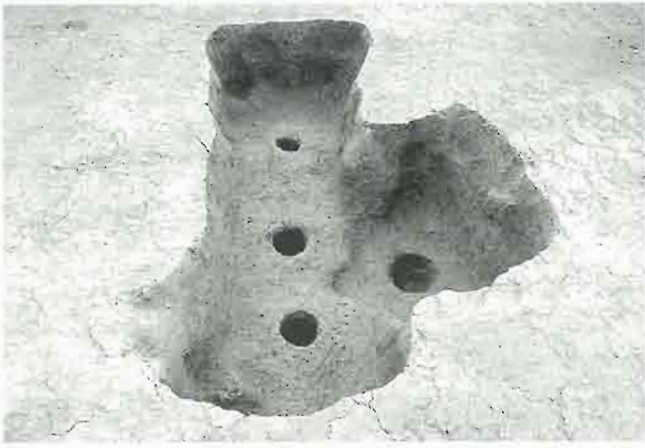
1号木棺墓人骨出土状况



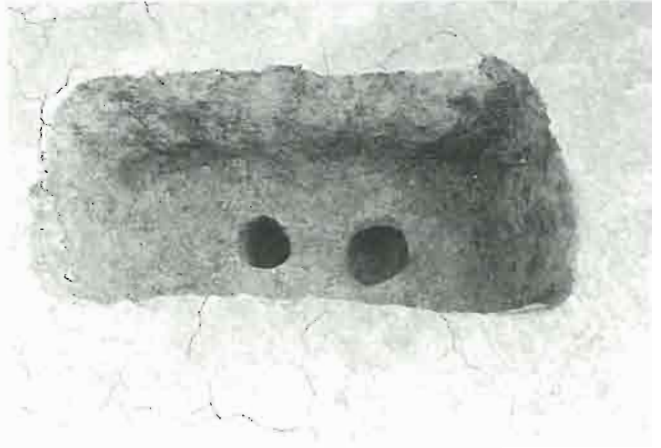
1号木棺墓



2号木棺墓人骨出土状况



4·5号土坑



8号土坑



15号土坑



6号土坑



6号土坑



11号土坑



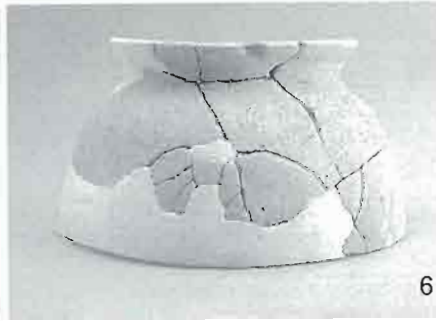
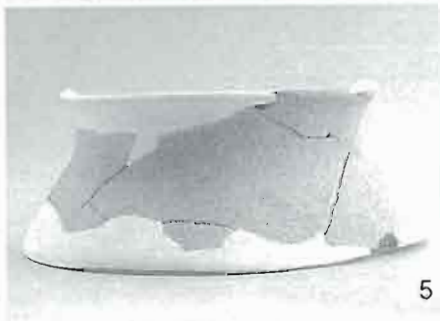
24号土坑



27号土坑



5 1号竖穴住居跡出土遺物

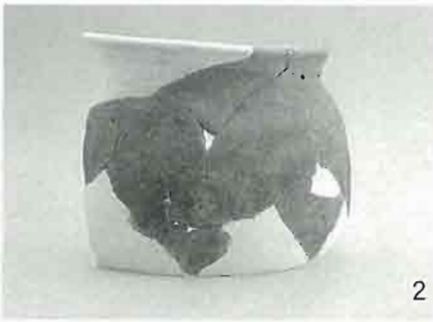


8 2号竖穴住居跡出土遺物



1 3号竖穴住居跡出土遺物





2



3

4号竖穴住居跡出土遺物



1

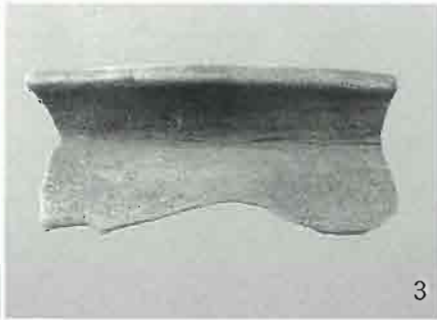
5号竖穴住居跡出土遺物



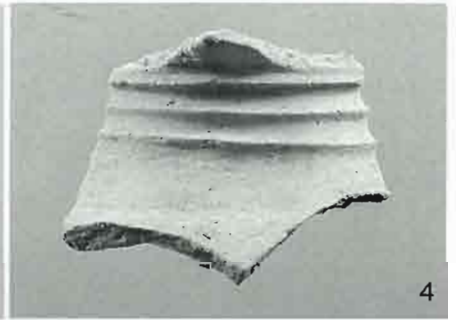
1



2



3



4



5

6号竖穴住居跡出土遺物



1



1の内面



2



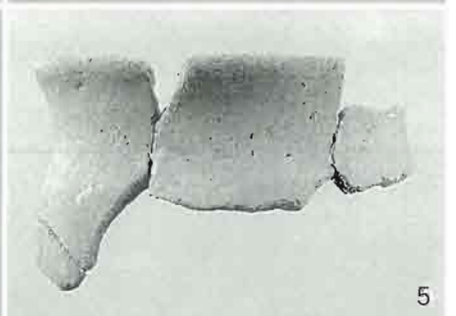
2の内面



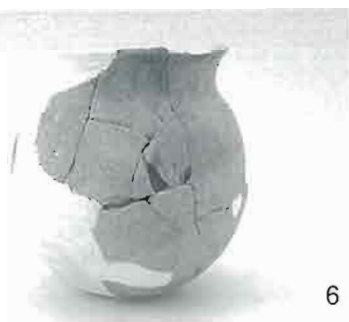
3



4



5



6



7



8



9



10 7号竖穴住居跡出土遺物



1



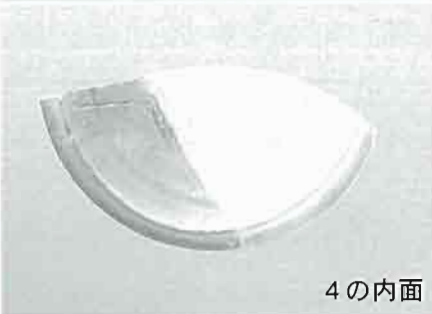
2



3



4



4の内面



5



6



7



8



9



9の外表面



10



11

12

13



14

15

16



17

18

8号竪穴住居跡出土遺物



1

2

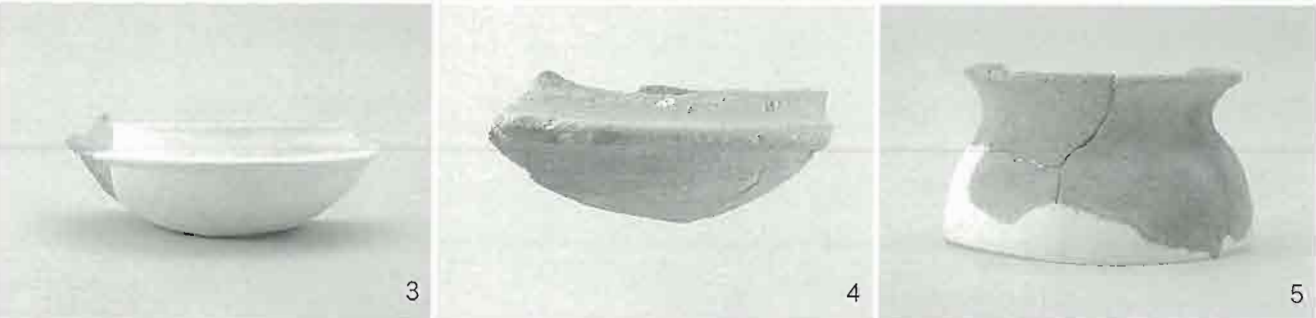
2の外面



1

2

上 9号竪穴住居跡出土遺物
左・下 10号竪穴住居跡出土遺物



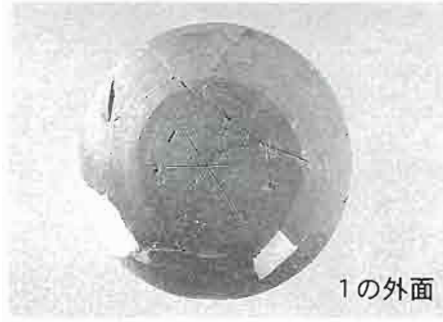
3

4

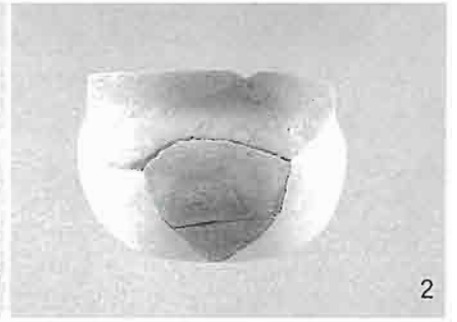
5



1



1の外面



2



3 11号竪穴住居跡出土遺物



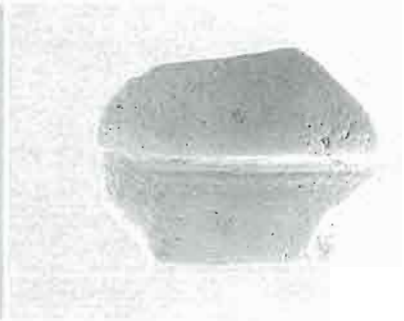
1



6



7



9



2



3

上
南側掘立柱建物群柱穴出土遺物
左・下
東側掘立柱建物群柱穴出土遺物



5



6



7



2

1

4



5

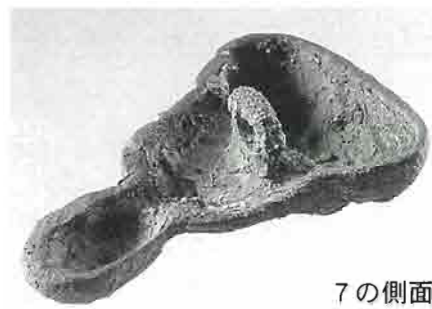
6



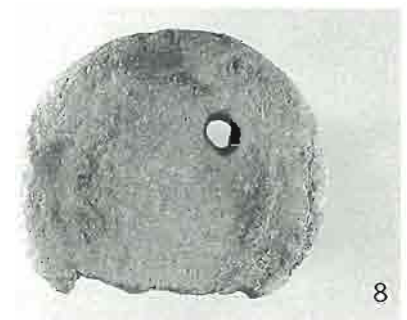
7の正面



7の裏面



7の側面



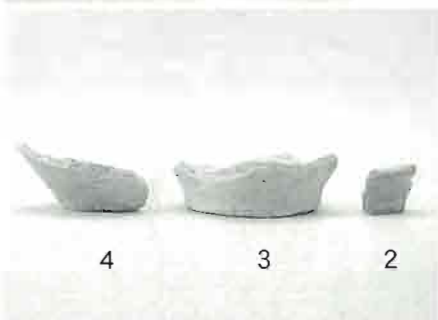
8



9 北側掘立柱建物群柱穴出土遺物



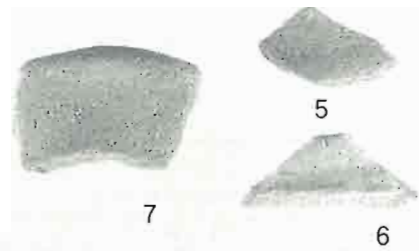
1



4

3

2



7

5

6



8



8の内面



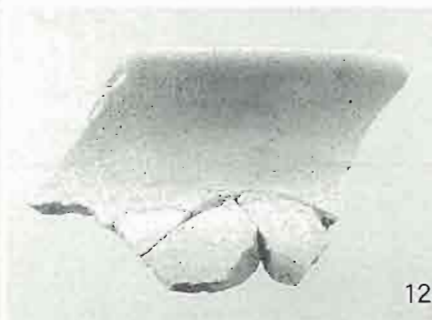
9



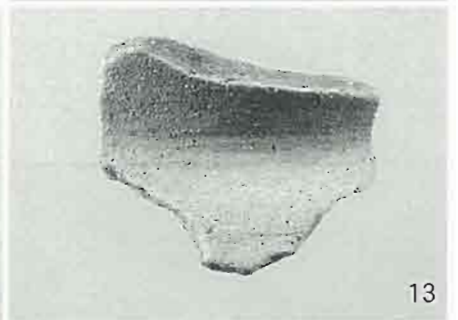
10



11



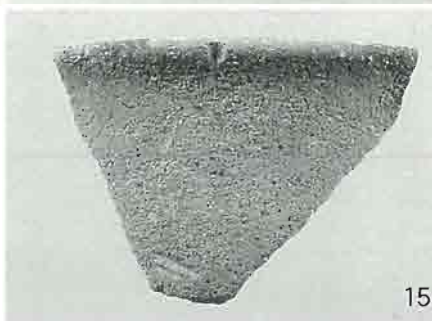
12



13



14



15

1～4 2号溝出土遺物

5～7 3号溝出土遺物

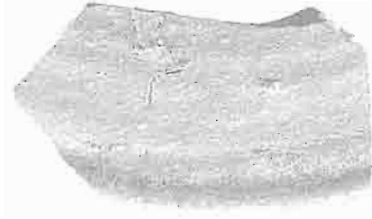
8～15 1・13・18号溝出土遺物



16



17 16・17 12号溝出土遺物



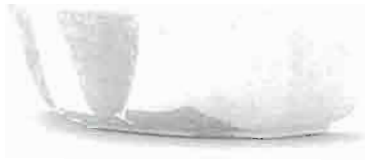
18



19



20



21 18~21 15号溝出土遺物



23

22



25



24

22・23 5号溝出土遺物
24・25 5号溝西側包含層
(中世水田) 出土遺物



27

26



29



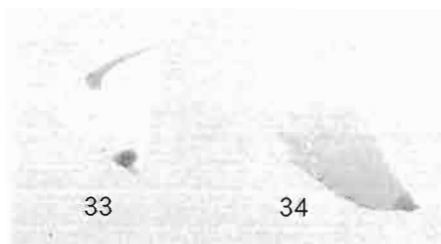
30



31



32



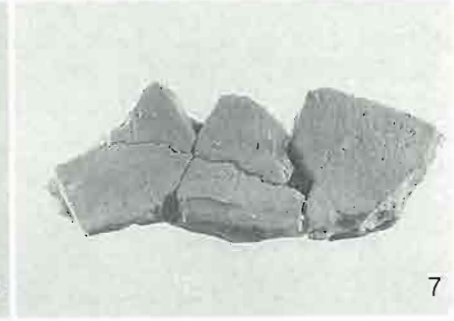
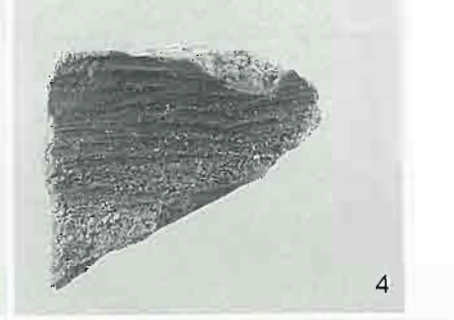
33

34

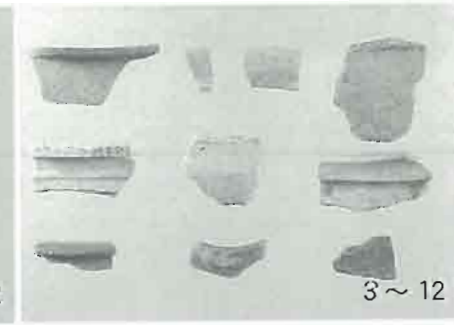
26 ~ 30 14号溝出土遺物
31 16号溝出土遺物
32 17号溝出土遺物
33・34 6号溝出土遺物



上 1号甕棺
中 2号甕棺
右 3号甕棺



2 7号土坑出土遺物
3 12号土坑出土遺物
4 19号土坑出土遺物
5 22号土坑出土遺物
6 23号土坑出土遺物
7 25号土坑出土遺物
8 27号土坑出土遺物
9 24号土坑出土遺物

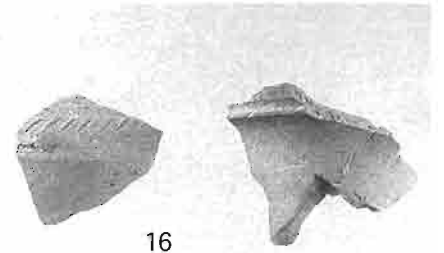




13

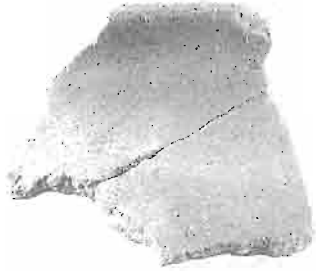


14



16

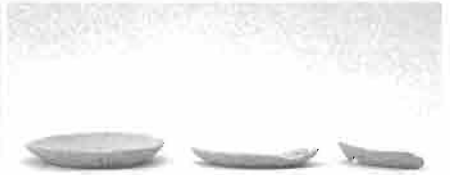
17



18



19



21

22

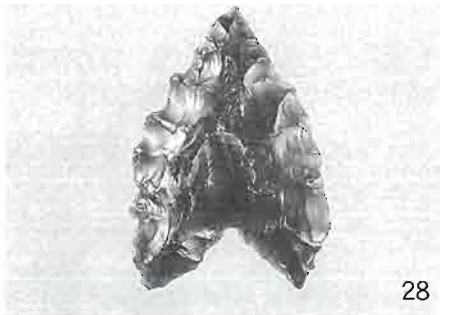
23



26



27



28



29



30



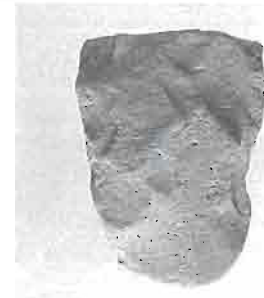
31



32



33



34



35



36

柱穴・包含層出土遺物
(※すべての番号は
挿図中遺物番号に一致)



発掘調査に参加された作業員の皆様

担当者	荏隈マサコ	穴見基彦	高倉厚巳	酒井光敏	荏隈典子	佐藤カスミ	中野ヨシ子	(故)小野多美子	園田光子	財津静子	松本トキエ	石田スズ子	北澤幾子
	高倉ハナ子	菅田クマエ	田中昇	伊藤キヨ子	菅田ミヤコ								
梶原利徳	長谷部喜吉	鍛冶谷アサヨ	吉長澄江	吉長ハルエ		梶原シゲ子		財津勲子	五島勇美子	木下富三郎		武内アイ子	中島カズ子

報告書抄録

ふりがな	おこぎいせき
書名	尾漕遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第30集
編著者名	行時志郎
編集機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2001年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おこぎ 尾漕遺跡	おおいたけんひたし 大分県日田市 おおあざありたあざおこぎ 大字有田字尾漕1197他					19970922～19971105	7500	県営ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
おこぎ 尾漕遺跡		縄文時代	落穴状遺構 4基 溝 2条	縄文土器・石器 弥生土器・石器	
		弥生時代	竪穴住居跡 2軒 甕棺墓 3基		
		古墳時代	溝（道状遺構） 1条 竪穴住居跡 8軒 掘立柱建物 8棟 土坑 1基	土師器・須恵器・石器	
		古代	溝（道状遺構） 4条 竪穴住居跡 1軒 掘立柱建物 10棟 土坑 1基	土師器・須恵器	
		中世	掘立柱建物 1棟 溝 4条 木棺墓 2基 土坑 3基	土師器 瓦質土器 石製品 銅製品	
		近世	溝 2条	築付	

尾漕遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書
第30集
平成13年3月30日

発行 日田市教育委員会
大分県日田市田島2丁目6-1

印刷 日田時報紙器印刷株式会社
大分県日田市二串町345-3